

令和 6 年度 活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学病院 地域医療支援センター
熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座
地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座
感染症対応実践学寄附講座

令和 6 年度 活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学病院 地域医療支援センター
熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座
地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座
感染症対応実践学寄附講座



もくじ

I はじめに

1. 熊本県地域医療支援機構理事長・病院長あいさつ	1
2. 地域医療支援センター長あいさつ	2

2 熊本県地域医療支援機構 (熊本大学病院 地域医療支援センター)

1. 活動概要	3
2. 活動報告	
(1) 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師の キャリア形成支援に関すること	4
(2) 地域の医療提供体制の確保に向けた支援に関すること	7
(3) 女性医師及び子育て医師の就業継続及び復職支援に関すること ..	8
(4) 県内外の医師、医学生等からの相談対応及び求人に関すること ..	13
(5) その他、支援機構の設置目的を達成するために必要な事業	14

3 地域医療・総合診療実践学寄附講座

1. 活動概要	18
2. 活動報告	
(1) 調査研究	19
(2) 教育活動	19
3. 教育拠点	24
4. 地域医療支援の状況	25

4 地域医療・総合診療実践学寄附講座 教育拠点

くまもと県北教育拠点	26
河浦教育拠点	30

5 熊本県医師修学資金貸与学生からの報告

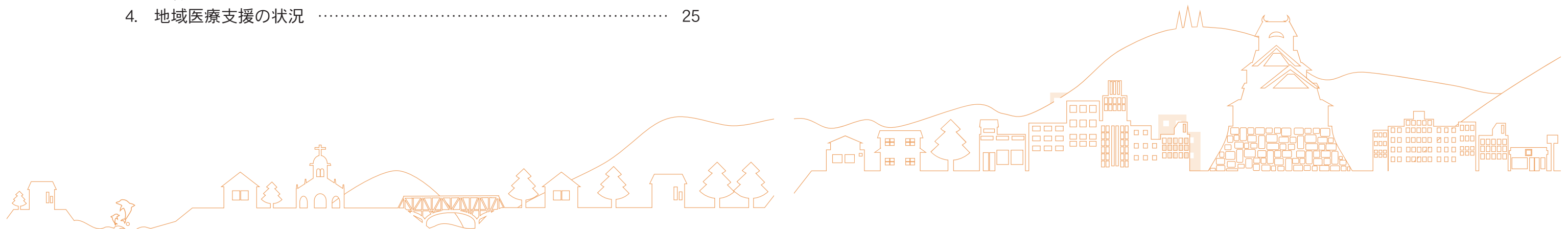
1. 地域医療ゼミ	33
2. 地域医療特別実習	37
3. 令和6年度卒業生の声	41

6 地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座

事業報告総括	44
事業報告及び派遣先医療機関データ	47

7 感染症対応実践学寄附講座

1. 活動概要	113
2. 年間活動実績	114
3. 活動報告	115



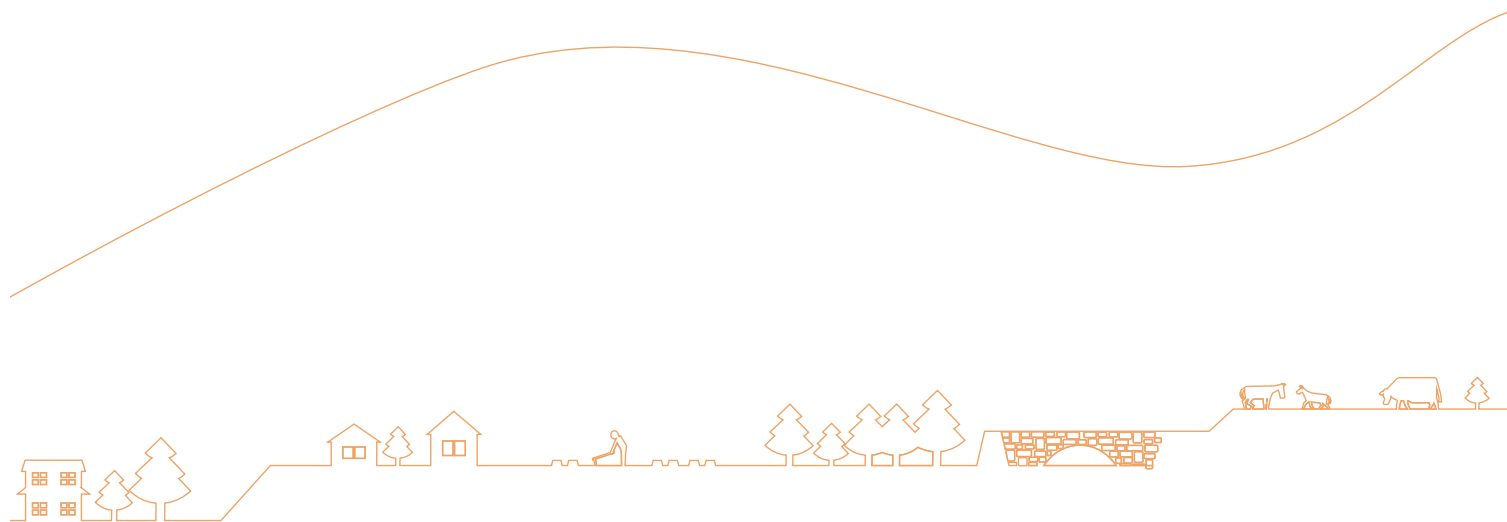
8 業績

論文、執筆	117
研究	118
学会発表	118
講演会、講師	119

9 おわりに

1. 教員	120
2. 拠点指導医・客員研究員	122
3. 総合診療科	124
4. 事務職員	128

10 あとがき



I はじめに

1. 熊本県地域医療支援機構理事長・病院長あいさつ



熊本県地域医療支援機構 理事長
熊本大学病院 病院長

平井 俊 範

皆様方には、平素より熊本県地域医療支援機構の運営、ならびに「地域医療・総合診療実践学寄附講座」、「地域医療連携ネットワーク寄附講座」及び「感染症対応実践学寄附講座」の取り組みに、多大なご支援とご協力をいただき、深く感謝申し上げます。この度、令和6年度の活動報告書を作成しましたので、ご一読いただければ幸いに存じます。

当機構は、平成25年12月、熊本県における医師の地域偏在を解消することを目的として県により設置され、同じく、医師が不足する県内の地域の病院や診療所において必要な医師の確保を図ることを目的として県により創設された熊本県医師修学資金貸与制度（いわゆる「地域枠医師制度」）の運用を主な役割として担っております。

この修学資金貸与制度は、平成21年4月に施行されましたので、令和6年度は、その施行から15周年の記念の年となりました。このため、年度末の令和7年3月には、記念の講演会を開催させていただいたところです。当日、ご参加いただきました皆様には、改めて感謝申し上げます。講演会では、この15年を振り返り、制度の成果や課題等についての講演もいただきました。制度の利用者が令和6年度までに100名を超え、そして70名近くの方がすでに医師となられて、本県の地域医療に大きく貢献していただいているということが、何よりも大きな成果でないかと感じております。

制度創設から15年を経過する中で、今後は、地域枠医師（貸与医師）としての義務を満了される医師も輩出していくこととなります。地域枠医師を卒業される皆様には、立場は変わられることとなりますが、熊本県の医療を支える医療人の一人として、引き続き熊本県の地域医療に関わっていただければ幸甚に存じます。

前述の講演会では、熊本県において若手医師が少ない現状や課題についての報告もありました。県の資料によると、熊本県は全国的には医師多数県に数えられますが、35歳未満の医師の割合は15%未満であり、全国で最も少ないということです。医師の地域偏在の解消に向けた取り組みは、今後とも重要ですが、熊本県における地域医療提供体制を今後も安定的に維持していくためには、地域医療を支える若手医師の養成・確保もまた同様に重要になるということになります。

我々は、新型コロナウイルス感染症の蔓延による社会経済活動の大きな停滞を経験し、地域における持続的かつ適切な医療提供体制の確保を図ることがいかに重要であるかを学びました。医師の地域偏在の解消には長い時間を要しますが、新たな医師の養成・確保にも同様に長い時間を要します。本県の地域医療を取巻く状況が依然として厳しい中であっては、引き続き、本機構と「地域医療・総合診療実践学寄附講座」等の各講座が相互に連携し、それぞれの役割を果たしていくことが肝要です。

本機構といたしましては、今後とも熊本県、医師会、市町村並びに地域医療関係者などの関係諸団体との連携を一層強化し、県内各地のニーズに沿った地域医療が提供されるよう努力して参る所存です。関係者の皆様におかれましては、引き続き変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

（令和7年3月吉日）

2. 地域医療支援センター長あいさつ



熊本大学病院
地域医療支援センター センター長
地域医療・総合診療実践学寄附講座
総合診療科 教授

松 井 邦 彦

熊本県地域医療支援機構／熊本大学病院地域医療支援センター、および地域医療・総合診療実践学寄附講座、地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座、感染症対応実践学寄附講座の、令和6年度の報告書をお送りいたします。ご高覧いただければ幸いです。

今年は、熊本県医師修学資金貸与制度の創設から15周年となる節目の年でした。恒例の機構講演会は「15年間を振り返って」と題し、これまでの私たちの取り組みをまとめる機会とさせていただきます。私自身にとっても、これまでの活動を振り返る良い機会となりました。本制度は、熊本県内における地域の医師不足の解消を目指し、2009年(平成21年)に創設されました。私が現在の役職に就いたのは、2014年(平成26年)のことです。以来、前任者より受け継いだシステムに、新たな取り組みを加え発展させ、この難題に取り組んできました。

卒前の教育としては、貸与学生が将来、県内地域の病院で活躍できるよう、さまざまな教育活動を行ってきました。個別面談では直接の意見交換を行い、毎月の地域医療ゼミや、実際に施設に赴く地域医療特別実習などを通じ、自身で地域の現状を感じ、将来のキャリアを具体的に思い描くことが出来るよう、スタッフ一同で取り組んできました。更に医師となられた後も、貸与医師が安心して地域で働き続けることが出来るよう、それぞれのニーズに応じた多角的なサポート体制を整えました。妊娠や出産といったライフイベントを迎えた方々には、復職支援や勤務形態の調整に関するアドバイスを行うといったことも行っています。

この15年間で、熊本県全体の人口10万人あたりの医師数は、約20%増加しています。この少ない部分で、本制度が寄与していると捉えています。現在、本制度より地域医療の第一線で活躍する貸与医師の方々は55名(臨床研修医を除く)にも達し、県内地域の人々の健康を守る大きな力となっていることは、疑いのない事実です。しかしながら、地域間での医師偏在という問題は、依然として存在しています。医師のキャリア形成と、地域の方々や施設のニーズとのバランスを、いかに最適化していくかということが、これからも続く我々の重要な課題です。

私たちは、これまでの経験と学びを活かし、貸与学生や医師の皆様や関係者の皆様との連携を大切にしながら、透明性と公平性のある制度運営を行い、これからも「熊本県内地域における理想の医療の提供」を目指していきます。熊本の地域医療が継続して発展し続けることが出来よう、努力を続けていきます。引き続き皆様のご支援とご協力を、心よりお願い申し上げます。

(令和7年3月吉日)

2 熊本県地域医療支援機構 (熊本大学病院 地域医療支援センター)

1. 活動概要

熊本県地域医療支援機構は、熊本県(以下「県」という。)における医師の地域偏在を解消することを目的として、県内における医師不足の状況等を把握・分析し、医師のキャリア形成支援と一体的に医師不足医療機関の医師確保の支援等を行うため、平成25年11月に県により設置されました。以来、本機構が担う事業の一部については、県から国立大学法人熊本大学に委託され、同大学病院に設置されている地域医療支援センターと本機構が一体となって様々な事業を実施しているところです。

令和6年度においても、本機構の理事会において承認された令和6年度事業計画に基づき事業を進めて参りました。また、県の寄附を受けて、熊本大学(大学病院)に設置されている地域医療・総合診療実践学寄附講座や地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座とも密接に連携しつつ、県内の地域医療連携ネットワークを構築することにより、地域の安定的医療体制の整備・充実に努めました。

【主な取り組み】

- (1) 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師のキャリア形成支援
- (2) 地域の医療提供体制の確保に向けた支援
- (3) 女性医師及び子育て医師の就業継続及び復職支援
- (4) 県内外の医師、医学生等からの相談対応及び求人に関する取り組み
- (5) その他、機構の設置目的を達成するために必要な取り組み
 - ・熊本県地域医療支援機構講演会の開催
 - ・地域医療支援機構広報誌「COCODE！(ココデ)」の発行

【スタッフ】

熊本大学病院 地域医療支援センター

センター長	松井 邦彦(総合診療科 教授)
副センター長	荒木 智(総合診療科)
特任助教	高柳 宏史(総合診療科)
特任助教	堤 龍子(総合診療科)
地域医療支援コーディネーター	無田 英昭
地域医療支援コーディネーター	川添 光芳
女性医師復職支援コーディネーター	原田 淳子
事務補佐員	横手友紀子

客員研究員

古賀 義規(御所浦診療所 所長)
片岡恵一郎(小国公立病院 院長)
松本 朋樹(松本内科・眼科 理事)

2. 活動報告

(1) 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師のキャリア形成支援に関すること

- ① キャリア形成プログラムに基づく修学資金貸与学生及び医師へのきめ細やかな支援（一人一人の状況に応じた助言、相談対応、熊本大学病院各診療科との連携・調整等）

● 貸与学生及び貸与医師に対する情報提供、相談窓口の運営(通年)

貸与学生及び貸与医師のキャリア形成と義務履行の両立を支援するために、修学資金貸与制度に関する貸与学生等からのメールや電話による質問や相談等に適宜対応するとともに、キャリア形成プログラムの改正など制度改正等が行われる都度、メールやホームページにより必要な情報提供を行いました。

また、貸与医師が義務年限及び当該義務の履行状況が確認できるよう、年度当初に、貸与医師(65名)へ義務履行の状況を文書で通知しました。

● 知事指定病院等への協力依頼（令和6年4月）

貸与医師が勤務する知事指定病院等の病院長に対して、貸与医師のキャリア形成支援への協力を依頼する文書を発出するとともに、第2、第3グループの知事指定病院等に勤務する医師については、専門性向上等のため毎週1回の勤務先以外の医療機関での研修実施について協力を依頼しました。

● 貸与学生及び貸与医師との面談の実施(令和6年5月～10月)

県医療政策課と連携して、貸与学生35名(既卒者1名を含む)、貸与医師65名計100名を対象に対面形式(県外病院勤務医師1名及び県外枠2名を除く)に面談を実施しました。

貸与学生については、生活状況や将来の希望等について聞き取り、各学生の状況に応じた生活面、学習面等に関して指導、助言を行いました。

貸与医師については、生活状況や勤務状況、今後のキャリアプラン等について聞き取り、各医師の状況に応じた指導、助言を行いました。

● 地域医療特別実習の実施（令和6年8月、12月）

地域医療特別実習は、貸与学生や自治医科大学生(熊本県出身者)のキャリア形成支援の一環として、地域医療マインドの醸成を図ることなどを目的に、地域医療・総合診療実践学寄附講座と連携し、毎年度、県内各地域に出向いて実施しており、今年度は夏季(8月)と冬季(12月)に実施しました。

8月に一泊二日の日程で、上球磨地域(多良木町、湯前町、水上村、あさぎり町)及び五木村において実施した夏季実習には、貸与学生等19名(うち1名は一般学生)及び自治医大生9名の計28名が参加しました。また、12月に一泊二日の日程で、上益城地域において実施した冬季実習には、夏季実習に参加できなかった貸与学生9名が参加しました。

夏季実習、冬季実習ともに、夕刻には、実習に協力いただいた医療機関や行政機関の関係者、地域医療従事者の先輩医師等との懇談会・意見交換会も実施し、学生にとって地域医療に関わる多くの学びを得た充実した実習となりました。

(詳細については37ページ参照)

● 熊本大学病院関係診療科(医局)への訪問（令和7年1月）

熊本県医療政策課と連携し、令和7年度から専門研修プログラムに従事する貸与医師が所属する予定の診療科(医局)を訪問し、修学資金貸与制度について説明を行うとともに、貸与医師がキャリア形成プログラムに基づきキャリア形成と義務履行の両立を図ることができるよう働きかけました。

② キャリア形成プログラムに基づく修学資金貸与医師に係る派遣計画案の作成及び負担軽減策の実施

● 貸与医師の派遣人事説明会の開催（令和6年6月）

次年度の派遣計画案の策定を、熊本大学病院の関係診療科(医局)の理解と協力を得てより円滑に進めるため、県医療政策課と連携し、貸与医師の派遣人事に関する説明会を開催しました。

説明会では、県医療政策課から、大学病院の関係診療科長・医局長に対して、医師修学資金制度や貸与医師の令和7年度の派遣先医療機関決定に向けた事務スケジュール等について説明を行うとともに、①貸与医師との面談時に貸与医師が提出する次年度勤務先の希望調書やキャリアプランに関する「医局と貸与医師との意見交換の実施」、②各診療科(医局)に所属する貸与医師の令和7年度派遣先医療機関の調整結果の報告等について協力を求めました。

● 貸与医師の派遣計画案の策定（令和7年2月）

令和7年度に医師3年目以上となる医師(令和7年度に専門研修プログラムに従事する医師を除く)については、各診療科(医局)における貸与医師の派遣人事の調整結果の報告(10月)をベースに、県内各地域における医師不足の状況や研修先・勤務先の状況等を踏まえつつ、貸与医師本人の意向も尊重しながら、必要に応じて、貸与医師が所属する大学病院の診療科(医局)との調整等を行った上で、派遣計画(勤務先)案を作成しました。

派遣計画案の概要は次のとおりです。

1) 対象医師（時点：令和7年4月1日） ・医師年数3年目以上の医師 55名 ・臨床研修医師（医師年数1～2年目）14名（予定）	2) 医師3年目以上の医師の病院区分ごとの派遣数 ① 知事指定病院等 44.1人（32.5人） ・第1グループ 17.6人（14.4人） ・第2グループ 14.5人（13.5人） ・第3グループ 12.0人（4.6人） ② その他の病院（後期研修・義務内） 6.0人（9.0人） ③ その他の病院（後期研修・義務外） 4.9人（10.5人）
※年度内に勤務先（勤務する病院）が変わり、複数の病院で勤務する貸与医師もいるため、人数は「人年法」でカウント。 ※（ ）は令和6年度の実績。	

③ 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師を支援する制度の運営

● 貸与学生及び貸与医師に対する修学資金貸与制度及びキャリア形成プログラムについての周知徹底（通年・一部再掲）

地域医療・総合診療実践学寄附講座と連携し、県医療政策課の協力も得て、新入学貸与学生を対象とした制度説明会(令和6年4月)及び、貸与学生を対象とした制度とキャリア形成に関する説明会(令和7年2月)を開催したほか、貸与学生及び貸与医師の面談(令和6年5月～10月)等の機会を活用し、制度とキャリア形成プログラムの周知を図りました。

また、キャリア形成プログラムの改正(令和7年3月)に際して、貸与学生及び貸与医師に対してメールで直接通知するとともに、支援機構のホームページに改正に関する情報を掲載するなどして周知を図りました。

【熊本県医師修学資金貸与人数一覧(2025年3月現在)】 (単位：人)

区分	年数・学年	地域枠	一般枠	県外枠	計	男	女
後期研修 /地域勤務	11年目		3		3	2	1
	10年目	4	1		5	3	2
	9年目	4	4		8	7	1
	8年目	5	2		7	4	3
	7年目	5	4		9	7	2
	6年目	3	6		9	8	1
	5年目	5			5	3	2
	4年目	5	3		8	5	3
	3年目	6	1		7	2	5
	小計	37	24	0	61	41	20
臨床研修	2年目	6	1		7	2	5
	1年目				0		
	小計	6	1	0	7	2	5
在学生	6年生	6		1	7	3	4
	5年生	4		1	5	3	2
	4年生	4			4	2	2
	3年生	2			2	1	1
	2年生	9			9	5	4
	1年生	7			7	4	3
	小計	32	0	2	34	18	16
合 計		75	25	2	102	61	41
						59.8%	40.2%

● 知事表敬訪問及び知事感謝状贈呈(令和 7 年 3 月)

令和 6 年度に大学を卒業し、令和 7 年度から医師として医療機関での勤務を開始する修学資金貸与者 6 名のうち 3 名(※ 3 名所用のため欠席)が木村知事を表敬訪問し、それぞれが、今後貸与医師として地域医療に携わる抱負等を語った後、知事から激励の言葉をいただきました。

また、令和 6 年度末をもって義務年限を満了する貸与医師 3 名が、同じく自治医科大卒業医師で令和 6 年度末をもって義務年限を満了する医師 2 名と共に、知事から感謝状の贈呈を受けました。

知事表敬訪問及び感謝状贈呈の様子



令和 6 年度卒業生挨拶



知事からの激励



感謝状贈呈



2025年3月19日 熊本県庁 5 階 知事応接室

④ 熊本県医師修学資金貸与条例に規定する知事指定病院等における
医師不足の状況等に関する調査・分析

● 第 2、第 3 グループの知事指定病院等の状況に関する調査の実施 (令和 6 年 10 月)

知事指定病院の中でも特に医師の確保が難しい第 2、第 3 グループの 18 病院等を対象に実施してきた本調査については、調査結果を、医師修学資金貸与制度の運用に有効かつ適切に活用するとともに、事務の効率化・負担軽減につなげるために、調査項目(調査票)及び調査の実施時期等の見直しを行いました。

・見直しの内容・ポイントは次のとおり。

(1) 調査項目(調査票)の見直し

① 医師不足の状況把握を主とした調査とする。

- ・常勤及び非常勤医師の現状とその評価・認識を問う設問を主とする。
- ・医師不足の状況把握に直接関係がない調査項目は割愛する。

② 貸与医師(地域枠医師)の知事指定病院等への派遣を前提とした調査とする。

- ・貸与制度の運用に活用するため、貸与医師の知事指定病院等への派遣を前提に、貸与医師の受入れに関する事項を問う設問を追加する。

(2) 調査時期(取りまとめ時期)の見直し

- ・貸与制度の運用(医局や県・機構による派遣調整等)に活用できるよう、調査の実施時期(取りまとめの時期)を調整する。

⑤ その他

● 地域医療ゼミの開講 (通年、一部再掲)

貸与学生へのきめ細やかな支援の取り組みの一環として、地域医療・総合診療実践学寄附講座との連携により、貸与学生及び自治医科大生(熊本県関係者)の地域医療マインドを卒前から涵養していくことを目的に、地域医療ゼミを開講(毎月 1 回)し、年間を通して、学生企画を基本としたシネメデュケーションや多職種連携についての演習、コミュニケーションをテーマに外部講師による講演会等を行いました。

また、本ゼミにおいては、県医療政策課と連携し、新入学貸与学生を対象とした制度説明会(4 月・再掲)や、貸与学生を対象とした修学資金貸与制度と医師としてのキャリア形成に関する説明会を開催し(2 月・再掲)、制度とキャリアに関する学生の理解が深まるよう支援に努めました。

● 地域医療総合演習の開講

令和 4 年度の文部科学省のポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業に採択された長崎大学、熊本大学、鹿児島大学の 3 大学連携プロジェクトの一環で、熊本大学では、医学科のカリキュラムの選択科目として、特に貸与学生(5 年次)を主な対象にした地域医療総合演習を開講(毎月 1 回)しました。教育指導者として必要な能力を講義とワークショップ形式で学習し、11 月の地域医療ゼミでは受講学生が講師となり他の貸与学生に教育を行うことで、教育指導者としての学びを深めることができました。

(2) 地域の医療提供体制の確保に向けた支援に関すること

① 医師が不足する医療機関への診療支援並びにテレビ会議システム等を活用した教育支援

当機構の専任医師が、医師が不足する医療機関に対して次のとおり診療支援を行った。

専任医師名	支援先医療機関	支援内容
高柳 宏史	上天草総合病院	非常勤 通年(週 1 回)
高柳 宏史	御所浦診療所	非常勤 通年(週 1 回)
堤 龍子	山都町包括医療センターそよう病院	非常勤 通年(週 1 回)

● 医師が不足する医療機関への診療支援 (通年)

上記の専任医師による診療支援のほか、地域医療・総合診療実践学寄附講座との連携により、以下のとおり、同寄附講座の医師が常勤又は非常勤の医師として、医師が不足する病院へ赴き診療支援を行いました。

医師名	支援先医療機関	支援内容
松井 邦彦	くまもと県北病院	非常勤 通年(週 1 回)
荒木 智	有明医療センター	非常勤 通年(週 1 回)
荒木 智	天草中央総合病院	非常勤 通年(週 1 回)
佐土原 道人	阿蘇医療センター	非常勤 通年(週 1 回)
北村 泰斗	くまもと県北病院	非常勤 通年(週 1 回)
北村 泰斗	山都町包括医療センターそよう病院	非常勤 通年(週 1 回)
鶴田 真三	天草市立河浦病院	常勤
中村 孝典	くまもと県北病院	常勤

● 合同カンファレンス、レジデントデイの実施（通年）

地域医療・総合診療実践学寄附講座との連携により、総合診療科の若手医師を対象に、テレビ会議システム等を活用した合同カンファレンスやレジデントデイなどの取組みを実施し、総合診療医としての能力向上に向けた助言、指導を行いました。

● 医療情報の提供（通年）

インターネットによる臨床支援ツールである「今日の臨床サポート」の利用登録を行い、貸与医師や貸与学生、自治医科大学卒の医師（義務履行中の者に限る）や自治医大生が、エビデンスに基づく最新の医療情報や幅広い診療科にわたる臨床手技に関する情報を入手できる体制を構築しました。

また、地域医療を支える総合診療医を育成するため、特別臨床実習（クリクラ）で総合診療科を選択した学生に対して、実習医療機関での「今日の臨床サポート」の医療情報を実習期間限定で提供しました。

「今日の臨床サポート」活用実績 （令和7年2月現在）	
ユーザー登録数	214人
全ログイン件数	3,804件
全アクセス件数	28,978件

② 熊本県地域医療連携ネットワークの構築に向けた全体調整

地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座との連携の下、熊本県からの要請に基づき、熊本大学病院の関係診療科と調整を行い、熊本大学病院から医師26名を地域医療拠点病院等に所属する常勤医師として派遣することにより、地域の中核的な医療機関の機能強化を図りました。

また、同寄附講座の特任教員24名を、週2日、非常勤医師として地域の医療機関に派遣し、同医療機関において専門医療を提供するとともに、同医療機関に所属する貸与医師や研修医に指導等を行うことにより、上記の常勤医師の派遣と併せて、地域医療連携ネットワークの構築による、地域の安定的な医療体制の整備・充実に努めました。

同寄附講座の特任教員が担う上記の役割を明文化した職務通知書を作成し、各特任教員に熊本大学病院長から交付することで、特任教員が地域医療連携ネットワーク構築に係る役割を認識、理解を深める取組みを実施しました。

③ 地域の医療機関・自治体に対する将来の医療提供体制の構築に向けた 助言・提案、関係機関の役割や方向性に関する連携、調整の支援

地域医療・総合診療実践学寄附講座との連携により、くまもと県北病院及び河浦病院に教育拠点を設置し、地域で必要とされる医師の育成・教育機能向上を図るとともに、当該講座から派遣した教員が病院で診療を行う（再掲）ことを通して、地域で求められる医療に適切に対応できる医師の育成と病院の医療機能の向上に貢献しています。

また、本機構（地域医療支援センター）及び同寄附講座の教員が、診療支援先の病院において、医療提供体制の課題等について情報を共有するとともに、意見交換を通して地域に求められる医療提供の充実に努めています。

(3) 女性医師及び子育て医師の就業継続及び復職支援に関すること

① 専任医師及び復職支援コーディネーターによる就業継続・復職支援、 地域の医療機関に対する女性医師及び子育て医師支援に関する提案や助言

● お留守番医師制度

週1回（場合によっては月1回も可能）から復職したい方へ「お留守番医師制度」を設けています。「お留守番医師制度」では、家庭との両立や自身の健康などに不安を抱える方にも復職しやすい環境の協力機関

（現在18医療機関）と連携しています。

在宅医療を開始したい医療機関にとっては、代診医師の確保につながり、地域住民にとっては、かかりつけ医の訪問診療を受けることが可能になるWin-Winの相互システムです。

- ・登録医療機関：18件
- ・利用医師数：令和6年度 新規0名（継続1名）



休職中の先生方に
外来診療に協力が欲しい診療所の情報を提供しています。

- ・かかりつけ医が訪問診療を行っている間、週1回程度外来診療に協力してください。
- ・人材を募集している医療機関の情報を開示し、まずは体験の機会を得て頂くシステムです。条件が合えば外来診療の協力が繋がれると思います。
- ・就労中こどもの保育が必要な場合は保育施設をご紹介します。メディッククラブを利用される場合、保育料は無料です。
- ・勤務先によっては、就労日のこどもの急な発熱時などは訪問診療日を変更するなどの対応が可能です。



・詳細につきましては下記までご相談ください。

お問い合わせ：熊本県地域医療支援機構（熊本大学病院 地域医療支援センター内）
TEL:096-373-5795
メールアドレス：k-joseiishi@kumamoto-u.ac.jp

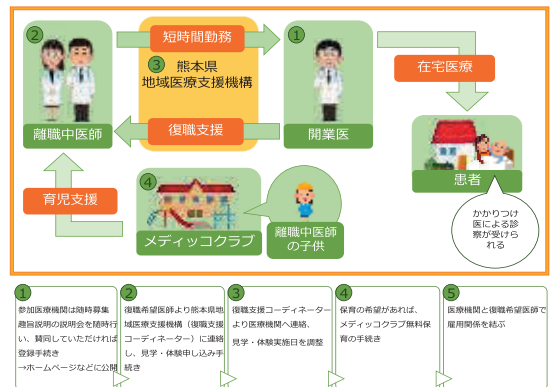
【お留守番医師制度に加入している医療機関】

熊本市中央区	明午橋内科クリニック	菊池市	宮本内科クリニック
熊本市南区	土井内科クリニック	阿蘇郡	阿蘇立野病院
熊本市南区	御幸病院	上益城郡	谷田病院
熊本市北区	清藤クリニック	上益城郡	山地外科胃腸科医院
熊本市北区	なかむらファミリークリニック	上益城郡	益城なかぞのクリニック
熊本市北区	まえだクリニック	宇土市	宇土中央クリニック
荒尾市	西原クリニック	宇城市	済生会みすみ病院
玉名市	ひがし成人・循環器内科クリニック	宇城市	中村医院
菊池市	菊池郡市医師会立病院	水俣市	山田クリニック

● 県内の病院における短時間勤務制度及び復職支援の状況（令和5年度時点）

短時間勤務制度

熊本県女性医師キャリア支援センターの復職支援コーディネーターが復職希望者の体験申込みを受けて在宅医療を開始したいドクターと繋ぎ体験日を決めます。体験が上手くいけば当事者同士で3か月更新の契約を結びます。この制度で勤務中には、体験時のみ熊本市医師会保育所「メディッククラブ」が無料で利用できます。



- 女性の貸与医師及び自治医卒医師を対象に少人数の意見交換会を7回開催。対象者には事前に仕事や生活に関する思い等のアンケートを実施した。延べ24人(実21人)の女性医師が参加し、各医師が情報交換を通して顔見知りを増やし、疑問点の解消や有益な情報を得る機会となった。
- 女性医師のネットワークづくりのため、女性の貸与医師・自治医卒医師のグループLINEを設定し、有益情報の提供や情報交換しやすい環境づくりを行った。



② 熊本県地域臨床実習支援制度の実施

医師を目指し県外の大学（医学部）で学ぶ学生が、県内の医療機関で実施する臨床実習等を支援し、将来の医師偏在の是正や医師不足の解消につなげることを目的とした本制度（肥後ふるさと医学生実習支援事業）について、令和6年度においても令和6年7月～令和7年2月に実施しました。また、全国（県外）の大学の医学部や医学系の大学などに、本制度のチラシや実施要領等を送付するなどして広報を行いました。

【事業内容】

対象者	熊本県外の大学に在籍する医学部生
募集人数	5名（申込先着順）
実施期間	2024年6月～2025年2月末まで
実習期間	2日間～5日間
実習内容	診療参加、診療見学等
実習先	実習協力医療機関
支援内容	実習実施のために必要な交通費及び宿泊費等

くまもとの
地域医療は
覗いてみらんわ？

令和6年度
肥後ふるさと
医学生実習
支援事業

熊本県の地域医療に関心があり
地域医療の現状を学びたい全国の医学部生の皆さんを対象に
県内の医療機関で行う実習の費用（交通費・宿泊費等）を支援します。
（※支給条件あり）

対象者	熊本県外の医学部に在籍する学生 ※国内設置大学に限る
募集人数	5名 ※申込先着順
実施期間	2024年6月 ～ 2025年2月まで
実習先及び 実習内容	実習協力医療機関（裏面参照） 診療参加、診療見学等
実習期間	2日～5日間 ※5日以上の実習も可能ですが、支援対象は5日分以上となります。
支援内容	実習の実施のために必要な交通費及び宿泊費等 ※本事業を委託して実施している熊本大学の規程に基づき支払います。
お申込方法・ 申込み先等	実習を希望する医療機関に本事業による実習の希望を申し出て調整いただき、 受入れが決まったら、実施日の20日前までにお申し込みください。 ※詳しくは、熊本県地域医療支援機構のホームページでご確認ください。

ご不明な点などは、熊本県地域医療支援機構へお問い合わせください。
ホームページ（右QRコード）をからもご確認ください。

熊本県地域医療支援機構（熊本大学病院 地域医療支援センター内）
TEL 096-373-5627 E chiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp

③ 県内外医師へのリクルート活動

機構のホームページ上に、熊本県が開設している医師の求人情報サイト「熊本地域医療ステーション」のリンクを張り、求人情報を提供しました。

(5) その他、支援機構の設置目的を達成するために必要な事業

① 熊本県地域医療支援機構理事会の運営

令和7年2月17日（月）、「第17回熊本県地域医療支援機構理事会」を開催し、以下の議題について審議され、いずれも異議なく承認されました。

【議題】

- 令和6年度（2024年度）事業実績について
- 令和7年度（2025年度）事業計画案について
- 令和7年度貸与医師派遣計画（勤務先）案について

② 地域医療に関する周知啓発

- 熊本県地域医療支援機構講演会（令和7年3月）
「令和6年度 熊本県地域医療支援機構講演会」
熊本県医師修学資金貸与制度 創設15周年記念講演

- 【日時】
令和7年3月18日（火）18：30～
- 【会場】
熊本大学病院 くすのきテラス 3階大会議室
（対面とオンライン併用によるハイブリッド方式）
- 【参加者】
現地とオンライン参加を合わせて77人（定員：80人）が参加

＜講演内容＞

- 「熊本県が描く地域医療の未来について～ 第8次熊本県保健医療計画が目指すもの～」
熊本県健康福祉部健康局医療政策課 課長 笠 新
- 「この15年を振り返って」
熊本県地域医療支援機構理事
松井邦彦（熊本大学病院 地域医療支援センター長）
- 「貸与医師としての義務を終えて」
熊本大学病院 総合診療科 医師 松田圭史

令和6年度は、医師修学資金貸与制度創設15周年記念の講演会として開催しました。県内の医療機関の病院長をはじめ医師、コメディカルなどを中心にした地域医療関係者や学生など全体で77名の方にご参加いただきました。

講演後のアンケート（32名が回答）では、「貸与制度の現状や成果、課題等についてよく理解できた」、「実際の卒業（地域枠）医師の考えを聞くことができ、理解を深めることができた」、など多数の意見があり、回答者の約87％から「大満足」、「満足」との評価をいただきました。

また、熊本県の地域医療や就学資金制度に対する意見として、「貸与医師（地域枠医師）の派遣にあたり、一部の医療機関に集中しないよう配置調整をお願いしたい」、「県立の総合病院を持たない分、県として地域医療にもっと財源投入をしてほしい」、「修学資金制度の継続を是非ともお願いしたい」などの意見も寄せられ、医療関係者が今後の熊本県における地域医療の在り方等を考える良い機会となりました。

- ホームページ、メールマガジンによる情報発信等（通年）

機構が実施する講演会等の取り組みや前述の広報誌「COCODE」の電子版を支援機構のホームページに掲載し、情報発信するとともに、支援機構のメールマガジンの登録者に対してダイレクトに情報提供に努めました。

- 広報誌「COCODE！（ココデ）」の発刊（令和7年2月）

医学生や若手医師並びに将来医師を目指す高校生等に地域医療及び総合診療に関する理解を深めてもらうとともに、地域住民に対して地域医療にかける医師の熱い思いや奮闘ぶりを伝えるための広報誌「COCODE！Vol.8（くまもと県北病院等）」を2月に発刊しました。なお、今回から、学生等の読者の興味を引くように、掲載内容等をリニューアルし、さらにページ数も増やし充実を図りました。

令和6年度 熊本県地域医療支援機構講演会

**熊本県医師修学資金貸与制度
創設15周年記念講演**

「熊本県医師修学資金貸与制度が創設15年を迎え、昨年度は初の歳暮年賀演説が誕生するなど、制度が定着し、令和6年度は新たなスタートを切る節目の年となりました。本講演会を通して、熊本県が描く地域医療の未来について、関係者との思いを共有するとともに、これまでの活動を振り返り、今後の活動に向けていくための機会といたします。

開催日時
**3月18日（火）
18:30～20:30**

開催方法
ハイブリッド開催
【会場】
熊本大学病院
くすのきテラス3階 大会議室
※裏面詳細を参照ください。

～ 講演 ～
熊本県が描く地域医療の未来について
～ 第8次熊本県保健医療計画が目指すもの～
熊本県健康福祉部健康政策課 課長 笠 新

この15年を振り返って
熊本県地域医療支援機構 理事
（熊本大学病院 地域医療支援センター長） 松井 邦彦

貸与医師としての義務を終えて
熊本大学病院 総合診療科 医師 松田 圭史

【対象】
・地域医療に関わる医師
・医療関係者
・自治体職員 等

【参加費】
・無料

※本講演会は日本プライマリ・ケア連合学会
認定医療者のための単位付発行の対象です。
・聴講単位：1.5単位
・オンライン参加：0.5単位

～ 参加申込 ～
専用申込フォームから必要事項をご記入のうえ
お申し込みください。
※オンライン参加申込の申し込み、会場、聴講参加をご案内いたします。
お申し込みはこちら
受付期日：2025年3月12（水）
※詳細は「COCODE！」をご覧ください。

主催：熊本県地域医療支援機構
共催：熊本県医師会、熊本県看護協会、熊本県助産師会
後援：熊本大学病院、地域医療支援センター内
協力：日本プライマリ・ケア連合学会

お問い合わせ先
熊本県地域医療支援機構事務局
TEL 096-373-5627 E chiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp

COCODE!

ココデ

2025 Spring vol.08

Top Interview
県北エリアと、
わたしが交わした
3つのミッション

くまもと県北病院
病院長 田宮 貞宏 先生

COCODEが
リニューアル!
ぜひ読んでください!

ご自由にお持ち帰りください
熊本県地域医療支援機構 広報誌

熊本県地域医療支援機構
熊本県中央地区センター内
熊本県中央地区センター111
TEL:096-378-5027
http://www.cokk.jp/suumamotb.org/

「ここ、熊本で、地域の医療を支える。」

たいせつなぶんぽう、
たいせつなひとを診る。

九州
熊本

2025 Spring vol.8

写真/栗山(FA/Y&S) 原田公典氏
文/二ノ宮和典氏

熊本大学病院 総合診療科/地域医療・総合診療医学科 特任助教 北村 孝斗 先生(左)
熊本大学医学部医学科5年 中島 史人 さん(中央)
熊本大学医学部医学科4年 永野 七海 さん(右)

「Why GP?」

熊本大学医学部医学科5年 中島 史人 さん(中央)
熊本大学医学部医学科4年 永野 七海 さん(右)

総合診療医のリアルを直撃
「教えて先輩!」

若手医師×学生2人座談会

日々学びを続ける若手医師と学生が、実際に総合診療医として活躍している若手医師に質問を投げかけ、そのリアルな声や経験を伺った。今回は、熊本大学医学部医学科5年 中島 史人 さんと、熊本大学医学部医学科4年 永野 七海 さんが、総合診療医のリアルについて話を聞いた。

総合診療医のリアルを直撃
「教えて先輩!」

若手医師×学生2人座談会

日々学びを続ける若手医師と学生が、実際に総合診療医として活躍している若手医師に質問を投げかけ、そのリアルな声や経験を伺った。今回は、熊本大学医学部医学科5年 中島 史人 さんと、熊本大学医学部医学科4年 永野 七海 さんが、総合診療医のリアルについて話を聞いた。

「貴重な体験を礎に、次なる挑戦へ」

熊本赤十字病院 総合内科 医師 平賀 円

熊本県医師修学資金貸与制度による地域勤務の義務を終える医師に聞く!

熊本赤十字病院 総合内科 医師 平賀 円

熊本赤十字病院 総合内科 医師 平賀 円

総合診療医は今後の社会で必ず必要とされる最前線医療です。

総合診療医は今後の社会で必ず必要とされる最前線医療です。

総合診療医は今後の社会で必ず必要とされる最前線医療です。

平賀先生の9年間の勤務先

勤務年度	勤務先
2016.4.1～2018.3.31	熊本赤十字病院(総合内科)
2018.4.1～2020.3.31	熊本赤十字病院(総合内科)
2020.4.1～2022.3.31	熊本赤十字病院(総合内科)
2022.4.1～2024.3.31	熊本赤十字病院(総合内科)
2024.4.1～2025.3.31	熊本赤十字病院(総合内科)

2025年春、地域医療の現場で働く医師のサポート体制を強化!

熊本県へき地医療支援機構の専任担当官である小山耕太先生は、自治医科大学卒業後、3～5年目の医師が在籍する病院を定期的に訪問し、診療を通じた教育指導やキャリア支援を行っています。[4月から支援体制を強化したい]と話す小山先生に、今後の支援について話を聞きました。

新たに熊本県医師修学資金貸与医師のサポート等をスタート!

現場で働く医師たちが、やりがいを持って働けるようサポート

医師を目指す中学生・高校生向け無料出前講座が始まります!

令和6年度夏季地域医療特別実習は、8月13日(火)から8月14日(水)の1泊2日の行程で、上球磨地域(多良木町、湯前町、水上村、あざざり町)及び五木村を実習先に設定し、貸与学生等19名、自治医科大学の学生8名、計27名が参加して実施しました。

上球磨地域をフィールドワーク 地域住民や先住民医師との交流も

令和2年7月豪雨の被災現場を見学 復興に向けた取り組みを学ぶ

P20の答え

これまでに発行した COCODE! は、熊本県地域医療支援機構ホームページからご覧いただけます。



3 地域医療・総合診療実践学寄附講座

1. 活動概要

「地域医療・総合診療実践学寄附講座」は、平成 27 年度末に廃止された「地域医療システム学寄附講座」の後継として、平成 28 年 4 月 1 日に設置期間 3 年の講座として設置されました。その後、それまでの実績を踏まえ、本県における医師の地域偏在の解消、地域医療の充実、地域医療に従事する医師育成のためには、引き続き取り組みの継続が必要との熊本県（寄付者）の判断から、平成 31 年 4 月及び令和 4 年 4 月にそれぞれ 3 年間の延長がなされており、令和 6 年度は 3 期目の最終年度となりました。

本講座は、設置目的でもある地域医療を担う医師の養成を目指して、これまでの医師循環システムに関する調査研究や地域医療実習教育に関する調査研究等の成果を踏まえ、「医学生や若手医師への卒前からの一貫した地域医療教育」、「総合診療医の育成」、「地域医療実践教育拠点の運営」など、より実践的な取り組みを進めて参りました。

令和 6 年度においても、熊本大学医学部医学科の学生（熊本県医師修学資金貸与学生を含む。）や若手医師に対して、卒前からの一貫した地域医療教育を通した地域医療マインドの涵養に取り組むとともに、今後、本県の地域医療への貢献が期待される総合診療専門医の育成に向けて、県内の公的病院等の連携を進めるに当たっての中心的な役割を担いました。また、総合診療専門医の育成のために県北及び県南地域に設置している教育拠点において、地域の医療機関に対する積極的な診療支援を行いました。

【主な活動内容】

1. 調査研究
2. 教育活動（卒前教育（カリキュラム外）、卒前教育（カリキュラム内）、卒後教育）
3. 教育拠点への支援
4. 地域医療支援

【スタッフ】

地域医療・総合診療実践学寄附講座

特任准教授	荒木 智（総合診療科）
特任助教	佐土原道人（総合診療科）
特任助教	北村 泰斗（総合診療科）
事務補佐員	山並 美緒、木口知佳子

熊本大学病院 総合診療科

教 授	松井 邦彦
医 員	松田 圭史

総合診療専門研修プログラム専攻医

本田 宏介、西富 友哉、足立 瑛彦、 田添 英典、藤本 千里

くまもと県北教育拠点（くまもと県北病院）

県北教育拠点指導医	田宮 貞宏（総合診療科）
熊本大学非常勤講師	小山 耕太（総合診療科）
特任助教	中村 孝典（総合診療科）

河浦教育拠点（天草市立河浦病院）

特任助教	鶴田 真三（総合診療科）
------	--------------

2. 活動報告

(1) 調査研究

① 地域医療実習教育に関する調査研究

修学資金貸与による義務年限を有する学生の将来のキャリア支援と定着要因の解析のために、地域医療特別実習の教育的効果を見るためのアンケートを例年実施しており、令和 5 年度に行った実習のアンケート結果は、令和 6 年（2024 年）5 月の米国総合内科学会で発表を行いました。

また、参加した学生も参加者の立場からの経験を令和 6 年（2024 年）5 月の第 10 回九州地域医療教育研究会と同年 6 月の第 15 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会で発表を行いました。

② 研究公正・倫理の学修コンテンツ開発に関する研究

令和 5 年度（2023 年度）から、AMED（日本医療研究開発機構）の研究公正高度化モデル開発支援事業の「臨床研究者による活用を目指した臨床研究技能と研究公正の統合学修の実用化」の分担研究開発を行っています。

③ 教育拠点での教育効果についての検証

熊本大学病院総合診療科、各教育拠点が、総合診療専門研修プログラムの基幹施設、連携施設という関係で専門研修プログラムを運用しており、同時に指導教員と総合診療専攻医が初期臨床研修医、地域医療・総合診療に係る学生実習の指導も行っています。

くまもと県北病院教育拠点については、3 名の総合診療専攻医が勤務し、天草市立河浦病院教育拠点は、1 名の専攻医が配属されています。令和 6 年度（2024 年度）においても、レジデントデイなど定期的に開催し、教育効果についてヒアリングし、プログラム管理委員会で諮問して、プログラムの教育効果の検証と改善に取り組みました。

(2) 教育活動

① 卒前教育（カリキュラム外）

● 修学資金貸与学生の支援

将来、地域の病院で勤務することとなる貸与学生に対して、一人一人の状況に応じた助言や個人の相談に対応するため、年度当初（6 月）に、地域医療支援機構と連携して当寄附講座教員が、貸与学生 35 名（既卒者 1 名を含む）の面談を実施（県外大学在学の 2 名の貸与学生を除き、全員対面形式で実施）しました。

面談においては、生活状況や将来の希望等について聞き取り、各学生の状況に応じた生活面、学習面等に関して指導、助言を行いました。特に 6 年生に対しては、将来のキャリアプラン等を聞き取り、進路について義務の履行とキャリア形成の両立に関して個別具体的なアドバイスを行いました。

● 地域医療ゼミ

地域医療ゼミは、地域枠学生等（熊本県医師修学資金貸与学生及び熊本県出身の自治医科大学医学部生）を主な対象に実施しており、令和 6 年度は計 11 回開催しました。

上期では、4 月のオリエンテーションを皮切りに、5 月は災害医療教育センターの笠岡教授や内藤先

生にもご協力をいただき、避難所運営ゲーム（HUG）を用いながら「避難所運営実習」を実施、避難所の運営や管理について学びました。6月には熊大と自治医大をオンラインで繋ぎ「CBT/OSCE」への取り組みや試験対策について学び合い、9月には、映画「人魚の眠る家」を題材にしたシネメデューケーションを実施しました。

下期は、10月に地域医療の最前線で活躍する地域枠医師や自治医卒医師による講演を開催し、ワークライフバランスについて考える機会となりました。11月には、5年次の選択カリキュラム「地域医療総合演習」との教育セッションとして高齢者総合機能評価（CGA）について、レクチャーやグループワークを交えて学び合いました。12月には、自治医大企画として「緩和ケア」をテーマに、オンラインで実施。自治医大卒の4名の医師にもファシリテーターとして協力いただきながら、その課題や解決策についてディスカッションを行いました。1月には、解剖の学び直しを行い、2月には、県医療政策課の協力もいただきながら「制度とキャリア」について学び、3月の追いゼミで1年間の取り組みを総括しました。

（詳細については33ページを参照）

● 夏季地域医療特別実習

地域医療特別実習は、熊本県医師修学資金を貸与されている学生及び熊本県出身自治医科大生を対象として毎年県内各地で開催しています。当実習は、これから地域医療に従事することが予定されている学生が地域の行政関係者及び医療・福祉関係者等に対する聞き取りを通して地域の問題点を探り出すとともに、自らが見聞して体験することで、地域を知り、地域との関係性を身近にする中で、地域医療に前向きに取り組んでいく意欲を醸成することを主な目的としております。

夏季実習は、8月13日（火）～14日（水）の一泊二日の日程で、上球磨地域（多良木町、湯前町、水上村、あさぎり町）及び五木村において実施し、貸与学生等19名（うち1名は一般学生）及び自治医大生9名の計28名が参加しました。協力拠点病院の公立多良木病院では、人吉保健所長から、人吉・球磨地域の医療提供体制についての保健所の取り組みについての講話を聴いたほか、病院長から、病院の説明や案内をいただきました。その後、参加者を4つのグループに分け、グループごとに設定した4つのコースでフィールドワークを実施し、各コースに設定された医療機関、高齢者施設、まちづくり関連施設等を訪問し、地域医療に関わる現場を多様な側面から体感しました。発表会では、学生らが実習で学んだ成果等をグループごとに発表し、実習に協力いただいた行政機関やまちづくり団体の方々との意見交換も行いました。

● 冬季地域医療特別実習

冬季実習は、12月25日（水）～26日（木）の一泊二日の日程で、上益城地域において実施し、夏季実習に参加できなかった貸与学生9名が参加しました。山都町役場では、町から事前に提供を受けた資料を基にして、山都町の保健医療の現状や課題等に関するディスカッションを行いました。協力拠点病院のそよう病院では、病院長から病院の説明や案内をいただいたほか、同病院に勤務中の貸与医師から先輩医師としての体験談や学生へのアドバイス等いただきました。このほか、へき地診療所、高齢者施設、まちづくり関連施設等の見学を行うとともに、そよう病院が立地する地域（馬見原地区）を踏査するまち巡りも実施し、地域医療に関わる現場を多様な側面から体感しました。

② 卒前教育(カリキュラム内)

熊本大学医学部のカリキュラムとして、①医学科4年次学生を対象にした総合診療学、②医学科5年次学生を対象とした選択科目の地域医療総合演習、③医学科5・6年次学生を対象にした特別臨床実習（総合診療科）を担当しました。

● 総合診療学

4年次の学生に対して、全10コマの講義を下記のとおり実施しました。

実施日	科目（講義内容）	担当教員
4月9日	総合診療学概論1（総論）	松井 邦彦
4月16日	総合診療学概論2（EBM、診療ガイドライン）	荒木 智
4月23日	総合診療学概論3（臨床推論）	佐土原道人
5月7日	総合診療学概論4（身体診察）	佐土原道人
5月14日	総合診療学概論5（家庭医療学1）	高柳 宏史
5月21日	総合診療学概論6（家庭医療学2）	高柳 宏史
5月28日	総合診療学概論7（病院総合診療）	小山 耕太
6月4日	総合診療学概論8（高齢者ケア、地域包括ケア）	鶴田 真三
6月11日	臨床推論演習1（体重減少）	北村 泰斗
6月18日	臨床推論演習2（倦怠感）	中村 孝典

● 地域医療総合演習

地域医療総合演習は、医師が地域医療に従事する際に求められる医療者教育を実践するための知識・能力の獲得を目的として、令和5年度から始まった新たな取り組みです。5年生の選択科目（全8コマ）となっており、令和6年度は4名の学生が履修登録をしました。

令和6年度は、「高齢者総合機能評価」を教育テーマとし、高齢者の総合機能評価や認知機能について理解し、疑似症例の評価ができるようになることを目標に設定し、下表のカリキュラムに沿って実施しました。

演習の前半は、教育計画書作成のための基礎知識の習得や教育評価についてのワークショップを実施したほか、11月の地域医療ゼミとの教育セッションにおいて実施する「教育演習」に向けての準備を行いました。11月の地域医療ゼミでは実際に講師となって、ゼミ受講生に対して教育実践を行いました。最後の1コマは、受講生の事前・事後アンケートの結果の考察とともに、教育実践の内省的振り返りをもとにしたカリキュラム評価を行いました。

【担当教員：高柳 宏史】

実施日	内容
4月11日	「教育計画書作成のための基礎知識」
5月9日	「教育テーマ決定」「教育方略・ファシリテーション」
6月13日	「事前アンケート作成に関して」「教育評価について」
7月11日	「教育評価について（WS）」
9月12日	「教育演習に向けて」「役割分担・準備」
10月10日	「教育実習にむけて」「スライド最終チェック、事後アンケート作成」
11月21日	「地域医療ゼミ（教育演習）」
12月12日	「カリキュラム評価」「事後アンケート集計・分析・考察・振り返り」

● 特別臨床実習（総合診療科）

令和6年度の総合診療科の特別臨床実習は、大学病院、くまもと県北教育拠点及び河浦教育拠点の3か所で行い、令和6年度は5年生、6年生合わせて、延べ42人の学生を受け入れ、臨床実習を実施しました。

● その他の講義等

- その他、以下の授業を担当しました。
- ・医学総論（1学年）※ファシリテーター
- ・臨床実習入門医療面接（4学年）
- ・行動科学（4学年）
- ・公衆衛生学（4学年）
- ・PostCC/OSCE（6学年）
- ・IGD/IGE（6学年）

② 卒後教育

● 地域医療に従事する修学資金貸与医師への支援

令和6年度においては、65名の修学資金貸与医師のうち、県外の医療機関に勤務する1名を除く64名が県内の医療機関で医師業務に従事（このうち、14名が特に医師の確保が困難な第2グループの病院に勤務）しました。

地域医療に従事する貸与医師への支援策の一環として、地域医療支援機構と連携し、貸与医師65人全員について面談を実施し（県外の医療機関に勤務する貸与医師1名を除き全て対面で実施）、専門医としてのキャリア形成と義務履行の両立が図られるように、一人一人の実状に沿ったアドバイスを行いました。

● 初期臨床研修医に対する指導

熊大病院群初期臨床研修プログラムで総合診療科を選択した初期臨床研修医1人に対し、内科分野および外来研修の教育指導を行いました。

● 専攻医に対する指導

熊本大学総合診療専門研修プログラムでは、令和5年度に本プログラムを修了した専攻医2人が令和6年度の総合診療専門医の資格試験に合格しました。令和6年度においては、6名の専攻医がそれぞれの基幹施設および連携施設で勤務を行いました。当寄附講座においては、地域で必要とされている総合診療医の育成に向けて、レジデントデイ等の取り組みをはじめ、様々な機会を通じて専攻医に対して必要な指導を行いました。

【レジデントデイの開催】

当寄附講座では、専攻医の研修修了要件であるポートフォリオ（経験省察験修記録）の作成指導等も行っており、テレビ会議システムも活用して、次のとおり、4回のレジデントデイを開催し、専門研修の進捗状況の確認を図り、よりきめ細かい指導を行うとともに、プログラム修了に向けてさらに丁寧な指導を心がけました。

《開催日時等》
第1回：令和6年3月14日（木）19：00～（オンライン開催）
第2回：令和6年7月17日（水）18：30～（オンライン開催）
第3回：令和6年12月7日（土）16：00～ 熊本大学病院 山崎記念館
第4回：令和7年3月14日（金）19：00～（オンライン開催）

● 専門医資格取得後のキャリア支援

本講座では、専門医資格取得後も、熊本大学病院総合診療科として様々なキャリア支援を実施しています。大学病院という診療・教育・研究機関の特色を活かし、個別のニーズに合わせ、臨床経験だけでなくアカデミックなキャリアも含め、様々な研鑽を積むことができることが特徴で、総合診療専門医取得後の5年間は、指導医取得に向けてこれまでも増して重要な時期であるとの考えのもと、様々な指導、支援を実施しています。

令和6年度においても、熊本県内に多数存在する連携機関の協力のもと、専門医資格取得後、変化する各人の様々なニーズに即し、総合診療領域外、あるいは関連する領域についての研修を支援した。1名の専門研修修了者が、緩和ケアの研修を行いました。

また、本寄附講座においては、教員が地域支援先でカンファレンスや相談に応じるほか、対象の医師に対して英語論文の執筆支援も行っています。

さらに、熊本大学の大学院へ進学し、医学博士の修得を目指す者への支援も実施しており、それまでの臨床経験の中で得た様々な疑問の解決を目指し、各人の興味に応じた臨床研究を推進し、学位の取得に向けての指導を行っています。令和4年度からは、社会人大学院学生として、5名が博士課程に在籍しています。

● 総合診療セミナー等の開催

若手医師に総合診療の魅力を伝えながら総合診療プログラムを周知し、熊本大学病院の総合診療の知名度向上を図るとともに、熊本県内及び九州全域において総合診療医の連携強化を図ることを目的とした勉強会である「総合診療セミナー」を令和2年度から開催しています。令和6年度は、総合診療に関心のある若手医師、学生等の総合診療への理解がより深まるよう、次のとおり2回の総合診療グランドラウンドを開催しました。

《開催テーマ等》
7月13日「講演会・症例検討会」 講師：飯塚病院総合診療科 診療部長 清田 雅智 先生
9月13日「生成AIと地域医療・総合診療教育」 講師：岡山大学学術研究院医歯薬科学域 地域医療共育推進オフィス 特任准教授 香田 将英 先生

● 総合診療医育成のためのPR活動

＜SNSやホームページを活用した総合診療科のPR＞
熊本大学病院の新たな診療科として令和3年3月に設置された総合診療科について、総合診療の魅力、必要性、重要性等を医療関係者のみならず一般の方々に理解を深めてもらうために、Instagramやフェイスブック等のSNSを活用して総合診療科の活動状況等を広く紹介しています。

＜熊本大学病院総合診療科ホームページの運用＞
令和5年度に新たに開設した総合診療科のホームページを引き続き運用し、当寄附講座のホームページとリンクするなどして、総合診療の魅力等について理解を深めていただくための多様なPR活動に取り組んでいます。

● 総合診療特別研修プログラムの提示

令和2年度、新しいキャリア支援策として、専門研修に進む卒後3年目以降の貸与医師等に対しては、専門研修プログラム従事前に知事指定病院の第2グループの病院で総合診療「特別研修プログラム」に参加して義務の償還を優先することを選択できる体制を構築しました。「熊本県医師修学資金貸与医師キャリア形成プログラム」の更新に当たって、4年度からキャリア支援策の一つとして同プログラムに掲載し、受け入れできる体制を作っていますが、まだ適用事例はありません。

3. 教育拠点

① 教育拠点設置の目的

地域医療に貢献できる優秀な医師の養成を円滑に行いつつ、地域における診療活動を通じた教育・研究を推進することで熊本県内における地域医療の再生に資することを目的に地域医療・総合診療実践学寄附講座教育拠点を設置しています。

令和3年4月から河浦教育拠点を設置するとともに、「公立玉名中央病院」が組織を改編して「くまもと県北病院」となったことで、同年10月から玉名教育拠点に変えて新たに「くまもと県北教育拠点」を設置しています。

それぞれの教育拠点には、当寄附講座から教員を配置して、地域の施設において求められる医療の提供を行いながら、専門研修医、初期臨床研修医、卒前の医学生に対する教育、さらに研究を実施する施設として、以下の役割を担っています。

② 教育拠点の役割

- i. 総合診療専門医の養成
- ii. 熊本大学病院の臨床研修協力型病院として臨床研修医の教育
- iii. 自治医科大卒医師（自治医）の指導・教育
- iv. 総診特別プログラムに従事する医師の指導
- v. 義務償還のために地域の施設で総合診療医として勤務する他の診療領域の修学資金貸与医師の指導
- vi. 医学部学生の教育（臨床実習の受入れ）
- vii. 病院での臨床に即した研究、地域医療のあり方、教育や人材育成に関する研究、調査

③ 教育活動内容

くまもと県北教育拠点では、熊本大学医学部学生の総合診療科の特別臨床実習、地域医療特別実習の受入れを行うとともに、基幹型臨床研修施設としての臨床研修医の受入れと共に熊本大学病院等の協力医療施設として臨床研修医の受入れも行っています。

また、熊本大学病院総合診療専門研修プログラムの専攻医5人が、総合診療科の指導医の下に研修に従事しました。

さらに、卒前教育として、くまもと県北病院で臨床実習（クリクラ）を行った学生に実習の成果等をオンライン（テレビ会議）により発表させ（TMEC）、指導医や熊大病院地域医療支援センターの教員等が、評価及び指導・助言等を行いました。

河浦教育拠点については、現在当講座の教員1人が常駐し、病院での日々の診療に従事しつつ、総合診療特別実習の学生を受け入れ、実習指導を担当しました。また、総合診療科の専攻医2人が、講座教員の指導を受けながら実地の業務に従事しました。

天草教育拠点については、令和4年（2022年）に寄附講座教員が退職した後、後任の特任助教がいない状況が続いています。

4. 地域医療支援の状況

表のとおり、河浦教育拠点及びくまもと県北教育拠点においては、それぞれ本講座から派遣された医師が、その他の医師が不足している地域については本講座所属の医師が、各病院に対する診療支援を行いました。

●令和6年度における地域医療支援実績

医師名	支援先医療機関	支援内容
松井 邦彦	くまもと県北病院	非常勤 通年（週1回）
荒木 智	有明医療センター	非常勤 通年（週1回）
	天草中央総合病院	非常勤 通年（週1回）
佐土原道人	阿蘇医療センター	非常勤 通年（週1回）
北村 泰斗	くまもと県北病院	非常勤 通年（週1回）
	山都町包括医療センターそよう病院	非常勤 通年（週1回）
鶴田 真三	天草市立河浦病院	常勤
中村 孝典	くまもと県北病院	常勤

この他、熊本県地域医療支援機構／地域医療支援センターと連携し、本講座及びセンターに所属の医師が、大学病院において総合診療科の外来診療に対応するとともに、救急外来診療等も担当しました。

●令和6年度 熊本大学病院 総合診療外来担当医

月	火	水	木	金
荒木 智	松井 邦彦	高柳 宏史	佐土原道人	北村 泰斗
	堤 龍子			

4

地域医療・総合診療実践学寄附講座

教育拠点

くまもと県北教育拠点

1. 活動概要

くまもと県北教育拠点は2015年4月、前身の公立玉名中央病院に地域医療の支援及び地域医療の実践教育を行うべく開設されました。2名の常駐寄附講座教員でのスタートでしたが、2021年3月、玉名地域保健医療センターと合併し、新たに「くまもと県北病院 くまもと県北教育拠点」として移転し、2025年3月現在、指導医4名、総合診療専門医研修の専攻医3名に加え、さらに地域医療・総合診療実践学寄附講座から人的サポート（非常勤医師2名）もあり、病院の診療支援および実践的な教育の提供を継続しています。

2024年卒後臨床研修プログラム研修医（基幹型1年次：5名、2年次：4名、協力型：1名）、特別臨床実習（クリニカル・クラークシップ）の「総合診療科」の受け入れも積極的に行っております。地域医療・総合診療実践学寄附講座スタッフは、医学生、初期研修医、専攻医とともに総合診療科として救急外来、一般外来、入院、在宅医療に取り組み、地域の医療を支援しつつ、実践的な教育を行っています。10年経過した現在までに、診療面については救急車不応受率4％を下回り、救急車受け入れ台数も3400台／年以上を維持（いずれも県北地域最高の成績）しております。結果、2024年度も基幹型研修医は比較的高いマッチ率を維持しております。

教育面については、タイ国のメーファールアン大学医学部との教育協力協定を更新し、日本では経験し難いCross border community medicine（国境を越えた地域医療）研修を当院研修医2名が国際医療実習の枠組みで実施しました。

研究面については、学会発表はもとより、くまもと県北病院卒後臨床研修医による、筆頭著者での英文誌へのケースレポート執筆（昨年度1名達成）も推進しています。更に、言うまでもありませんが、当拠点は地域医療において円滑に発展し、行政並びに玉名郡市医師会とも引き続き協力し、常に前進する次第です。

2. 年間活動実績

月	日	行事
4	1	オリエンテーション
	10	がん拠点病院カンファレンス
	26	研修医振り返り
5	2, 29, 30, 31	研修医振り返り
	16	自治医医師地域医療教育支援@「球磨郡公立多良木病院」
	31	研修医症例カンファレンス
6	1, 2	研修医ふり
	13	マイレシナビ@「熊本城ホール」
	20	自治医医師地域医療教育支援@「球磨郡公立多良木病院」
	14, 18	研修医症例カンファレンス
7	12, 26	研修医症例カンファレンス
	25	自治医医師地域医療教育支援@「上天草総合病院」
8	1	自治医医師地域医療教育支援（Web）
	9	研修医症例カンファレンス
	15	自治医医師地域医療教育支援@「球磨郡公立多良木病院」
	22	自治医医師地域医療教育支援@「上天草総合病院」
	30	第3回熊本県Resident Web Seminar
9	13, 27	研修医症例カンファレンス
	5	自治医医師地域医療教育支援（Web）
	25	自治医医師地域医療教育支援@「上天草総合病院」
	5, 20	研修医振り返り
	16	有明地区研修医合同カンファレンス
10	25	研修医症例カンファレンス
	3	自治医医師地域医療教育支援（Web）
	17	自治医医師地域医療教育支援@「球磨郡公立多良木病院」
	24	自治医医師地域医療教育支援@「上天草総合病院」
	2, 18, 30	研修医振り返り
11	1	自治医医師地域医療教育支援（Web）
	21	自治医医師地域医療教育支援@「球磨郡公立多良木病院」
	8	研修医症例カンファレンス
12	12, 13	研修医症例カンファレンス
	5	自治医医師地域医療教育支援（Web）
	19	自治医医師地域医療教育支援@「球磨郡公立多良木病院」
	26	自治医医師地域医療教育支援@「上天草総合病院」
1	1	研修医症例カンファレンス
	12, 26	阿蘇医療センター総合診療科合同 症例カンファレンス
	16	自治医医師地域医療教育支援@「球磨郡公立多良木病院」
	23	自治医医師地域医療教育支援@「上天草総合病院」
2	9	研修医振り返り
	1/27-2/7	研修医2名 メーファールアン大学実習 Cross border community medicine
3	6	自治医医師地域医療教育支援（Web）
	20	自治医医師地域医療教育支援@「球磨郡公立多良木病院」
	27	自治医医師地域医療教育支援@「上天草総合病院」
3	未定	初期臨床研修 修了式

3. 活動報告

(1) 教育活動

● 特別臨床実習

熊本大学医学部の1チーム3週間の特別臨床実習（総合診療科 クリニカル・クラークシップ）をくまもと県北教育拠点で受け入れています。

本年度も各学生に入院患者の担当を割り当て、それぞれが日常診療業務に医療スタッフの一員として診療に参加し、診療の中から自らのクリニカルクエストョンを見出し、これに基づいた論文検索から担当患者への適応までを期間内で実践することとし、学習成果の発表を抄読会形式で実施し、評価の場としております。

また、教育協力協定を締結しているメーファールアン大学医学部に、当院研修医2名を派遣し、タイ及びラオスでの国境地域医療実習を実践しました。この取り組みは、研修医実習の一貫で、将来の人種多様性にも順応に対応できる医師を育成する為、言葉や文化の違いを体験することを目的にしています。

一方で、くまもと県北教育拠点責任者で総合診療科部長の小山先生が、教育拠点での成果を基に、2023年4月から熊本県医療政策課に熊本県へき地医療支援機構 専任担当官として着任し、教育対象を県北地域から熊本県全土に広げ、特に自治医科大学医学部学生及び卒業医師、熊本県医師修学資金貸与医師の教育支援に取り組んでおります。

今後、熊本県地域医療発展のため、多くの視点、広い視野、俯瞰して見る／診る視点の高さを追求し続け、多くの医学生が満足できる地域での医学教育の環境、質の向上に努めます。

「ゆっくりだけど、確実に前進」



ラオス国境地域医療実習



タイ少数民族に対する地域医療実習

～ くまもと県北教育拠点における週間スケジュール ～

1-2週					
	月	火	水	木	金
7:30			プライマリケア レクチャー	プレゼン 研修	
8:00	救急合同 カンファ	モーニング レクチャー			
8:30	医局ミーティング/総合診療科入院患者様回診				
9:00	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修
13:30	外来レビュー	外来レビュー	訪問診療 or	外来レビュー/ 各種講義	外来レビュー
15:00	病棟研修	リエゾンカンファ	緩和ケア回診 (不定期) or	病棟研修	病棟研修
16:30	新患 カンファレンス	病棟研修			病棟研修
17:00	振り返り				週間振り返り
17:30	自己研修				

3週					
	月	火	水	木	金
7:30			プライマリケア レクチャー	プレゼン	
8:00	救急合同 カンファ	モーニング レクチャー		研修	
8:30	医局ミーティング/総合診療科入院患者様回診				
9:00	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修
13:30	外来レビュー	外来レビュー	訪問診療 or	外来レビュー/ 各種講義	外来レビュー
15:00	病棟研修	リエゾンカンファ	緩和ケア回診 (不定期) or	病棟研修	病棟研修
16:30	新患 カンファレンス			病棟研修	TMEC
17:00	振り返り				週間振り返り
17:30	自己研修				

プライマリケアレクチャー：熊本県地域医療支援機構で受講可能なオンラインレクチャー
モーニングレクチャー：臨床のみならず、地域医療に関するレクチャー
リエゾンカンファ：総合診療科入院患者の退院に向けての目標設定、艦長調整を多職種で検討するカンファレンス
TMEC：クリニカルクラークシップ医学生による担当症例についての発表会

● 初期臨床研修（総合診療科研修）

2024年度はくまもと県北病院の基幹型研修プログラムに5名の研修医がマッチし、基幹型2年次4名と国立熊本医療センタープライマリケアコースの協力型として1名、計10名の初期臨床研修医（研修医）を受け入れました。くまもと県北教育拠点は、総合診療科研修および地域医療研修を担当し、指導を行いました。

まず総合診療科研修で研修医は、外来・入院・訪問診療を研修し、自らが診療の始めから終わりまでを一貫して実践し、研修医中心の参加型研修を実践しました。研修医は患者を「主治医」として担当し、指導医との連携の中で中心的な役割を担います。この事で、研修医からは「自分の患者」という意識が芽生え、責任感と医師になったことの実感が得られたとの評価を得ています。

結果、2025年度の基幹型卒後臨床研修医は7名マッチを達成しました。

● モーニングレクチャー

モーニングレクチャーとは、各診療科、部署のエキスパートから実践に即した知識や技術を学ぶ場です。写真は、眼科医による眼底鏡の使い方指導の風景です。指導は医師に限らず、様々な職種のスタッフに協力していただき、幅広いテーマの研修が可能となっています。



● 講演会・セミナー

コロナ感染症が5類感染症に社会的には移行され、多くの学会が対面式に切り替わりました。これに伴い、「日本病院総合診療医学会九州地方会」「有明地区研修医合同カンファレンス」「日本プライマリ・ケア連合学会九州地方会」が現地開催され、当院研修医・専攻医が症例発表を行いました。

● 総合診療専門医（専攻医）研修

くまもと県北教育拠点およびくまもと県北病院では、熊本大学病院 総合診療専門医研修プログラムの「総合診療Ⅱ」、「内科研修」、「小児科研修」および「救急研修」を実施しております。2023年4月から、本プログラム2期生で、家庭医療専門医の中村孝典先生が教育医長として着任され、プログラム出身者ならではの専攻医目線の研修を実践が可能となり、新たな取り組みを実践しております。

教育拠点として、常に前進し続け、地域医療を担う新たな人材育成を今後も担っていく所存です。昨今話題の医師の働き方改革にも対応し、専攻医の身体的・精神的負担を軽減するシステムの構築と総合診療専門医研修プログラムへのリクルートは重要になっています。その様な中、2025年度からは3名の新しい専攻医を迎えることになり、今後の更なる発展が期待されます。

(2) 診療

くまもと県北病院で、総合診療科での外来および入院診療を行っています。また、他診療科からの相談（院内コンサルテーション）や救急診療にも携わりました。

総合診療科での診療に当たり、くまもと県北教育拠点到に常駐する指導医5名（内科専門医・指導医、プライマリケア認定医・指導医、病院総合診療認定医・指導医、リウマチ専門医、総合診療専門医、家庭医療専門医、血液内科専門医）の他、研修医、地域医療・総合診療実践学寄附講座の教員も外来診療、救急医療に携わりました。

●くまもと県北病院 総合診療科外来担当医表

月	火	水	木	金
中本	中村	田添	中本	藤本
藤本	足立		松井	大里
佐藤				
佐藤（午後）				佐藤（午後）

(3) 年間診療報告

玉名拠点開設から10年目となりますが、医学生、初期研修医、専攻医および地域医療・総合診療実践学寄附講座スタッフがチームを形成し、総合診療科外来として外来診療および他診療科からのコンサルト対応を行うとともに、平日の救急外来も担っています。入院患者数も増加傾向にあり、教育環境の更なる改善も可能となってきました。

また、救急診療では受入件数も熊本県北地域最多を維持しており、不応需率も低い値で推移しています。



2024年度 研修医 全11名
くまもと県北病院基幹型：10名（1年次：5名、2年次：5名）
熊本医療センター：1名（2年次）

2. 行事

セミナー等については下記をご覧ください。

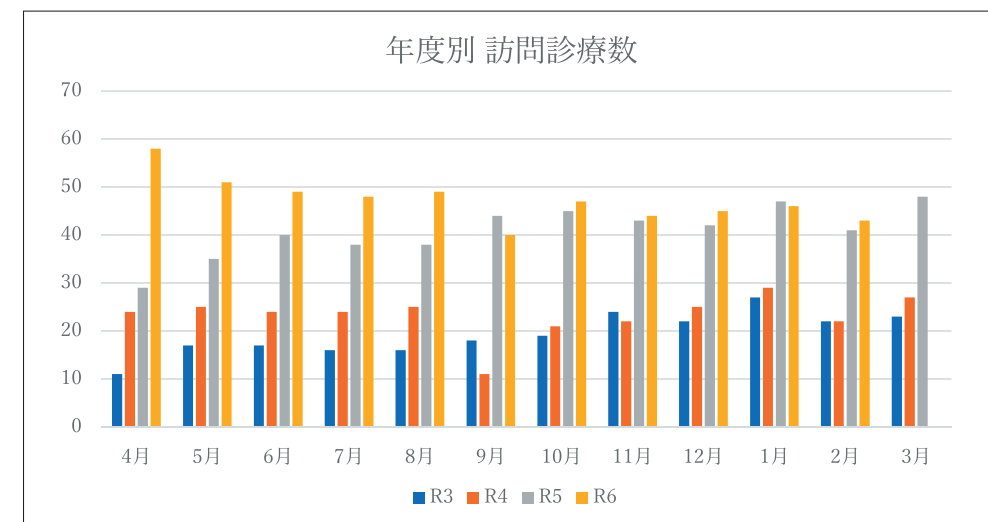
また、院内外での多職種教育や地域活動、地域住民向けのヘルスプロモーション活動なども積極的に取り組んでもらっています。2025年度以降も新たにレジデントが赴任する計画もあるため、個々の目標や能力に合わせて研鑽を積める環境を準備していきます。

4. 診療

訪問診療はチームで分担 火・水・金

5. 年間診療報告

前年度まで同様、総合診療科として、地域のニーズに答えてきた結果だと思います。



6. セミナー

住民向け講座を昨年に引き続き継続しています。また、院内多職種教育についても昨年同様、開催してきました。

河浦・天草地区での地域活動を行っているしきちの会の一員として、今年度も鶴田、下地は関わっております。ここでは地域の医療・介護・福祉の多職種向けの勉強会として、今年度は食支援をテーマに年3回に分けて開催した勉強会に協力しています。このほか、他院との合同勉強会や、介護施設に特化した施設への啓発活動など、新たな取り組みも行っております。

● 住民向け講座

- 9月24日 笑○クラブ講話
- 10月8日 下田紅はるか講話
- 10月16日 公民館講座
- 11月11日 野中あまなつ会講話
- 12月3日 秋葉老人会講話
- 12月4日 こつこつ会講話
- 12月17日 久留ひまわり会・2025会講話
- 1月15日 白木河内老人会講話
- 1月28日 下田南老人会講話
- 2月25日 下津留老人会講話

● 地域の祭への参加

- 3月29日 一町田さくら祭

5 熊本県医師修学資金貸与学生からの報告

1. 地域医療ゼミ

(1) 概要

現在、熊本県医師修学資金貸与制度を利用している学生は34名おり、毎月1回、地域医療に関する興味・関心を深めることを目的として、学生達で企画した内容を中心に「地域医療ゼミ」を開催しています。今年度は新型コロナウイルス感染症が5類へ移行され、コロナ前のように対面での開催が中心となりましたが、オンラインの利点も生かしながら全11回のゼミを実施することが出来ました

1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
7人	9人	2人	4人	5人	7人

(2) 活動内容

● 第1回「オリエンテーション」(2024年4月18日／対面にて開催)

新たに熊本県医師修学資金貸与学生として入学した1年生7名の紹介と、県庁医療政策課の方から熊本県医師修学資金貸与制度及びキャリア形成プログラムについての説明を行いました。その後、レクリエーションを行い、学年を超えて親睦を深めることが出来ました。



● 第2回「避難所運営実習」(2024年5月16日／対面にて開催)

避難所運営ゲーム(HUG)を用いて、避難所運営・管理を学びました。ファシリテーターとして、当センター教員に加え、災害医療教育研究センター 笠岡教授、内藤先生にご協力いただきました。グループワーク後、笠岡教授に講評を頂き、自然災害による健康被害を防ぐポイントについてご講話いただきました。



● 第3回「医学科サバイバル CBT/OSCE」
（2024年6月20日／オンラインにて開催）

熊大と自治医科大の5年生が、臨床実習前に実施されるCBTとPre-CC OSCEへの取り組み方や試験対策についてレクチャーを行いました。例題への取り組みや質疑応答の時間もあり、下級生にとって良い刺激となり、試験に対する不安を解消する機会となりました。



● 第4回「夏季地域医療実習説明」 （2024年7月18日（木）／オンラインにて開催）

8月13日・14日に実施する夏季地域医療特別実習について、地域医療・総合診療実践学寄附講座、地域医療支援センターの教職員より事前説明を行いました。参加学生たちは、実習のスケジュール及び訪問地区別の班分けを確認し、自己紹介、リーダーの決定、連絡先の交換等を行いました。



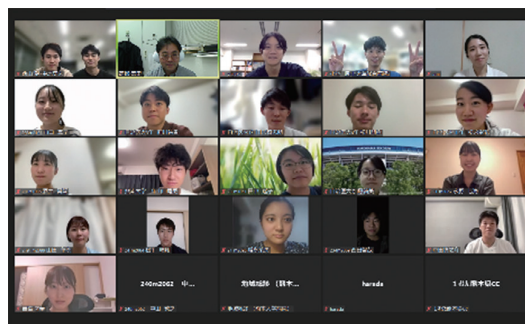
● 第5回「シネメデューケーション」 （2024年9月19日／対面にて開催）

映画「人魚の眠る家」を題材としたシネメデューケーションを実施しました。脳死や臓器提供への向き合い方など生命倫理について考える機会となりました。視聴後は、グループ毎に感想を共有し、医師として遺族への寄り添い方など初めて考えさせられた学生もいたようです。地域枠の先輩医師である平賀先生にご参加いただき、経験に基づいたお話をして頂きました。



● 第6回「地域枠医師・自治医卒医師による講演」
（2024年10月17日／オンラインにて開催）

地域医療の最前線で活躍する地域枠医師1名と自治医卒医師2名にご講話いただきました。皆さんご自身のキャリアとライフイベントについて詳しくお話しくださり、学生にとって、将来の自分の姿を具体的に想像し、ワークライフバランスについて考える機会となりました。



● 第7回「今日からできる！！高齢者総合機能評価（CGA）」 （2024年11月21日／対面にて開催）

昨年度から始まった5年次の選択カリキュラム「地域医療総合演習」の教育セッションとして実施しました。高齢者総合機能評価（CGA）について、5年生が講師となりレクチャーやグループワークを交えて学び合いました。参加学生にとってはCGAへの理解が深まり、5年生にとっては指導する立場を経験し多くを学ぶ機会となりました。



● 第8回「自治医科大生企画～緩和ケアについて～」 （2024年12月19日／オンラインにて開催）

自治医科大生の企画として「緩和ケア」をテーマに実施しました。自治医卒医師に事前インタビューした内容を共有後、グループワークで地域医療における緩和ケアについての課題とその解決策について話し合いました。自治医卒医師4名にもファシリテーターとしてご協力いただき、現場で働く医師の意見を伺うことができました。

● 第9回「解剖学びなおし」 （2025年1月16日／対面にて開催）

5年生のレクチャーで解剖学の復習を行った後、今年度解剖実習を経た2年生を中心に作成した問題に取り組みました。参加学生からは「他学年と交流する機会になった」「試験を控えているので対策になった」と好評でした。



● 第10回「制度とキャリア」 （2025年2月20日／対面にて開催）

当センター教員の講話で、キャリア形成における自身の価値観をアウトプットする自己評価のワークを行い、専門医制度の説明により専門領域選択の流れを理解する機会となりました。次に、県庁医療政策課から熊本県医師修学資金貸与制度について説明が行われ、内容を再確認することができました。



● 第11回「追いゼミ」（2025年3月21日／対面にて開催）

今年度最後となったゼミでは、一年間の総括として、地域医療ゼミ及び地域医療総合演習の報告、夏季・冬季地域医療特別実習の報告、皆勤賞・功労賞の表彰、幹事学年の交代や4月からの地域医療ゼミの実施計画について説明が行われました。

その後開催された追いコンでは、卒業生の挨拶、花束贈呈を行い、6年生の卒業を祝し、大いに盛り上がりました。



2. 地域医療特別実習

(1) 概要

本実習は、熊本大学病院 地域医療支援センター及び地域医療・総合診療実践学寄附講座が、熊本県地域医療支援機構と連携し、熊本県医師修学資金貸与学生及び熊本県出身の自治医科大学医学部生を主な対象に、将来、熊本県の地域医療に携わる医学生が、県内の地域（熊本市を除く）を訪れ【地域を知る】ことに視点を置いた企画・構成で、毎年、実施しております。

この実習では、実地でのフィールドワーク等を通して、地域の医療・保健・福祉等の現状や課題について学ぶことで、参加学生が多方面から広く地域を知り、地域との関係性を構築するとともに、地域医療に取り組む学生の意欲を醸成し、今後のキャリア形成に資することができるような企画・構成を心がけて取り組んでいます。

また、例年、夏季に2泊3日で実施しておりましたが、大学カリキュラムや大会出場等で参加が難しい学生がいることから、より多くの学生が参加できるように、令和5年度から1泊2日の日程で夏季・冬季の年2回実施しております。今年度、夏季は上球磨地域（多良木町、湯前町、水上村、あさぎり町）及び五木村、冬季は上益城地域（山都町）で実習を行いました。

(2) 夏季地域医療特別実習

夏季実習は、上球磨地域（多良木町、湯前町、水上村、あさぎり町）及び五木村で行いました。

多良木町、湯前町、水上村、あさぎり町及び五木村の各自治体、医療機関、そして地域住民の皆様のご協力のもと、フィールドワークやグループ活動など、充実したプログラムを展開することができました。2日目に行われた各グループによる発表会は、実習の成果を共有する良い機会となりました。

また、地域視察では、令和2年7月豪雨で甚大な被害を受けた大和一酒造元とホテル サン人吉を訪問しました。当時の被災状況や、そこから立ち上がるまでの苦難、そして現在の復興状況について詳しくお話を伺うことができました。

● 実施日程

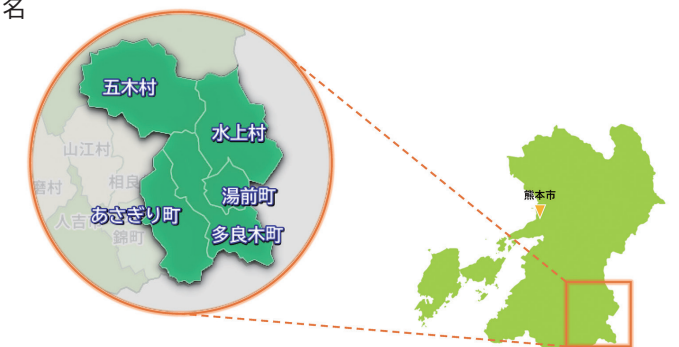
2024年8月13日（火）～8月14日（水）

● 実習地域

上球磨地域（多良木町、湯前町、水上村、あさぎり町）、五木村

● 参加学生

熊本県医師修学資金貸与学生	18名
熊本大学医学部生（一般公募者）	1名
自治医科大学医学部生（熊本県出身者）	8名



● 実習スケジュール

1日目(8/13)

時間	行程
8:00～8:15	集合・出発
8:30～10:30	移動
10:30～12:10	講話 (公立多良木病院)
12:10～13:10	ランチミーティング
13:10～17:00	フィールドワーク (A班:水上村) (B班:あさぎり町、多良木町、湯前町) (C班:あさぎり町、湯前町) (D班:五木村、湯前町)
17:00～18:30	休憩
18:30～20:00	懇親会・意見交換会
20:00～22:00	全体発表会準備
22:00	宿泊
18:30～20:30	懇親会・意見交換会
20:30	宿泊

2日目(8/14)

時間	行程
7:00	起床・朝食
8:20	集合
8:30～8:50	移動
9:00～11:10	全体発表会(公立多良木病院)
11:20～11:50	移動
12:00～13:00	ランチミーティング
13:00～13:15	移動
13:15～14:00	令和2年度7月豪雨地域視察 ① (大和一酒造元)
14:00～14:10	移動
14:10～15:10	令和2年度7月豪雨地域視察 ② (ホテル サン人吉)
15:15～17:00	移動
17:00	帰着・解散

(3) 冬季地域医療特別実習

大学カリキュラム等の都合で夏季実習に参加できなかった学生を対象に、12月に1泊2日の日程で上益城地域(山都町)にて、冬季地域医療特別実習(以下「冬季実習」)を行いました。

この度の冬季実習も、上益城地域の自治体をはじめ関係機関の多くの皆さまのご理解とご協力のもと、地域医療をはじめ、地域の町並みや歴史にふれることができ充実した実習となりました。

● 実施日程

2024年12月25日(水)～12月26日(木)

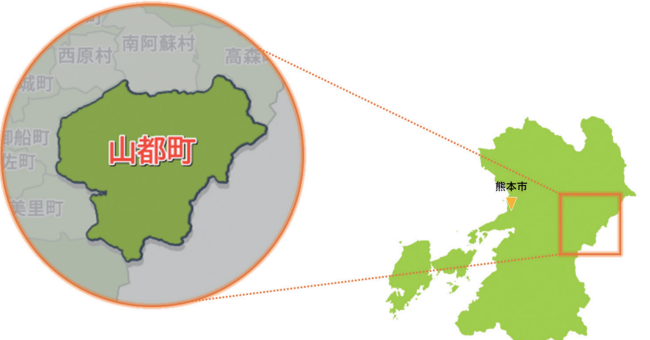
● 実習地域

上益城地域(山都町)

● 参加学生

熊本県医師修学資金貸与学生

9名



● 実習スケジュール

1日目(12/25)

時間	行程
12:45～13:15	集合・出発 (熊本大学病院)
13:15～14:15	移動
14:20～15:20	講話・ディスカッション (山都町役場)
15:25～15:55	移動
16:00～17:00	講話 (そよう病院)
17:05～17:20	移動
17:25～18:25	休憩
18:30～20:30	懇親会・意見交換会
20:30	宿泊

2日目(12/26)

時間	行程
8:30～8:50	集合・移動
9:00～10:00	見学 (特別養護老人ホーム 蘇望苑)
10:05～10:15	移動
10:20～11:30	地域踏査① (山都町フットパス 馬見原コース)
11:40～11:55	移動
12:00～13:00	ランチミーティング (清和文楽邑 レストラン 四季のふるさと)
13:05～13:15	移動
13:20～13:50	見学 (井無田へき地診療所)
13:55～14:25	移動
14:30～15:20	地域踏査② (通潤橋・史料館)
15:30～16:30	移動
16:30	帰着・解散





(4) その他

令和6年度夏季実習の様子を、熊本県の地方紙「熊本日日新聞」と、人吉市の地方紙「日刊 人吉新聞」より取材・紙面に掲載いただきました。



出典：熊本日日新聞 朝刊 2024年8月16日付



出典：日刊 人吉新聞 2024年8月27日号

実習の詳細な様子については、熊本県地域医療支援機構ホームページに掲載中の「令和6年度 夏季・冬季地域医療特別実習報告書」を参照ください。



3. 令和6年度卒業生の声

※五十音順掲載

阿部 貴美香

(熊本大学医学部医学科 卒業)

「これまでを振り返って」

先日医師国家試験に合格し、いよいよ医師としてのスタート地点に立つ日が迫りくる中、6年間のことを振り返ると、きつかったこと楽しかったこと、嬉しかったこと様々な記憶が蘇ります。

私たちの学年は1年生の終わりからコロナ禍となり、様々なことが制限された時代でもありました。オンライン授業で誰とも話さない1日が続いた時は、人が恋しく誰かと話したいと日々思っていたことを覚えています。誰かとコミュニケーションをとることが、自分の生活において、いかに大きな割合を占めていたのかと気づかされました。当たり前が当たり前に行えることのありがたさは、コロナ禍を経験しなければ一生気づくことはなかったように思います。

幸いなことに高学年になってからは制限も緩和され、病棟実習をさせてもらうことができました。実習をする中で、自分の担当患者さんのもとへ日々通うことができる時もあれば、感染流行期には患者さんの元に行くことが制限されることもありました。どちらの状況も経験できたことで、カルテだけから情報を得るよりも、やはり顔と顔を合わせたことで得られる情報がたくさんあると感じることができました。これから研修医、そして医師として働くうえで、忙しさを言い訳にせず、きちんと自分の担当患者さんのもとに足を運び、顔をあわせて会話をすることを大事にする医師になりたいと思います。

最後になりますが、6年間支えていただきました、地域医療・総合診療実践寄付講座の先生方をはじめ、地域医療支援センターの皆様、並びに熊本県医療政策課の皆様へ心より感謝申し上げます。まだまだ未熟ではありますが、熊本県に貢献できる医師になれるよう、まずは初期研修の2年間で医師として必要な知識・技術・態度を身に付けるために精一杯研鑽を積みたくと考えています。今後ともよろしくお願いいたします。

園川 仁美

(熊本大学医学部医学科 卒業)

「6年間を振り返って、今後の目標」

6年間は想像以上に過ぎるのが早く、あっという間に卒業目前まで来てしまいました。振り返ってみると、部活や実習で充実した日々を送ることができ、入学当時の自分と比べ、多少は成長できたのではないかと感じています。その中でも、地域医療ゼミに所属し様々な経験の機会をいただいたことは、多くの学びに繋がり、ありがたい環境だったと感じています。

6年間の地域医療ゼミ活動ではたくさんの経験をさせていただきましたが、特に思い出に残っているのは5年次の夏季実習です。実習で班長を任せていただいたため、学年も学校もバラバラな班員をまとめることにプレッシャーを感じていました。しかし、フィールドワークや最終日のプレゼンテーションに向けた話し合いを重ねるごとに、同じ目的に向かって班員みんなが役割を担い、段々と団結していくのを感じました。近い将来、共に地域医療を支えていく存在として、協同して目標を達成できた経験は自信に繋がりました。

また、5年次には地域医療ゼミの一コマを自分たちで作る経験もさせていただきました。テーマを決めることから始まり、伝え方、何を深掘りした授業にするのかなど、たくさんの要素を検討しました。授業の製作側の視点を学び実践できたことは、大変思い出深く、貴重な経験だったと思います。

来年度からは、医師として医療を担う立場の一人になります。幅広い診療能力を身につけ、地域医療の現場で力を発揮できる人材になれるよう、精進していきたいと思います。

最後になりましたが、地域医療・総合診療実践学寄附講座の先生方、スタッフの皆様をはじめ、実習や進路相談でお世話になりました多くの方々に心より感謝申し上げます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

高田 理香子

(熊本大学医学部医学科 卒業)

「これまでを振り返って」

小学生の頃から父の姿に憧れて医師を目指すようになり、高校時代の特別講義で地域医療に興味を持ちました。それから地域枠の制度を知り、将来的に地域医療に従事することができ、かつ学生の間から夏季実習や月に一度のゼミといった取り組みに参加することができる点に魅力を感じてこの枠で受験をしようと決意しました。浪人も経験し、やっとの思いで大学合格を掴んだあの日が6年も前のこととは信じられないくらい、あっという間の充実した学生生活を送ることができました。そして先日国家試験の結果発表がありました。いよいよ医師としての最初の一步が踏み出せることへの喜び、これまでの環境への感謝、これから始まる医師人生への期待と不安など改めて色々な感情が湧き起こっています。

地域枠生としての学生生活を振り返ると、いちばん印象に残ったのはやはり夏季実習です。地域によって異なる現状やそれに対する課題、取り組みなどを、身をもって学ぶことができました。またその地域で働かれている医師の方々や他職種の方とお話を通して、必要とされている医師像や人間性を知ることができました。医師として早い時期に地域医療に関わることでできるメリットデメリットなどの話もあり、将来的な自分自身の働き方を考える良い機会になりました。さらには自治医科大学の学生との共同プレゼンもあり、実習のことに限らず、学校生活のことや将来の働き方、地域医療に対する姿勢を話すことで、学生生活に良い刺激をもらっていました。夏季実習に参加することで、クリクラでの地域医療実習ではまた違う課題点を発見することができたりなど、自分の実習にかなりプラスになりました。

4月からは熊本大学病院で初期臨床研修医としてお世話になります。まだまだ未熟な点もありますが、熊本の地域医療に貢献できる医師になるべく日々研鑽に励んでいく所存です。6年間ありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

原 裕介

(熊本大学医学部医学科 卒業)

「これまでを振り返って」

私が医学部に入学した日、あの時の緊張と興奮が今でも鮮明に記憶に残っています。こうして卒業を迎えることができたのは、多くの方々の支えと協力があったからこそです。

特に友人らには、感謝しています。共に励まし合い、試験や実習を乗り越えることができました。みんなとの出会いが、私にとってかけがえのない財産です。

医学部での学びは、ただ知識や技術を習得するだけではありませんでした。解剖学の実習で、初めて人の体に触れる時の緊張感や、臨床実習で患者さんと接する中で感じた責任感の重さを通じて、医師として社会に出た時、患者さんに対してどのような姿勢で接するべきか、人としてどうあるべきか、ということを深く考える機会が多くありました。

これからは医師として、社会の一員として地域医療に貢献できるよう、患者さん一人一人に真摯に向き合い、常に学び続ける姿勢を忘れぬように、努力していきます。

最後に、これまで支えてくださった全ての方々へ心から感謝申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

藤川 あおい

(熊本大学医学部医学科 卒業)

「大学生活を終えて」

私は大学において医学、医療について様々なことを学びました。中でも地域医療ゼミではとても貴重な経験をさせていただきました。毎月様々な角度から医療について学び、学年を越えた交流を通して縦のつながりを作ることができました。夏季特別実習では、その地域の医療、保健、介護現場等を見学させていただき、その地域の特色や働く方々の工夫などを知ることができました。1年

生の時、天草の体育館で踊りを教えてもらい、屋上で踊ったことを今でも印象深く覚えています。

思えば私の大学生活は途中病気で休学したり、思うようにいかないことがあったりと、決して順風満帆ではありませんでした。何とか卒業を迎えることができたのは、周りの支えがあったからこそだと思います。家族、友人や大学の先生方、そしてこの地域の医療、福祉に支えられ大学に復帰することができました。それまで私は何となく1人で生きているような気がしていましたが、この経験を通して自分の周りには手を差し伸べてくれる家族や素敵な友人がいて、住んでいる地域社会とも繋がり、支えられていたことを学びました。

これからは自分自身も助けてもらった医療という分野で、誰かを支えられるような存在になることで恩返しをしたいと考えております。周囲の方々への感謝を忘れず、困っている人がいれば手を差し伸べられるような人間、医師になりたいです。

最後になりましたが、松井教授をはじめ、お世話になりました皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

古池 雅明

(熊本大学医学部医学科 卒業)

「6年間を振り返って」

私は大学の6年間を通じて、多くのことを学び、成長することができました。

1年次、夢と期待に胸を膨らませながら大学生活が始まりました。基礎医学の学びでは、専門的な知識の奥深さに圧倒されつつも、試験突破に向けて全力を尽くしました。特に、夏に行われた早期臨床体験実習Ⅰでは、実際の医療現場に低学年のうちから触れる機会を得たことが、その後の学習意欲につながったことを覚えています。

2年次、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン授業が中心となり、友人と直接交流する機会も限られました。しかし、オンライン勉強会を活用することで、学習を継続できただけでなく、後の国家試験勉強につながるような学習スタイルを確立することができました。また、解剖学実習では、ご献体を通じて医学を学ぶことの意義や責任の重さを改めて実感しました。

3年次からは臨床医学の講義が始まり、4年次からは臨床実習が始まりました。大学病院や市中病院での実習を通じて、将来の医師像を考えるとともに、座学で得た知識を体系的に整理することができました。特に、5年次に総合診療科の河浦病院で経験した訪問診療では、地域医療の重要性を肌で感じました。患者さんが住み慣れた環境で適切な医療を受けることの意義を学び、訪問診療の必要性を強く実感しました。

また、5・6年次には日本プライマリ・ケア連合学会学術大会で発表する機会をいただきました。他大学の学生や医師の発表を聞くことで、多くの刺激を受け、自身の学びをより深める契機となりました。

これから始まる初期研修では、これまで学んできた知識や経験を生かしながら、より実践的な医療を学んでいきたいと考えています。患者さん一人ひとりに寄り添い、信頼される医師を目指して、日々精進していきます。

6 地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座

令和 6 年度地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座 事業報告総括

地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座
特任准教授（ネットワーク推進統括医） 泉 裕一郎

1. 活動概要

本講座は、熊本県の地域医療連携ネットワーク構想を推進するため、県知事が各医療圏域に指定する「地域医療拠点病院」へ、熊本大学病院（本講座）から医師を派遣することで、専門医療を実践するとともに、行政や医師会と協力しながら地域医療連携の強化に努め、また、医師修学資金貸与医師や自治医科大学卒業医師へのキャリア形成支援、各医療圏域における医療機能の向上を図るための調査・研究を行うことを目的に、熊本県からの寄附を得て、平成 31 年度から令和 3 年度までの 3 年間設置され、この 3 年間の活動実績を踏まえ、さらに令和 4 年度から令和 6 年度までの 3 年間、本講座が継続設置された。

本年度は、熊本大学病院の各診療科より選出された 24 名の専門医が本講座所属の特任教員となり、ネットワーク推進医として地域医療拠点病院（以下、拠点病院）に派遣され、同じく各診療科から派遣された常勤のネットワーク推進医と協力して業務を遂行した。

詳細な活動状況、地域医療の現状報告については、各特任教員の報告書を参照されたいが、以下に概要を記す。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師への支援・指導は、主に通常の診療を通して専門的知識を提供し、手技を指導する形で行われている。加えて、若手医師の学術総会への参加の促進、発表の支援も行われている。ネットワーク推進医の配置が若手医師の教育体制を強化し、拠点病院での研修を希望する医師の増加に貢献する可能性が報告されている。

3. 診療支援の取り組み

各拠点病院において、ネットワーク推進医の専門性を活かし、外来・入院診療、専門性の高い手術・手技が提供された。外来患者数、手術数は高い水準で維持、または経年的に増加が続いており、地域完結型の医療に貢献していることが示唆される。特に、遠方への通院困難などの制約のある高齢患者への質の高い医療の提供に貢献している。一方で、内科系の診療においては、多くの疾患を合併する高齢患者の増加から、専門医療だけでは不十分であり、可能な限りでの総合診療の提供を必要とするケースが増えてきている。また、拠点病院内の常勤医の減少や、近隣の開業医の閉院と専門医の減少が進み、さらに、県境に位置する拠点病院では隣県からの患者受け入れにも対応する必要性が現状としてあり、ネットワーク推進医を含む医師の派遣体制の必要性が高まっている。

その他、ネットワーク推進医が地域の講演会・研修会やワーキンググループへ参加し、啓蒙活動や多職種医療チームによる患者介入に貢献している。

4. くまもとメディカルネットワーク（KMN）の普及状況

文書送受信機能の利用状況からは、多くの施設で積極的に KMN の利用を推進していることが認められる。これまで普及が進んでいなかった拠点病院においても、文書送信数の増加や院内の KMN 担当者の設置などの利用体制の確立に向けた活動について報告されている。KMN 利用体制が確立している施設では、KMN による迅速な情報共有を利用して大学病院－拠点病院間での合同カンファレンスを行うなど、利用の幅を広げている。

一方で、KMN の普及がほとんど進んでいない施設もまだ残っている。特に、情報の送信において院内システムがいまだ不十分であることや、人員不足から KMN の担当者が設置できていないことなどが要因のようである。近隣の診療所との KMN による連携は、ほとんどの医療圏においてまだ少ないと思われるが、連携が確立すると利便性が高いことが報告されている。

5. 拠点病院としての役割の推進状況

多くの地域で高齢患者が増加しており、常勤医とネットワーク推進医などの派遣医師、非常勤医師の協力により、地域完結型の医療を推進している。ネットワーク推進医が担当する診療科の外来患者数は全般的に増加の傾向が見られ、地域完結型の医療に貢献していることが示唆される。また、ネットワーク推進医の派遣に応じて、玉突き派遣による医療過疎地域への医師の派遣が実行されている。KMN の普及についても、多くの拠点病院が積極的に取り組み、経年的に参加同意者数・文書送受信数の増加が見られる。県境に位置する拠点病院では、隣県の医療体制の影響も受けながら、患者の受け入れを行っていることが報告されている。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

地域医療における課題として、高齢患者の増加により総合診療が必要とされる現状と、一方で、医師の高齢化による医療圏域の医師不足の加速が危惧されている。地域住民の高齢化、患者の高齢化から通院困難者の増加や介護施設の不足が表面化してきており、公共交通機関の維持や訪問診療の推進、介護サービスの充実が求められている。拠点病院の体制として、医療経営・財政問題の解決と、医療の高度化が進む中で医療機能を維持・向上しつつ、若手医師のキャリア形成や医師の働き方改革を推進するためには、医療圏域ごとでの医療機関の集約化が必要であるとの意見が挙げられている。同時に、熊本県の地域医療連携ネットワークの維持のためには、本講座の骨子である医師派遣体制の維持も必須であると考ええる。

7. おわりに

各教員の事業報告を総括した。本講座は設置後 2 期 6 年となり、所属教員のネットワーク推進医としての活動は拠点病院にとって欠かせないものとなっている。地域医療の課題・解決策についても、地域の患者にもっとも近い視点で提言された貴重なものであると考える。

本講座は、次年度より改組され、熊本県の地域医療連携ネットワーク構築支援事業として継続される。熊本県の地域医療連携ネットワークの構築と地域医療の維持のために、引き続き活動を継続していく。

令和6年度（2024年度）地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座 特任教員一覧

部門	診療科名	定数	特任教員氏名 (ネットワーク 推進医リーダー)	職名	派遣先拠点病院
内科	腎臓内科	12	泉 裕一郎	特任准教授	宇城総合病院
	呼吸器内科		猪山 慎治	特任助教	人吉医療センター、小国公立病院
			坂田 晋也	特任助教	阿蘇医療センター、有明医療センター
			赤池 公孝	特任助教	小国公立病院、山鹿市民医療センター
			堀尾 雄甲	特任助教	上天草総合病院、再春医療センター
	消化器内科		徳永 堯之	特任助教	阿蘇医療センター
			松野 健司	特任助教	熊本労災病院
			飯尾 悦子	特任助教	有明医療センター
	血液内科、 膠原病内科		坂田 康明	特任助教	熊本総合病院
	糖尿病・代謝・ 内分泌内科		小野 薫	特任助教	小国公立病院、上天草総合病院
循環器内科	山本 正啓	特任助教	上天草総合病院		
	白濱裕一郎	特任助教	そよう病院		
外科	消化器外科	5	北野 雄希	特任助教	水俣市立総合医療センター
			原田 和人	特任助教	水俣市立総合医療センター (R6.10.1～、前任 問端 輔)
	乳腺・内分泌外科		後藤 理沙	特任助教	くまもと県北病院
	泌尿器科		穴見 俊樹	特任助教	人吉医療センター
			西澤 秀和	特任助教	山鹿市民医療センター
成育医療	小児科	3	永田 裕子	特任助教	小国公立病院、水俣市立総合医療センター
			宮村 文弥	特任助教	小国公立病院、水俣市立総合医療センター、 有明医療センター
	産科		楠木 楨	特任助教	熊本総合病院
感覚・運動	整形外科	3	湯上 正樹	特任助教	阿蘇医療センター
			米満 龍史	特任助教	そよう病院
			杉本 一樹	特任助教	小国公立病院
脳・神経・ 精神	神経精神科	1	都 剛太郎	特任助教	熊本県立こころの医療センター

派遣先地域医療拠点病院	宇城総合病院
氏 名	泉 裕一郎
診療科名	腎臓内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

派遣先病院において、それぞれ週 1 回の腎臓内科外来診療と維持血液透析患者の管理を行った。常勤腎臓内科医師との症例検討や、他診療科からのコンサルトに対応し、適宜治療介入を行うとともに、くまもとメディカルネットワーク（KMN）を利用した他施設へのコンサルトや紹介を積極的に行い、院内の利用推進の支援を行った。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

現在、派遣先に該当する医師は所属していない。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

腎臓内科全体での外来患者数は 2022 年に比べ 2023 年、2024 年とも減少しているが、これは常勤医 1 名が定年退職したことによる。しかし、本事業が開始される 2018 年以前に比べると外来患者数は高い水準を維持している。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

2022 年（令和 4 年）度に構築された、地域連携室と医療秘書課の連携による文書送受信機能の院内利用体制が良好に機能しており、本年度も文書送受信数が高い水準を保っている。熊本大学病院を始め、隣接する医療圏域の病院（人吉医療センター、水俣市立総合医療センター、熊本労災病院、熊本総合病院など）との文書のやり取りは KMN で一本化されている。受信件数より送信件数が 2 倍以上多く、KMN を積極的に利用している状況が伺われる。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

宇城総合病院は、宇城圏域の中核病院であり、地域に救急医療を提供するとともに、高度医療機関への紹介や、急性期・回復期のリハビリ入院から転院までの調整を行い、他機関への橋渡しを行うハブ的な役割を担っている。人口対医師数の比較的多い熊本圏域と八代圏域に挟まれた、医師数の少ない地域にあり、東西に広い圏域の地域医療を支える上で同院の役割は大きい。

また、宇城圏域は高齢者の多い地域で、地域包括ケアシステムの充実も求められており、地域連携室を中心に周辺施設との連携を維持している。常勤医と熊本大学病院からの非常勤派遣医師が良好に協力し、地域医療拠点病院としての役割を積極的に果たしていると思われる。

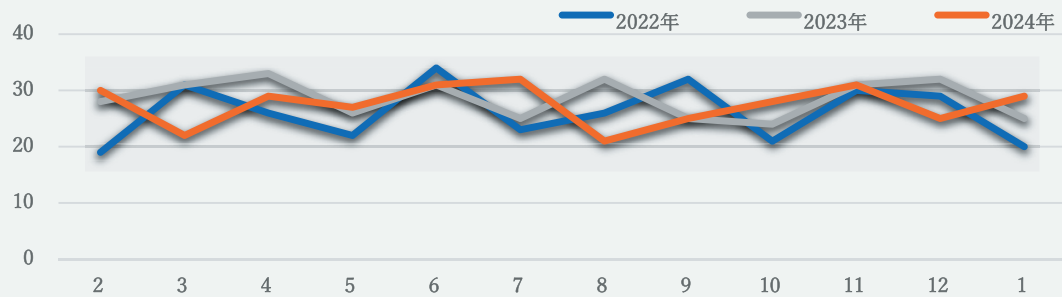
6. 地域医療における今後の課題・解決策等

宇城総合病院の診療活動は、30 名ほどの医師によって成り立っているが、そのうちの約 3 割は、ネットワーク推進医も含めた非常勤医師に頼る現状があり、同院にとって医師の確保は常に重要な課題である。

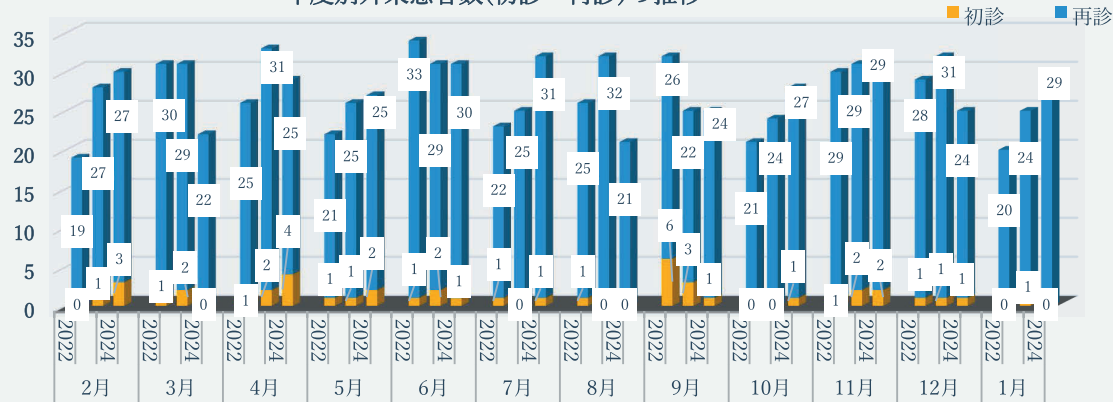
また、他の地域と同様に医師の高齢化が徐々に進んできており、今後、医師不足に拍車がかかる可能性が高い。当科が関わる透析医療に関しても、常勤ネットワーク医が主に業務を行い、報告者と熊本大学からの非常勤派遣医師、定年後の嘱託勤務医師 1 名で診療を分担することでなんとか維持されている。約 80 名の維持透析患者を安全に管理するには不安な体制であり、今後も継続的な人的支援が望まれる。

宇城総合病院 腎臓内科

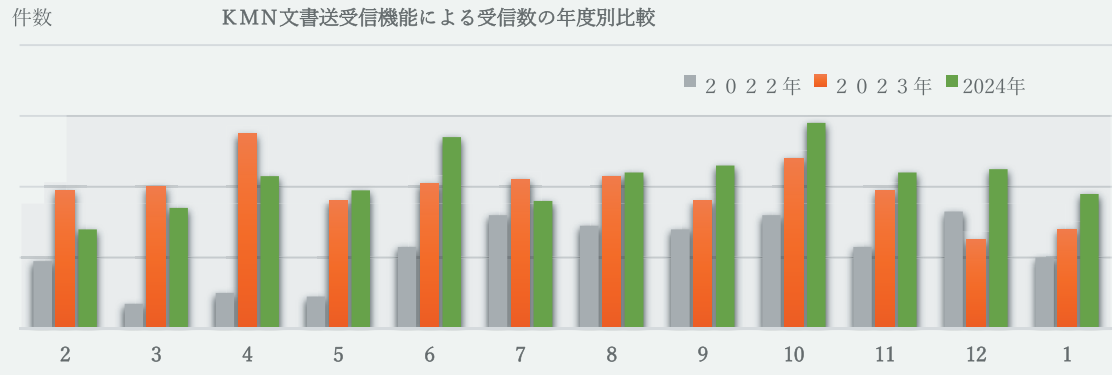
外来患者総数の推移



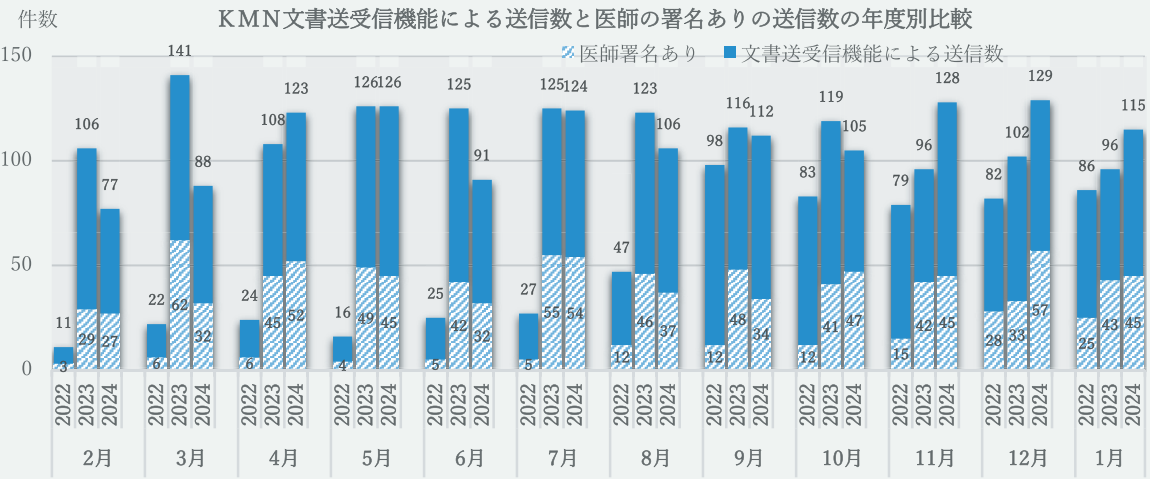
年度別外来患者数(初診・再診)の推移



KMN文書送受信機能による受信数の年度別比較



KMN文書送受信機能による送信数と医師の署名ありの送信数の年度別比較



派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院、人吉医療センター
氏 名	猪山 慎治
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

小国地域及び人吉・球磨地域への医療提供を継続的に行っている。

具体的には、近隣の診療所、病院からの紹介を受け、呼吸器疾患を中心とした診断治療及び必要に応じて高次医療機関への紹介を行っている。

また、くまもとメディカルネットワーク（KMN）の推進のために、積極的なKMNの利用を行っている。

さらに、呼吸器内科若手常勤医、専攻医、初期研修医の症例相談、専門的なアドバイスならびに学会報告の指導を行っており、呼吸器疾患以外にも総合内科専門医として風邪や頭痛、関節痛などのプライマリー疾患や長年苦しんでいた症状の診断治療や教育、生活指導、常用薬の整理を行い、コミュニケーションを重視した良好な医師関係の構築および適切な医療を届けてきた。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

自治医科大卒の専攻医に対しては、専門医取得に必要な症例登録や要約登録のアドバイス、学会集会参加の勧め、病欠時の外来患者代行、入院患者のアドバイスを行ってきた。初期研修医には、呼吸器疾患の診断治療の評価、アドバイス、呼吸器疾患の外来引継ぎを行い、研修医教育にも貢献している。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

小国公立病院では、外来診療を2枠で実施し、月間約100名の外来患者に対する診断・治療を行っている。呼吸器疾患の地域医療機関からの紹介は少ないものの、院内コンサルトは増加傾向にある。これまでに、肺癌や間質性肺炎、肝細胞癌、C型肝炎といった難治性疾患の診断を行い、適切な高次医療機関への治療紹介を実施してきた。今後も、地域住民の健康管理、予防医療、疾患治療を重視しながら、継続的な診療支援に取り組んでいく。

人吉医療センターでは、呼吸器内科の常勤医が2名在籍しているものの、命に関わる疾患を合併する患者が多く、診療支援が不可欠な状況である。外来患者の初診・再診数は例年とほぼ同様に推移しているが、呼吸器疾患の診療支援を十分に提供することで、近隣医療機関や地域住民に貢献できていると考える。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

小国公立病院、人吉医療センターともにKMNの利用は年々増えてきており、認知度も向上している。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

- ① 専門医療実践による診療支援：呼吸器疾患専門的診断、治療を行いながら、総合内科専門医として内科領域も専門的診断、治療を行った。
 - ② 若手医師への指導：症例の相談、検査治療方針のアドバイス、学会報告や論文作成の指導、専門医取得の支援を行った。
 - ③ 地域住民・医療従事者への啓蒙活動、専門的知識の提供：予防医療のための肺炎球菌や带状疱疹などのワクチンの推進、自宅でできるリハビリテーションの情報提供を行った。
 - ④ くまもとメディカルネットワークの普及：送受信数は増え、新規加入者も増加している。
 - ⑤ 各医療圏における地域医療の現状と新たな方策の検討：人吉球磨地区の医療は常勤2名の負担が大きく、外来支援で何とか出来ているが、子育てと仕事の両立で疲弊がみられ、時間外労働も多く、もう一名の常勤医の追加が必要である。
- 小国公立病院は、自治医大卒や地域卒の若手医師と50-60代の医師で成り立っているが、マンパワー不足は感じる。地域卒の若手医師の支援、阿蘇医療センターの充足、連携をすることで、より専門性の高度な医療提供が出来る可能性がある。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

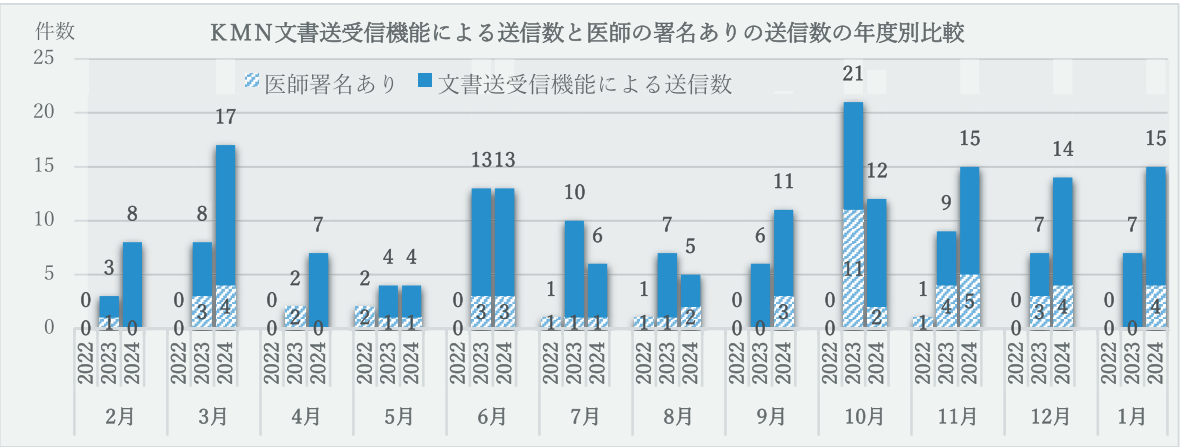
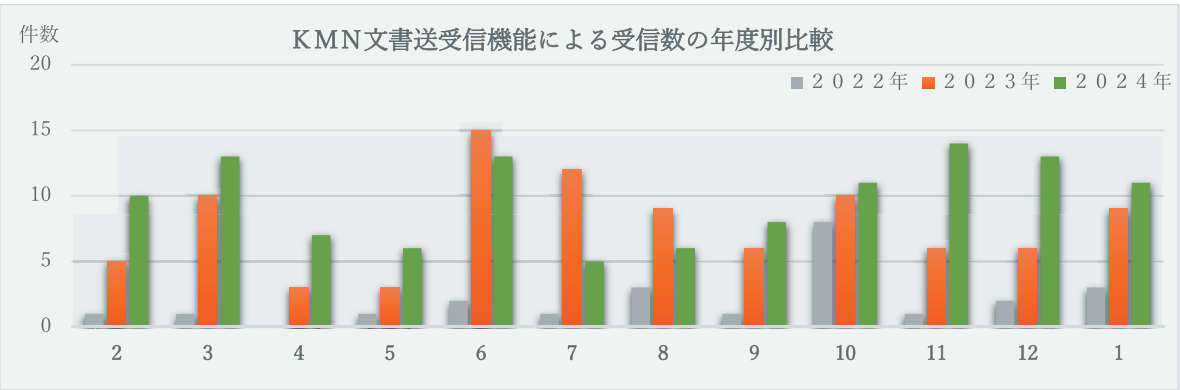
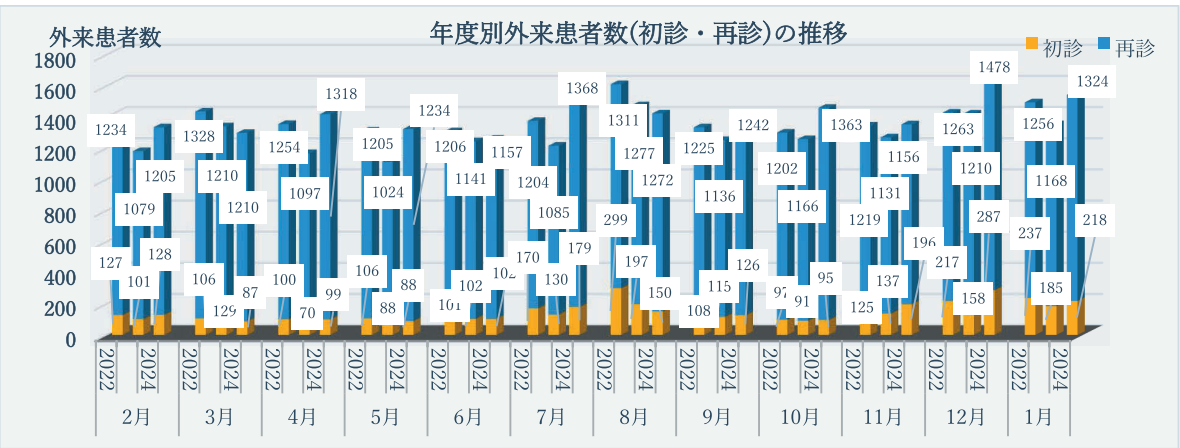
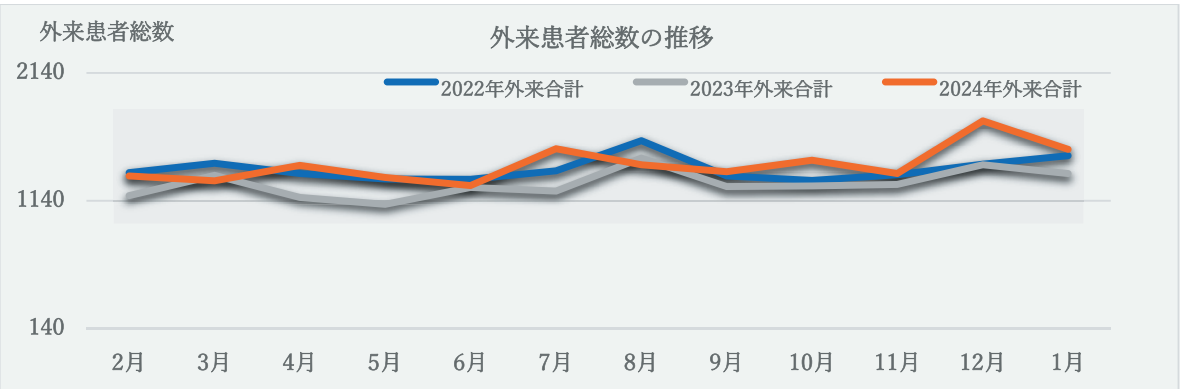
熊本大学病院は、高度医療を提供する熊本県の医療の中心であると同時に、地域医療支援の役割も担う必要がある。地域で活躍できる医師を養成するためには、地方勤務のインセンティブ（給与、勤務環境、キャリアパス）に関する制度改革が求められる。

また、副業・兼業制度や時短勤務の整備により、都市部の勤務医や子育て中の医師でも地域医療に貢献できる環境を整えることが重要であり、一部の医師に過度な負担がかからないよう、柔軟な診療体制を構築することで、地域医療のハードルを下げ、高齢化・過疎化が進む地域の医療を支えることができると考える。

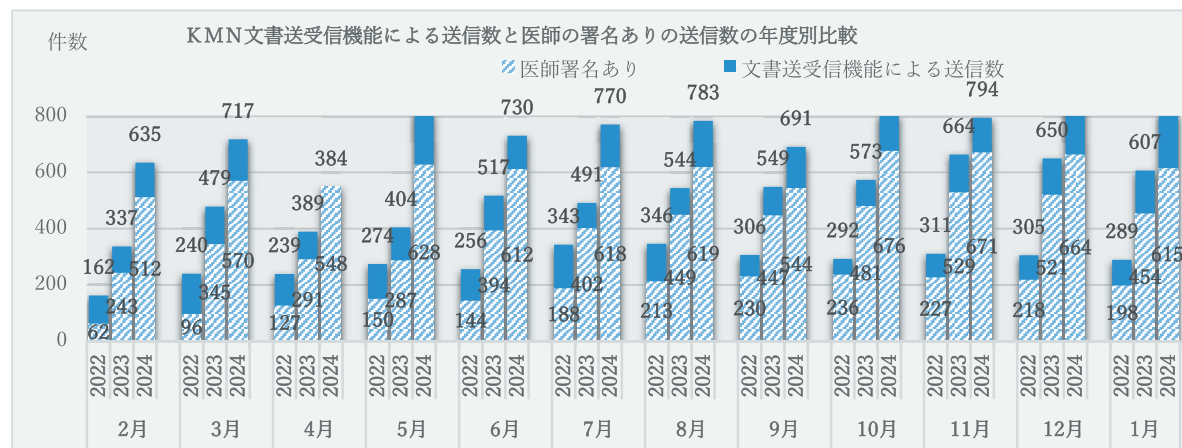
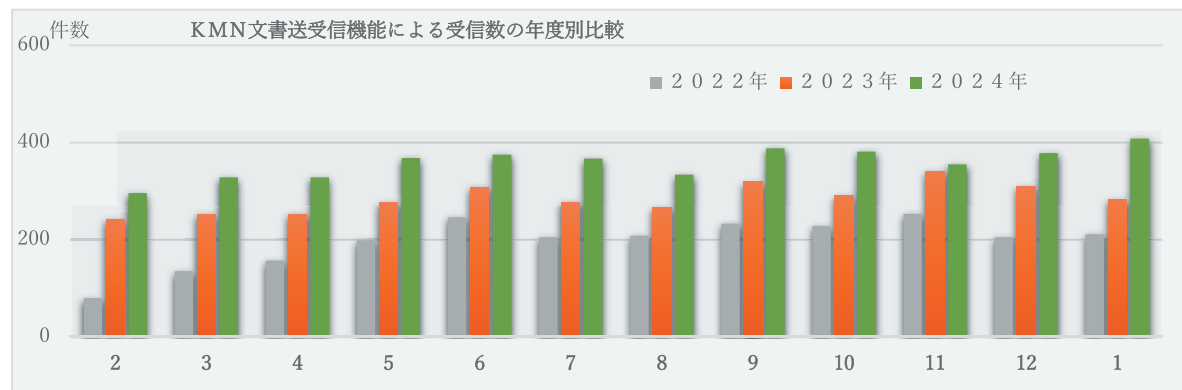
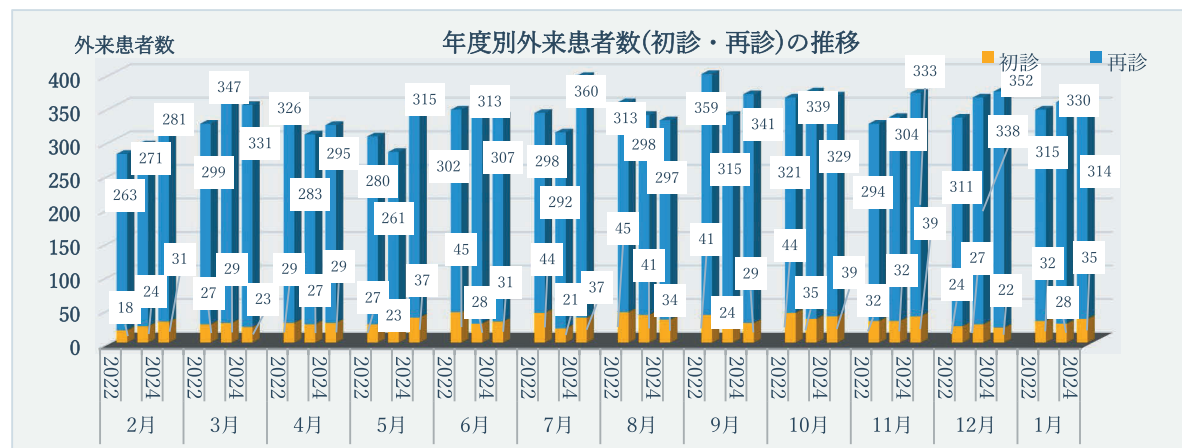
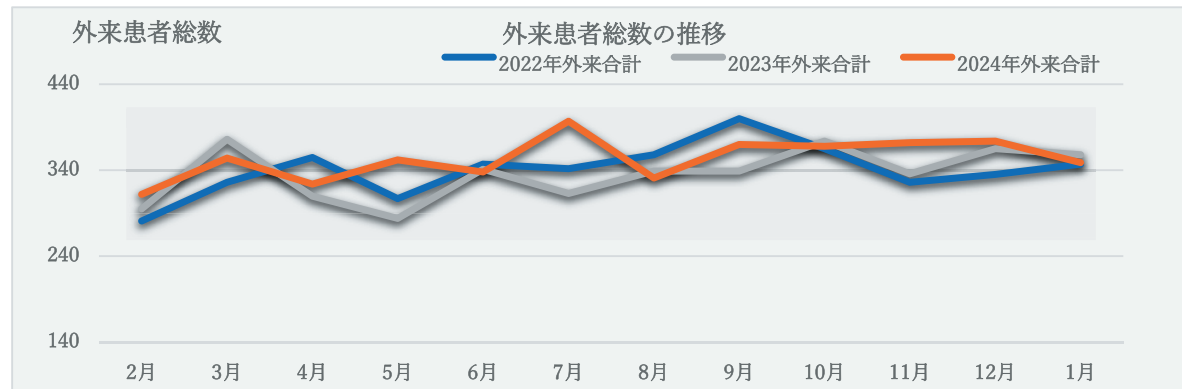
さらに、若手医師が成長し、一人前の医師として自立できるよう、教育や金銭的支援、学びの機会を提供することも不可欠である。このような取り組みを、熊本大学病院の「地域連携ネットワーク寄附講座」を通じて推進していきたいと考えている。

地域医療においても、最適な専門医療を患者さんに提供できるよう尽力していきたい。
今後とも、熊本県のご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

小国公立病院 呼吸器内科



人吉医療センター 呼吸器内科



派遣先地域医療拠点病院	阿蘇医療センター、荒尾市立有明医療センター
氏 名	坂田 晋也
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

【阿蘇医療センター】

- 毎週火曜日の外来診療を中心に支援している。
- 阿蘇の医療圏においては呼吸器内科専門医療施設がなく、阿蘇医療センターの外来において呼吸器疾患に対する専門的な医療の提供を実践している。また、現在常勤医師が1名派遣されており、病棟入院診療も提供している。
- 阿蘇医療センターは、医局内で診療科間の垣根が低く、症例の相談を行いやすい雰囲気がある。

【荒尾市立有明医療センター】

- 毎週金曜日の外来診療を中心に支援している。
- 現在、呼吸器内科の常勤医師が1名（および顧問医師が1名）体制となっており、主に入院診療は常勤医師により実施し、外来及び院内コンサルト症例に対する呼吸器診療の専門的な医療の提供を行っている。重症度が高い症例や専門的検査を要する症例の一部は、近隣の呼吸器内科専門施設との連携を取りながら地域医療を実践している。本院から呼吸器内科専門医師の派遣を行うことにより、他診療科で診療に難渋している症例などのコンサルトがより円滑となり、医師同士のネットワークも広がってきており病院内での専門医療の提供体制が充実してきている状況である。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

阿蘇医療センターに熊本大学医学部の地域枠入学医師1名が派遣されており、診療指導や日本呼吸器学会呼吸器専門医の資格取得に向けたキャリア支援を行っている。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

【阿蘇医療センター】

- 呼吸器内科の外来診療患者数は下記のとおりである。阿蘇医療センターにおける呼吸器内科外来の設置、専門医による診療の目的に近隣のクリニックからの紹介も増加してきており、院内の内科医師からのコンサルトも定期的に受けている状況である。

【荒尾市立有明医療センター】

- 1カ月当たりの外来診療患者数は約30～50名程度である。
- 荒尾市立有明医療センターでは、以前より呼吸器内科の外来でフォローしていた再診患者様の数が多く、診察予約枠が全て埋まっていることが少なくなかったが、専門的治療の後に安定した症例については、かかりつけ医や近隣のクリニックと連携を取りながら逆紹介も行っている。また、他科医師からの院内コンサルト症例も対応している。
- 近隣の呼吸器内科専門医療施設（大牟田天領病院）の呼吸器内科常勤医師数の減少（2025年4月より1名体制）に伴い、大牟田天領病院からの多くの外来患者の紹介を引き受けている。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

【阿蘇医療センター】

- KMN文書送受信機能による受信数は増加傾向である。
- 地域連携室の担当者との連絡を取りながら、KMNに参加している病院への紹介時など病診連携にて利用を推進している。

【荒尾市立有明医療センター】

- 呼吸器内科の専門施設で最寄りの病院が大牟田天領病院、次いで近い病院がくまもと県北病院である。大牟田天領病院は福岡県にあるため KMN の利用ができないが、くまもと県北病院呼吸器内科へ紹介する際や、

熊本市内の病院への診療情報書の送受信にて KMN を活用している。

- KMN 担当者（地域連携室）のサポート下に、スムーズな KMN 利用が実施できている。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

熊本県地域医療拠点病院としての役割には、紹介患者に対する医療提供、へき地診療所への医師派遣等による地域のかかりつけ医の支援、地域の研修医、専攻医への教育、勤務環境改善に向けた取り組みがある。

【阿蘇医療センター】

地域のかかりつけ医からの紹介患者に対する医療提供が実施されている。特に、救急医療については阿蘇地域における救急診療を一手に担っている状況であり、かかりつけ医からの信頼が厚いと感じる。常勤医師によるへき地診療（波野診療所）で定期的な外来診療も実施されている。また、呼吸器疾患については当科への研修医や内科専攻医からの院内コンサルト症例を通じて専門医療の知識・技術の指導を実施している。今年度は常勤医師が1名派遣されており、入院症例の診療も提供可能となっている。

【荒尾市立有明医療センター】

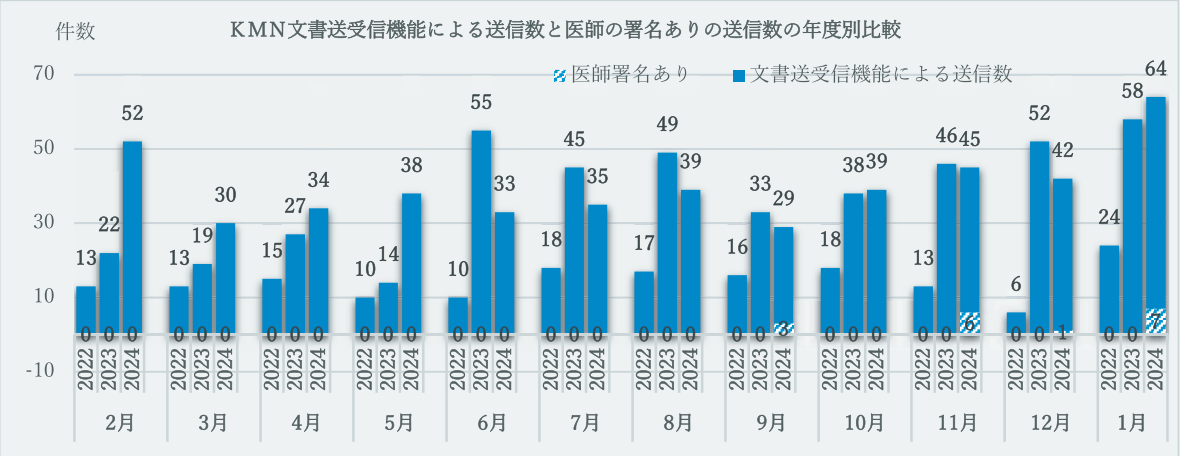
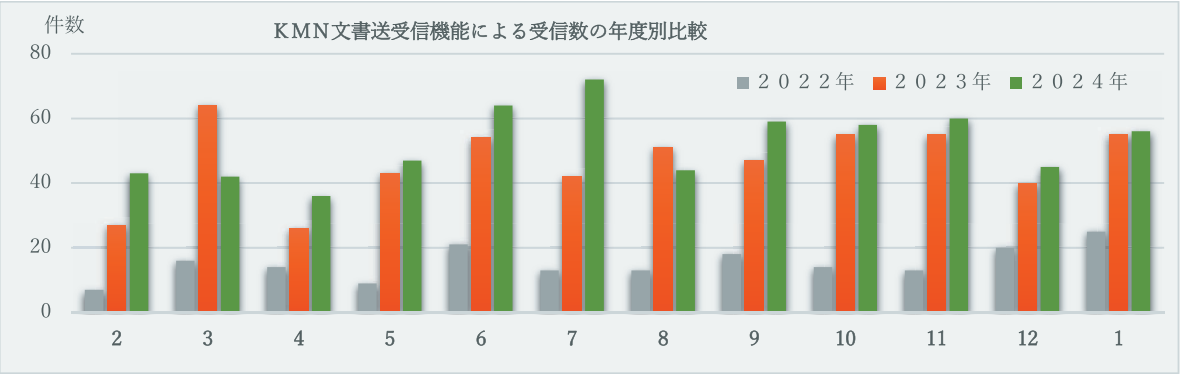
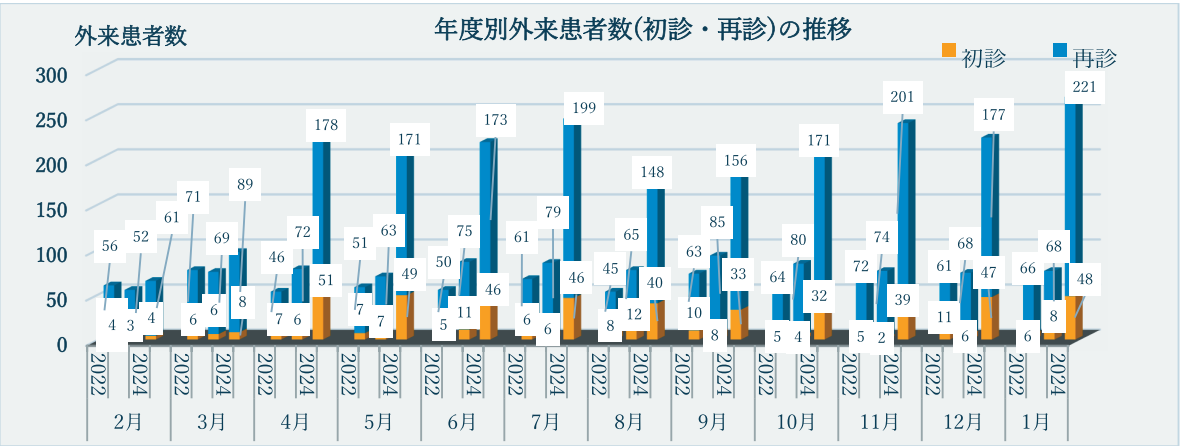
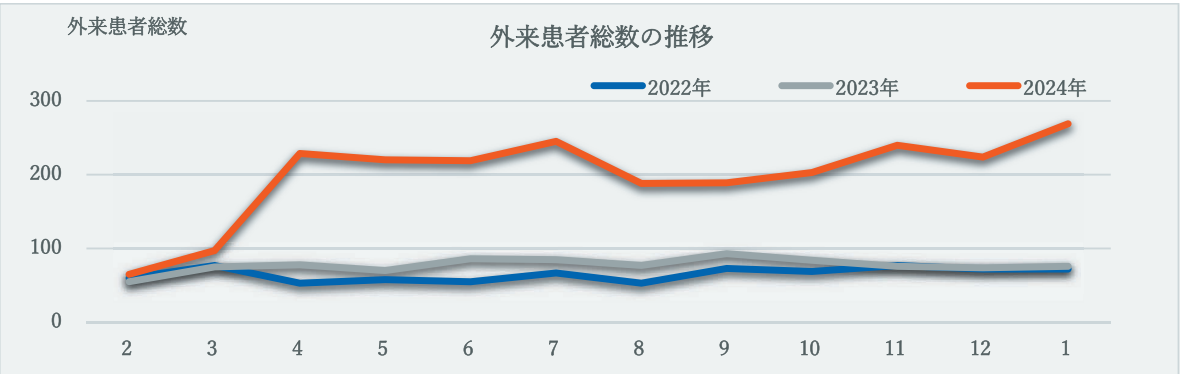
地域のかかりつけ医からの紹介患者に対する医療提供が実施されている。呼吸器疾患についても、呼吸器内科への院内コンサルトで専門的助言を受けながら可能な限り自院内で治療が完結できるよう努力されている。また、今年度は常勤医師が1名および顧問医師が1名勤務しており、入院症例に対する呼吸器診療も実施している。そのような症例でも、他の呼吸器内科専門施設でなければ検査あるいは治療などの対応が難しい症例については、近隣の専門機関あるいは熊本大学病院を含めた熊本市内の専門機関への紹介を提案している。勤務する研修医の数が多く、救急医療を含めた地域医療研修に熱心に取り組まれていると感じる。また、呼吸器疾患については当科への研修医からの院内コンサルト症例を通じて専門医療の知識・技術の指導を実施している。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

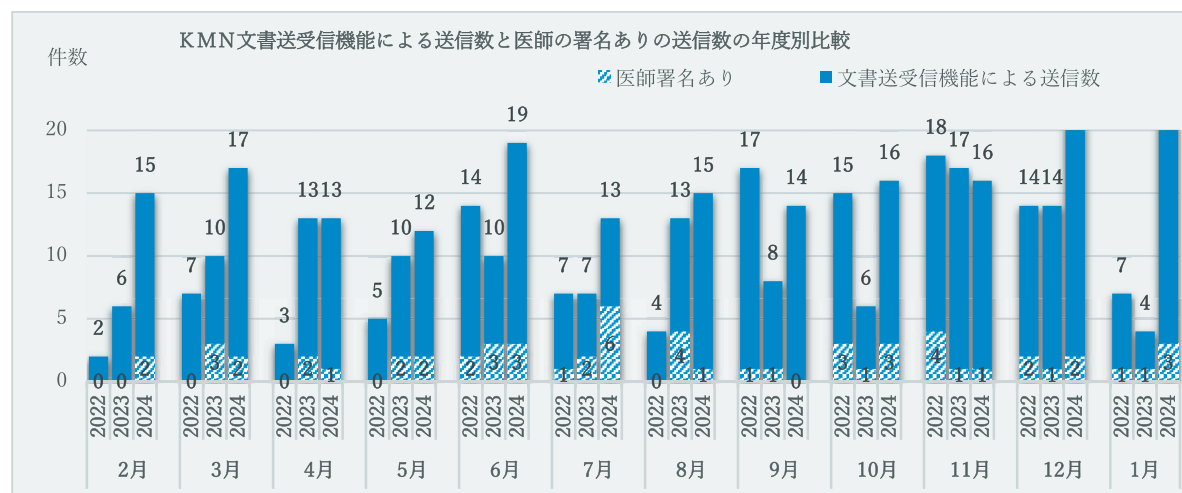
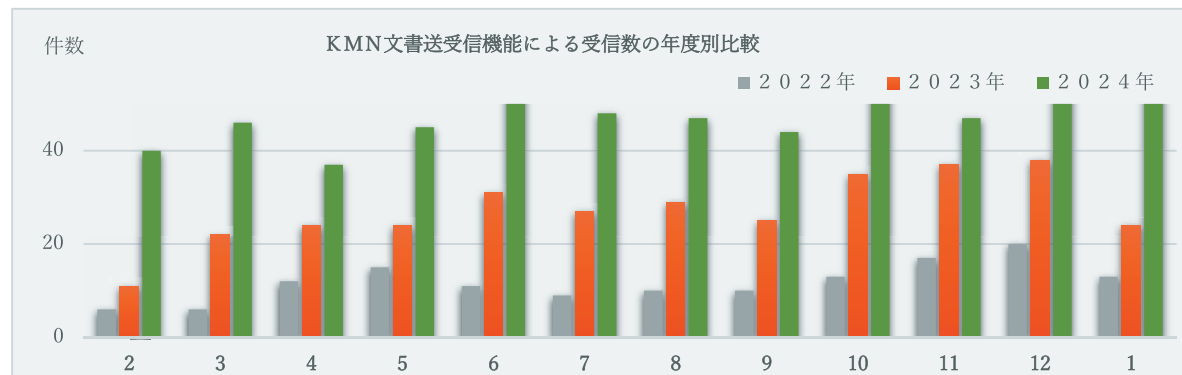
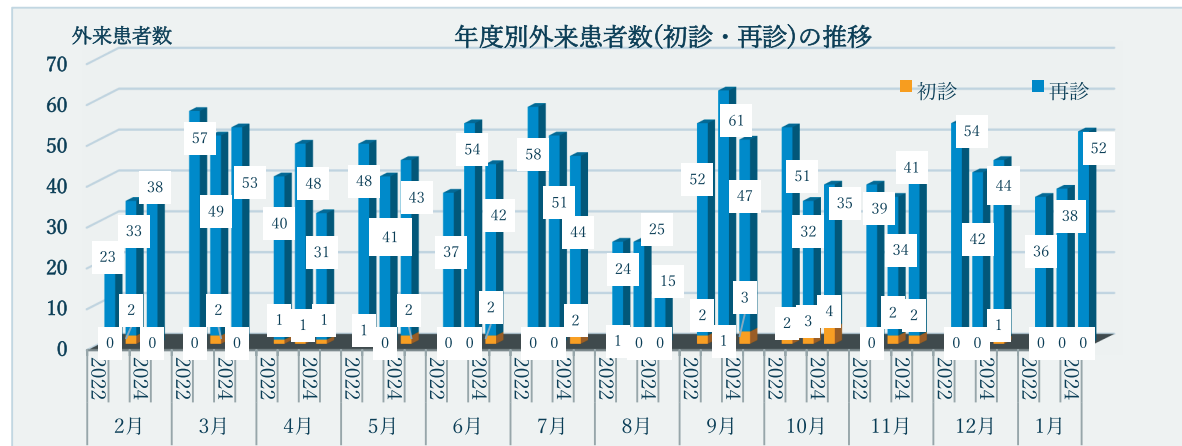
荒尾市立有明医療センターには今年度より呼吸器内科常勤医師が勤務しており、肺炎や気胸、気管支喘息発作をはじめとした呼吸器疾患で入院加療が必要なケースにも対応可能となったため、非常にスムーズな呼吸器専門医療の提供が可能となった。しかしながら、間質性肺炎、肺癌など専門的加療を要する疾患については、近隣の呼吸器内科専門施設や熊本大学病院への紹介など症例により適宜対応している。課題としては、高齢者が多い施設であり呼吸器疾患以外に複数の重い基礎疾患を有している症例があり、症例によっては近隣の呼吸器内科専門施設でも総合的なケアが難しい場合がある点である。基礎疾患毎に対処可能な専門医師、ないしは総合的な対処が可能な内科医師の配置が必要と考える。

阿蘇医療センターには今年度より1名の呼吸器内科常勤医師が勤務しており、入院症例の診療もスムーズとなっている。しかしながら、近隣のクリニックに呼吸器専門医が不在という状況であり、阿蘇医療センターへの紹介が集中している状況である。また、呼吸器内科以外の専門診療科についても常勤医師の数が少ない点が課題と考える。地域で完結出来るような医療提供の実施のためには、各専門領域の医師の配置が必要と考える。また、救急医療についても地域の中核となる病院であるため、救急部の専属医師の配置が望ましいと考える。

阿蘇医療センター 呼吸器内科



有明市立荒尾医療センター 呼吸器内科



派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院、山鹿市民医療センター
氏 名	赤池 公孝
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

【小国公立病院】

診療内容として外来診療が主となりますが、呼吸器疾患合併や呼吸器疾患にて入院されています患者さんにおける呼吸器疾患の対応および助言などを行っています。

- ・ 1ヵ月あたり 30 名程度です（病院全体では月 1297-1547 名）。
- ・ 肺癌などの外科的治療・化学療法は困難なため、他病院へ紹介を行っています。

【山鹿市民医療センター】

活動内容としては、週 1 回 3 時間の呼吸器内科外来を行っています。

- ・ 診療内容として外来診療が主となりますが、呼吸器疾患合併や呼吸器疾患にて入院されています患者さんにおける呼吸器疾患の対応および助言などを行っています。
- ・ 1ヵ月あたり 26-48 名です。
- ・ 肺癌などの外科的治療・化学療法は困難なため、県北地域の病院（くまもと県北病院や再春医療センター）を含め、他院呼吸器内科専門病院へ紹介を行っています。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

- ・ 小国公立病院では若手医師からの相談もあり、必要時は電話や直接電子カルテを交えて指導も行っています。山鹿市民医療センターでは該当する医師がいませんでした。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

【小国公立病院】

- ・ 1ヵ月あたり 30 名程度（病院全体では月 1297-1547 名）で、昨年より初診・再診ともに増加傾向にあります。呼吸器疾患に関しては間質性肺炎の管理や肺癌（経過観察や緩和主体の治療）症例の外来・入院治療も継続して診療できる状況です。

【山鹿市民医療センター】

- ・ 1ヵ月あたり 26-48 名でした（内、初診は 0-8 名）。
- ・ 当科にて継続診療を行いながら、近医クリニック紹介患者さんに関しては逆紹介も積極的に行いながら対応しています。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

【小国公立病院】

くまもとメディカルネットワークに関しては、昨年と同様になかなか難しい状況かもしれません。

そのような中でも使用実績はトータルで年間 273 件（受信 117 件、送信 29 件）あり、昨年と比較して増加傾向にはあります。

【山鹿市民医療センター】

令和 6 年度前期は全く使用ができていませんでしたが、後期より使用を行うこともあり、担当の方も配置いただいているため、経時的に使用頻度は増えている状況です。病院全体としても使用頻度は年々上昇しており本年度は 621 件に至ります（受信 486 件、送信 135 件）。KMN 使用には比較的問題なく行えている印象です（ただやはり普通に診療情報を行うより手間はかかっている状況です）。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

【小国公立病院】

地域の拠点病院ですが、呼吸器内科において、気管支鏡検査などは施行できないため熊本市内への紹介が必要です。一方で、一般内科診療の需要も高い状況で、健診（X線読影）などのサポートも並行して行っています。

【山鹿市民医療センター】

来年度も本年度同等かそれ以上に患者さんの増加が予測されます。呼吸器内科としての専門的な検査機械がないため可能であれば呼吸機能検査（DLco 測定や呼気 NO 測定）ができますと呼吸器疾患における地域医療への貢献ができるかと考えます。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

【小国公立病院】

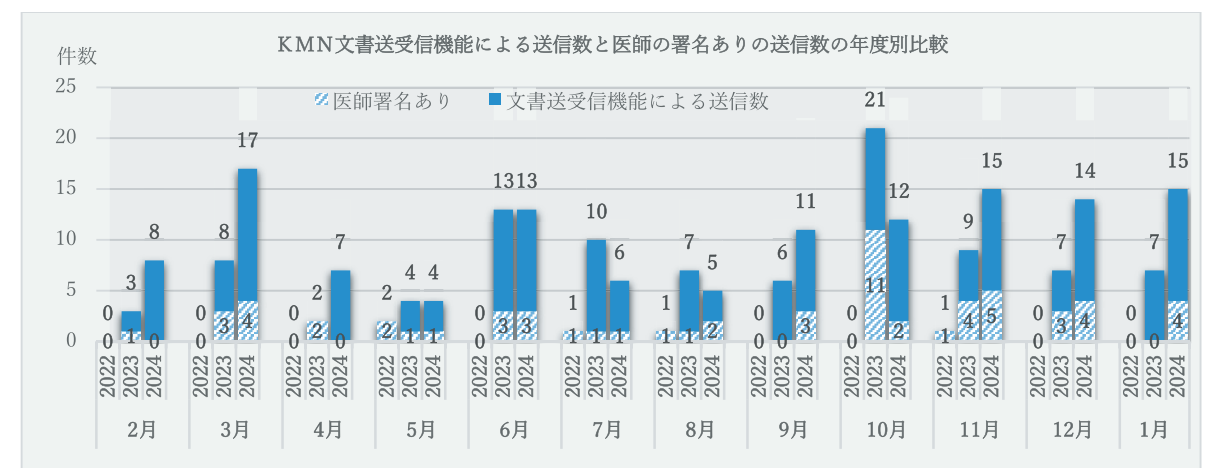
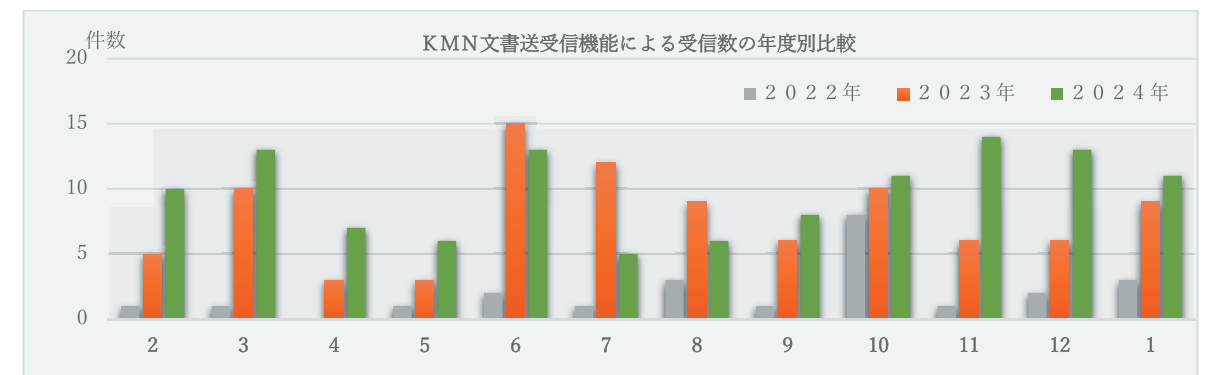
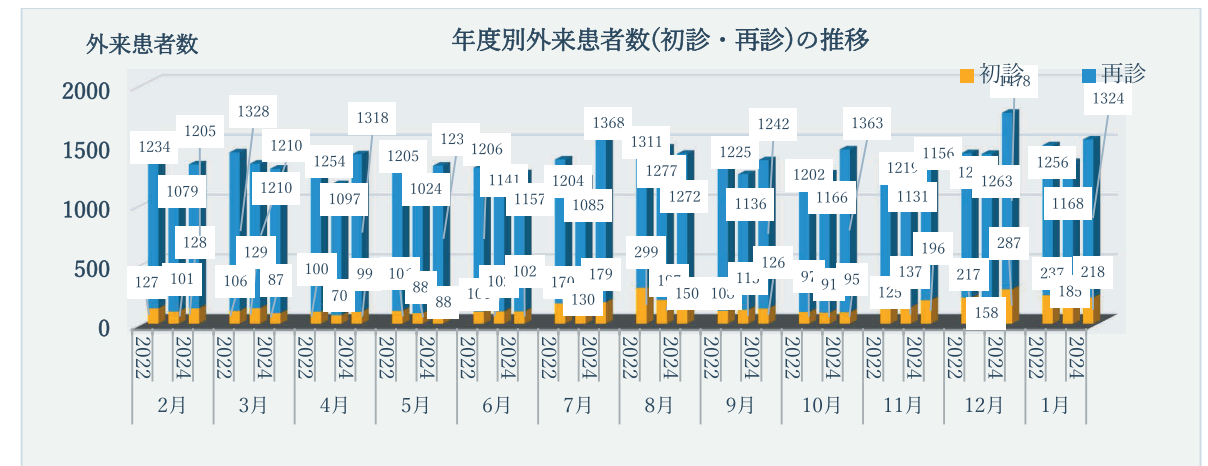
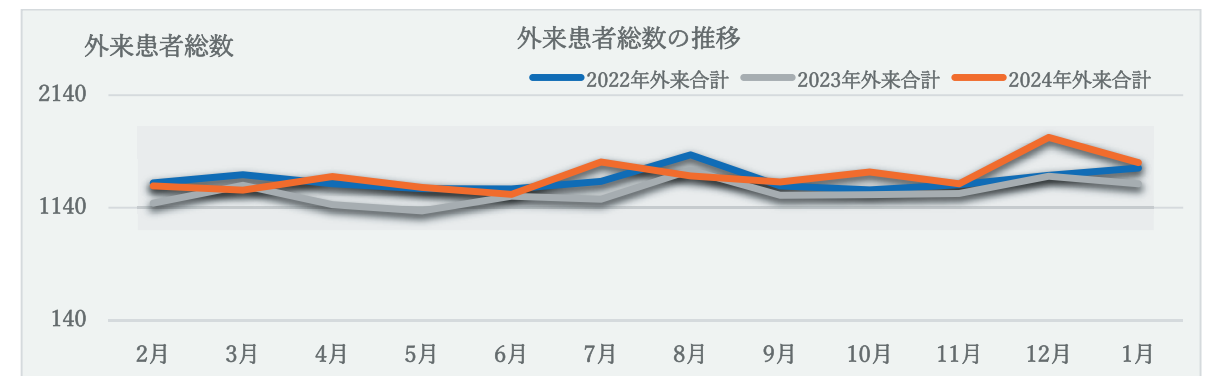
熊本メディカルネットワークは何とか機能しはじめている状況ですが、実質、診療情報を手紙で別途に必要な状況です。

また、来年度より呼吸器内科を主とする内科常勤医の退職に伴い、入院患者の呼吸器疾患の対応相談が増える可能性が示唆されます。

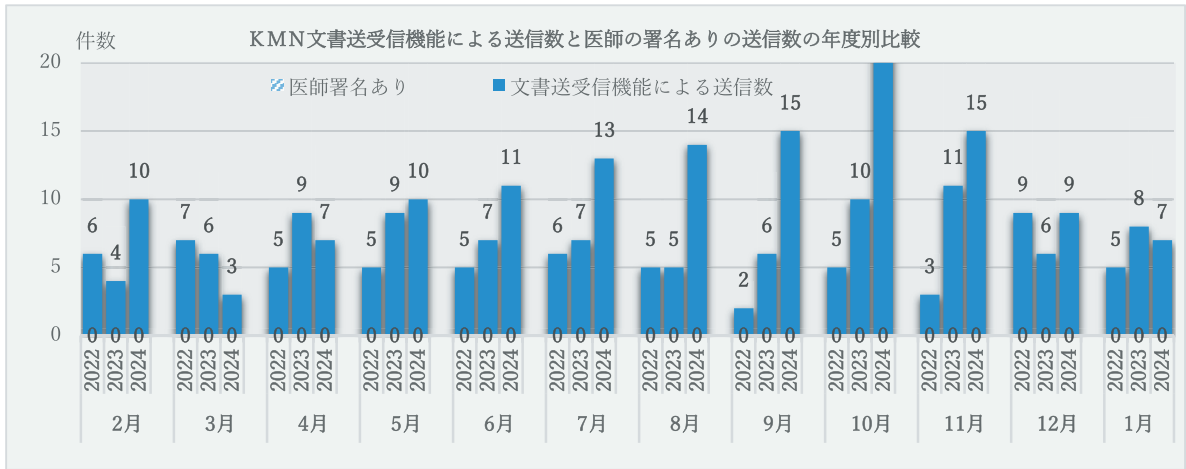
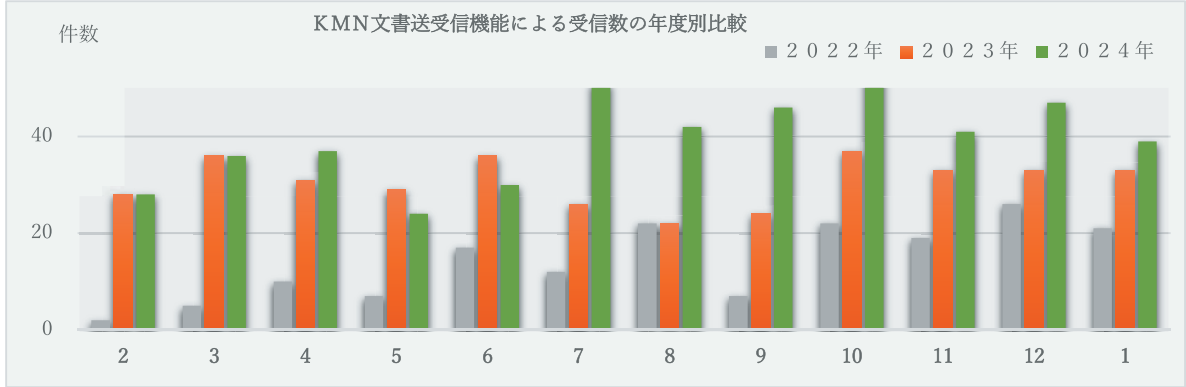
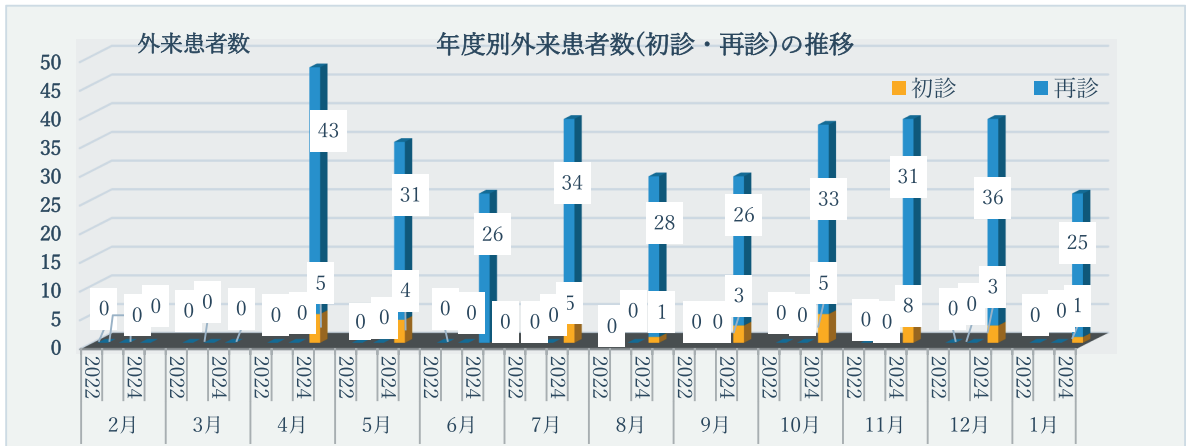
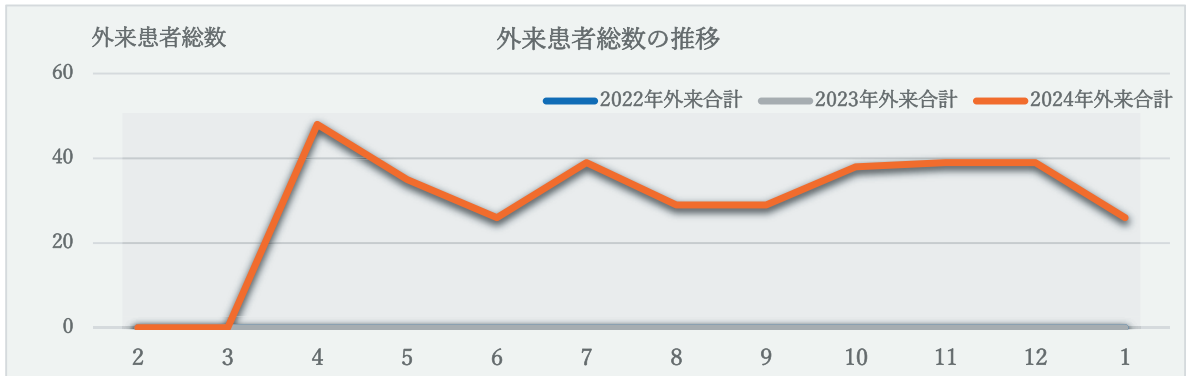
【山鹿市民医療センター】

同院には常勤医が不在のため侵襲的精査は困難かと考えます。しかし他院や入院中の患者さんに関して、呼吸器疾患として common disease である COPD や喘息の評価の依頼がある場合に、呼吸機能検査が限られており評価が難しい場合があります。よって、DLco や呼気 NO 側的などができるとより地域医療に貢献ができるかと考えます。

小国公立病院 呼吸器内科



山鹿市民医療センター 呼吸器内科



派遣先地域医療拠点病院	熊本再春医療センター、上天草総合病院
氏 名	堀尾 雄甲
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

2024 年度より、再春医療センター、上天草総合病院に地域医療連携ネットワーク寄附講座事業として、派遣され、地域近隣の診療所、病院からの紹介患者の診断治療、再紹介、高次医療機関への再紹介を行った。また、くまもとメディカルネットワークの推進のために、近隣医療機関へ参加加入依頼を行ってきた。

呼吸器内科若手常勤医の症例相談、診断、治療方針、学会での発表等のアドバイスをを行い、初期研修医にも呼吸器疾患の指導、アドバイスをを行い、研修医教育にも貢献している。

呼吸器疾患以外にも内科医として地域住民に対して長年苦しんでいた症状の診断治療や教育、生活指導、常用薬の整理を行い、コミュニケーションを重視した良好な医師関係の構築および適切な医療を届けている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手呼吸器内科医師に対しては、専門医取得に必要な症例登録や要約登録の促し、学術集会参加の勧め、病欠時の外来患者代行、入院患者のアドバイスをを行っている。初期研修医には、呼吸器疾患の診断治療の評価、アドバイス、呼吸器疾患の外来引継ぎを行い、研修医教育にも貢献している。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

2024 年度より、再春医療センター、上天草総合病院に地域医療連携ネットワーク寄附講座事業として派遣されており、2024 年度以前のデータはない。

【再春医療センター】

再春医療センターは、呼吸器内科医師数は 6 人と比較的多いが、産休・育休の医師も複数いる一方で、呼吸器疾患の地域医療機関からの紹介は多く、院内コンサルトは増加、地域住民の健康管理、予防医療、疾患治療を中心に継続的に診療支援を行っていく必要がある。

【上天草総合病院】

上天草総合病院では、主に週末の日直当直の対応を行っている。年々、医師が減少してきているが、患者数は多く、診療支援が必須である。呼吸器内科医師も常勤は一人であり、外来支援が必要と考える。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

くまもとメディカルネットワークの送受信数は再春医療センター、上天草総合病院ともに伸びている。継続して推進していきます。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

(1) 地域医療の現状と今後の方策の検討

再春医療センターについては、県北地区に同等規模の病院がなく、特に呼吸器内科領域を専門に扱う医療機関はほぼ存在しない。そのため、新規患者の受診が多く、今後も外来支援が必要と考えられる。

上天草総合病院では、毎年医師数が減少し、それに伴い診療科も縮小している。特に外科領域では手術が難しい状況にあり、地域医療の充実が課題となっている。呼吸器内科に関しては、来年度より自治医科大学卒の地域枠の若手医師の派遣が決まっており、外来支援も追加される予定である。さらに、地域枠の若手医師の支援を強化し、天草医療センターとの連携を深めることで、より高度な専門医療の提供が可能となる見込みである。

(2) 専門医療の実践と診療支援

専門的な診断・治療を提供しながら、総合内科領域においても高い専門性を活かした診療を行った。

(3) 若手医師への指導

症例の相談対応、検査・治療方針の助言、学会発表や論文作成の指導、専門医取得の支援など、多岐にわたる教育活動を行った。

(4) 地域住民・医療従事者への啓蒙活動

予防医療の推進を目的とし、ワクチン接種の重要性を周知するとともに、自宅でできるリハビリテーションに関する情報提供を行った。

(5) くまもとメディカルネットワークの普及

送受信数が増加し、新規加入者も増えていることから、地域医療の連携強化が進んでいる。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

2024 年 4 月より施行された医療機関の働き方改革により、地域医療の在り方が大きく変わろうとしている。これまでは、常勤医の少ない病院でも夜間・休日の医療提供を医師の負担のもとで維持してきた。しかし、医療スタッフの減少と相まって、今後は医療機関の受け入れ体制が厳しくなる可能性がある。特に地方では医師不足が深刻化し、診療科の縮小や救急医療の対応困難といった課題が顕在化している。

このような状況を踏まえ、解決策としては以下の点が重要となる。

(1) 地域住民への啓蒙活動の強化

医療資源の適正利用を促進するため、夜間・休日の受診基準やセルフケアの指導を行う。また、軽症患者の一次医療機関での対応を促すことで、医療機関の負担軽減を図る。

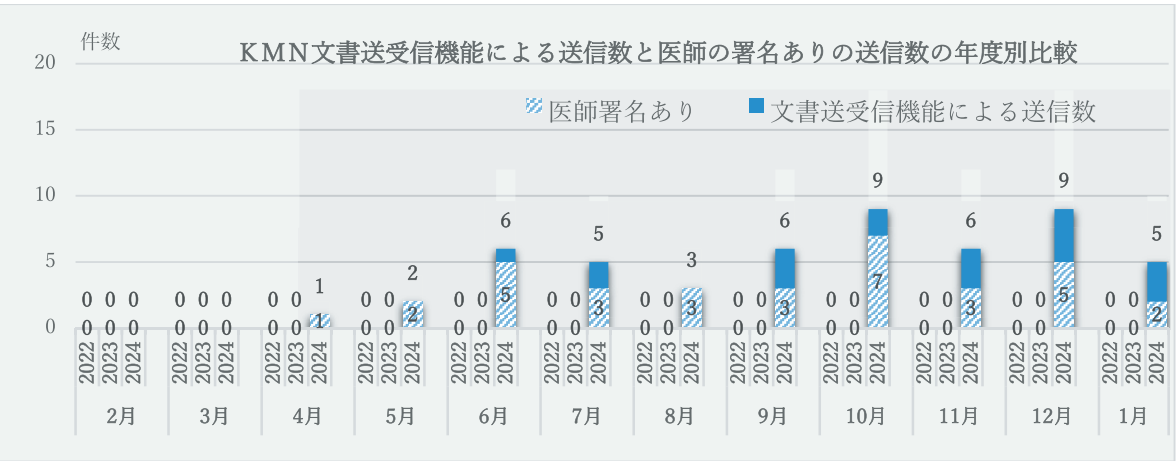
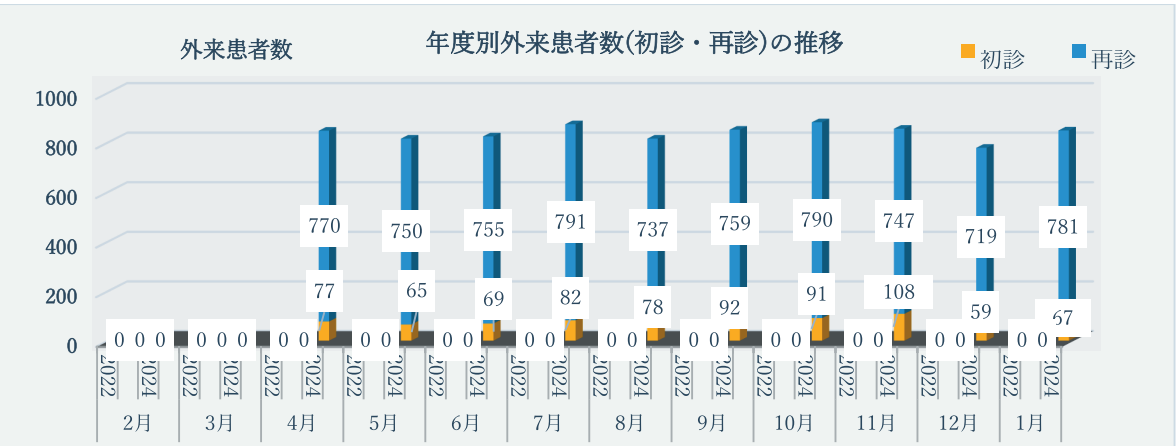
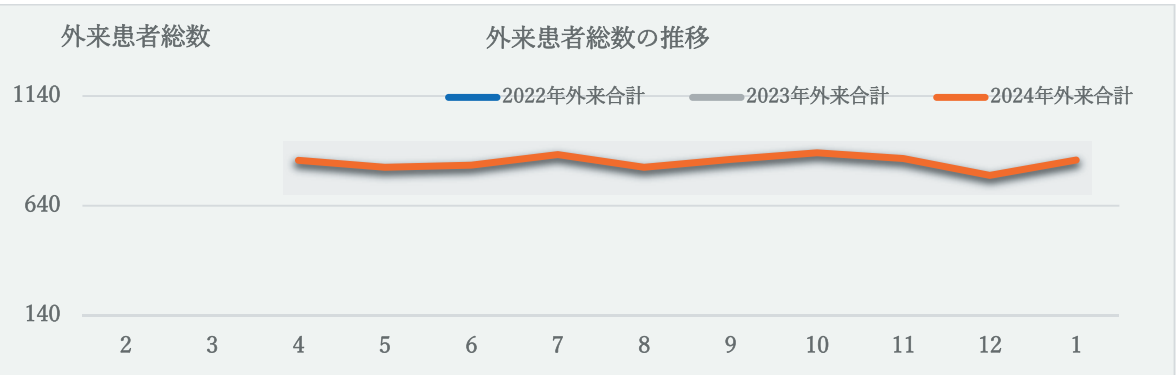
(2) 夜間・休日診療体制の見直し

医師の負担を軽減しつつ継続的な医療提供を維持するため、夜間・休日診療後の休息時間の確保を徹底する。また、常勤・非常勤医師の連携を強化し、シフト制を取り入れることで、より持続可能な診療体制を構築する。

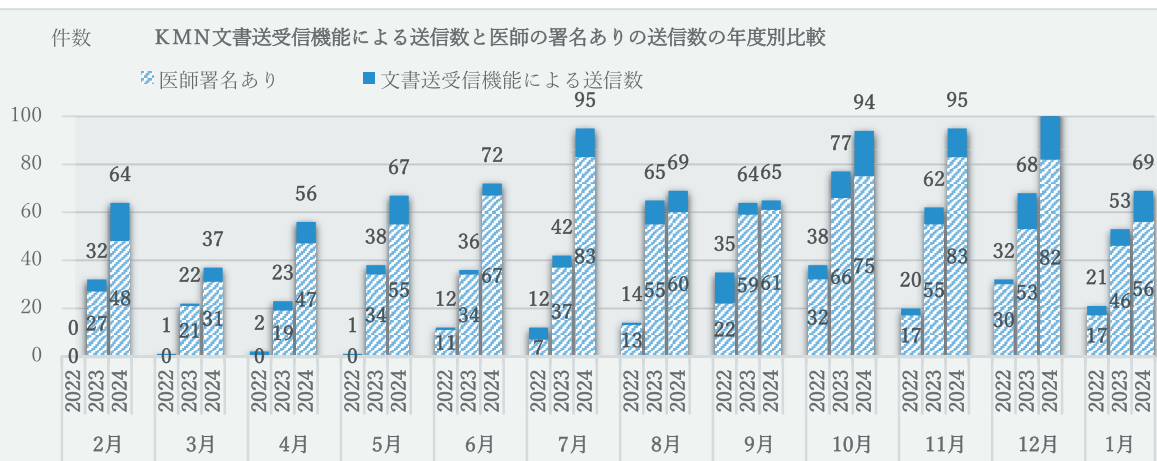
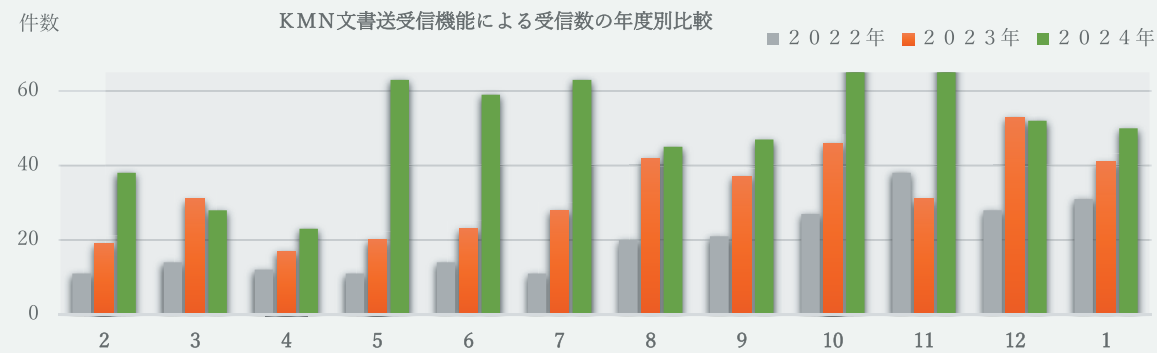
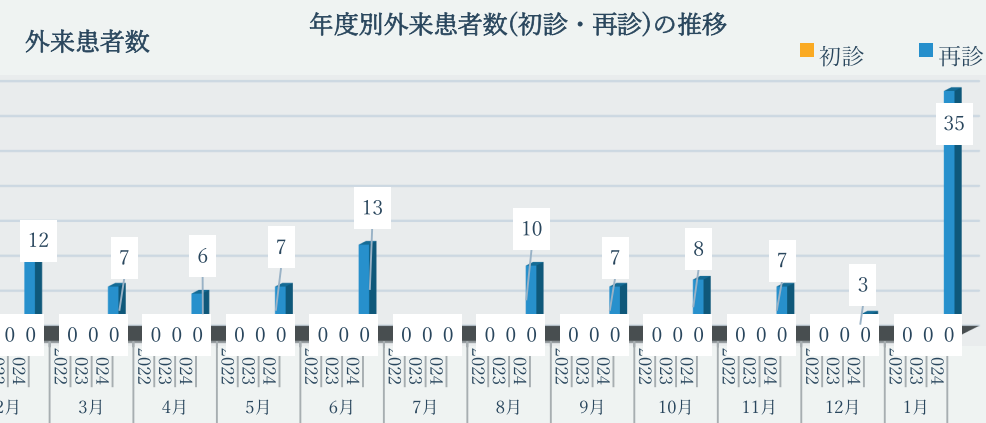
(3) 若手医師の育成と地域医療への貢献

若手医師が成長し、一人前の医師として自立できるよう、教育・支援・学びの機会を提供することが不可欠である。熊本大学病院の地域連携ネットワーク寄附講座を活用し、地方医療の現場での研修機会を増やし、地域医療を担う人材の育成に努めたい。

熊本再春医療センター 呼吸器内科



上天草総合病院 呼吸器内科



派遣先地域医療拠点病院	阿蘇医療センター
氏 名	徳永 堯之
診療科名	消化器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

3人の消化器内科医が、月・水・金に診療支援を行っている。消化器症状を有する初診患者、消化管・肝・胆膵疾患患者の定期外来、二次検診、消化管内視鏡検査および治療を行っている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

とくに対象となる医師がいない。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

消化管・肝疾患、胆膵疾患患者の診療として、診察、血液尿検査、腹部超音波検査、CT検査、MRI検査、生物学的製剤および化学療法を含む内科的治療を行っている。

また、二次検診、消化管内視鏡検査、内視鏡的粘膜切除術も行っている。当年度は、初診患者数169名、再診患者数1386名であった。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

主に熊本大学に紹介する際、あるいは逆紹介する際に熊本メディカルネットワーク（紹介状、検査結果、画像データおよびレポート）を使用している。当年度の新規参加者は129名で、文書送受信機能による受信を626件、文書送受信機能による送信を480件行った。

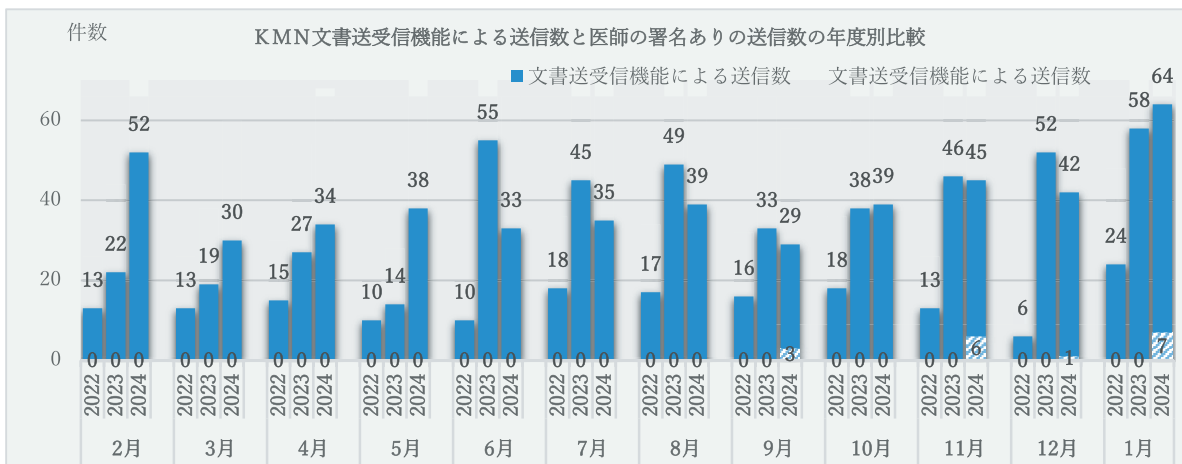
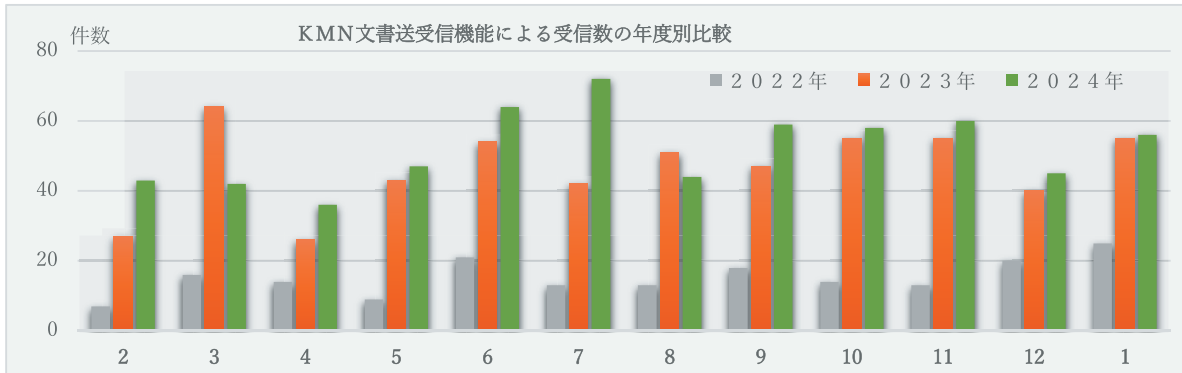
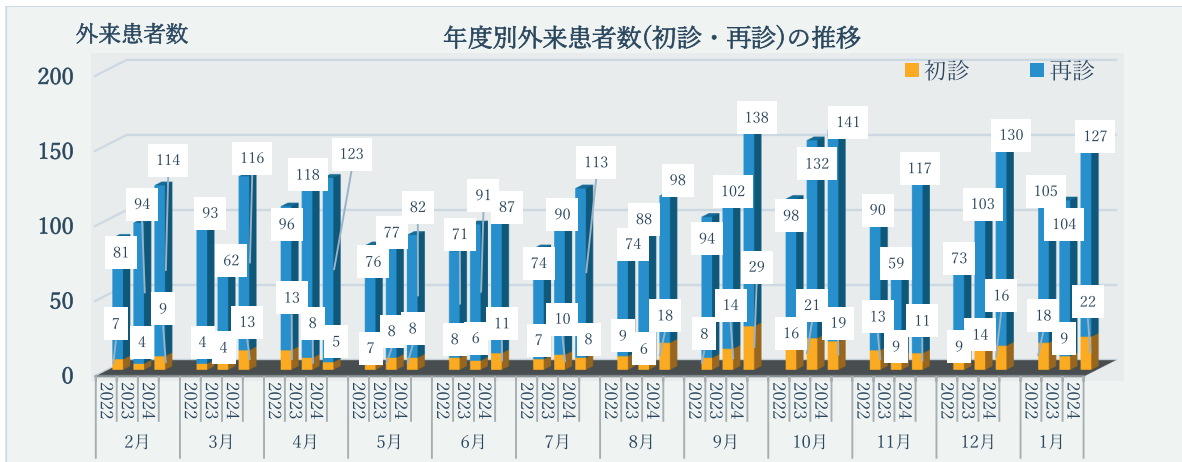
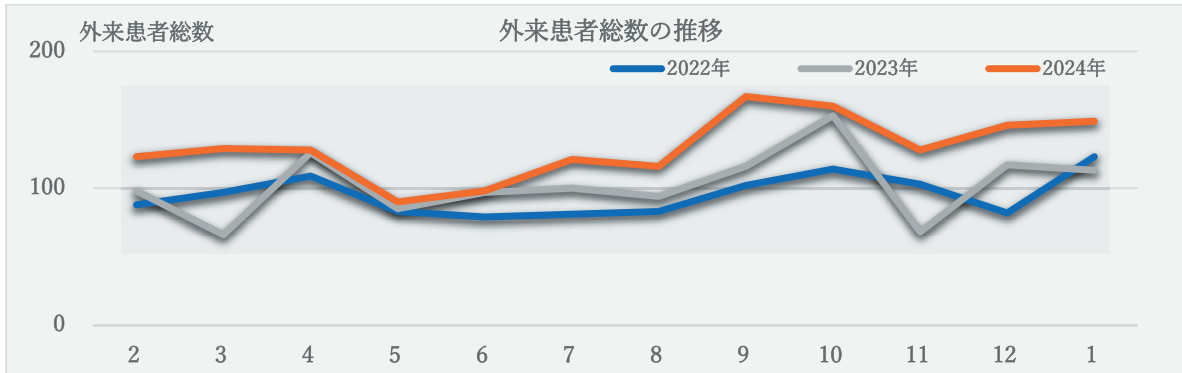
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

阿蘇地域の消化器疾患の診療および健診を通じての健康促進に貢献している。阿蘇医療センターで診療を完結できない症例は主に熊本大学病院に紹介している。熊本大学病院の診療後には当施設で引き続き診療に当たっている。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

引き続き阿蘇地域の診療支援を行っていく。

阿蘇医療センター 消化器内科



派遣先地域医療拠点病院	熊本労災病院
氏 名	松野 健司
診療科名	消化器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

- 消化器病学会指導医/内視鏡学会指導医の資格を有しており、消化管内視鏡検査および内視鏡治療の実施、若手医師の指導を行っている。特に治療難易度の高い内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）については中心的に実施および若手医師への指導を行っている。
- 内視鏡治療以外でも消化管領域については相談の機会を設け、推奨される方針などを提示している。消化管以外の領域についても相談を受けた場合には、熊本大学の各専門医師へ情報提供して推奨される方針などを確認し、その方針を伝達している。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

- 熊本労災病院消化器内科に所属する熊本県の修学資金貸与医師等若手医師 1 名を含め、同院の若手消化器内科医師へ指導を行った。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

- 2022 年度から 2024 年度にかけて、外来患者数・入院患者数ともにほぼ横ばいから微増で推移している。熊本市内への症例集中が進む中で、地域医療を維持できているデータを示していると考える。手術件数も増加しており、地域医療連携ネットワーク寄附講座医師が応援することで、治療を完結できていることも一因となっていると考える。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

- 熊本県内の拠点病院や八代圏域の中核病院、一般診療所とのオンライン連携を実践しており、メディカルネットワーク利用件数は増加傾向である。

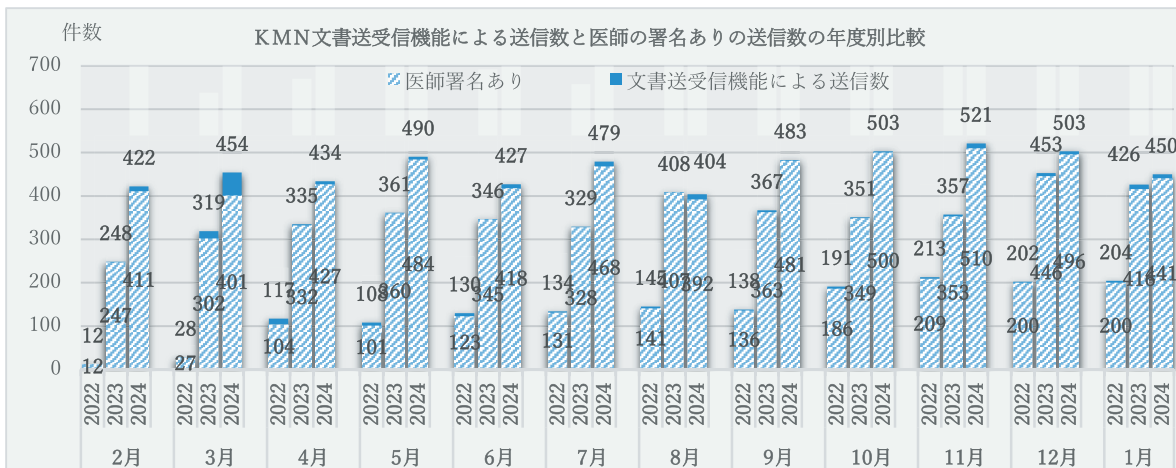
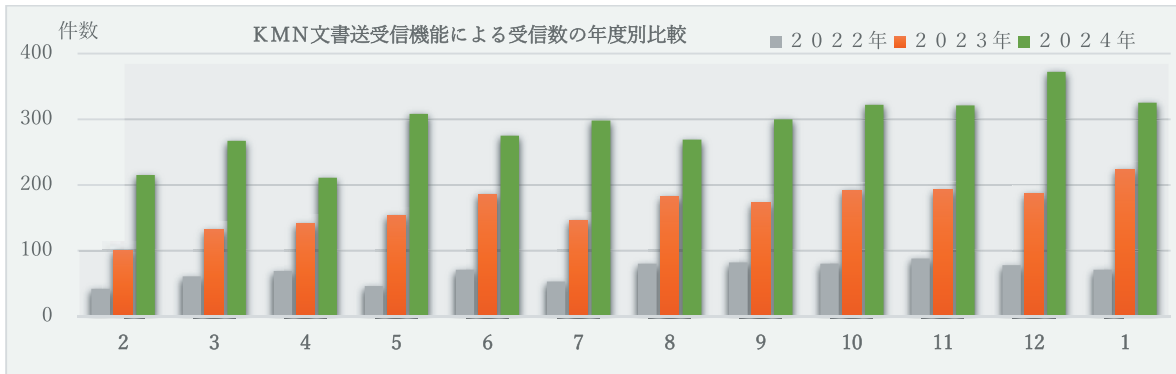
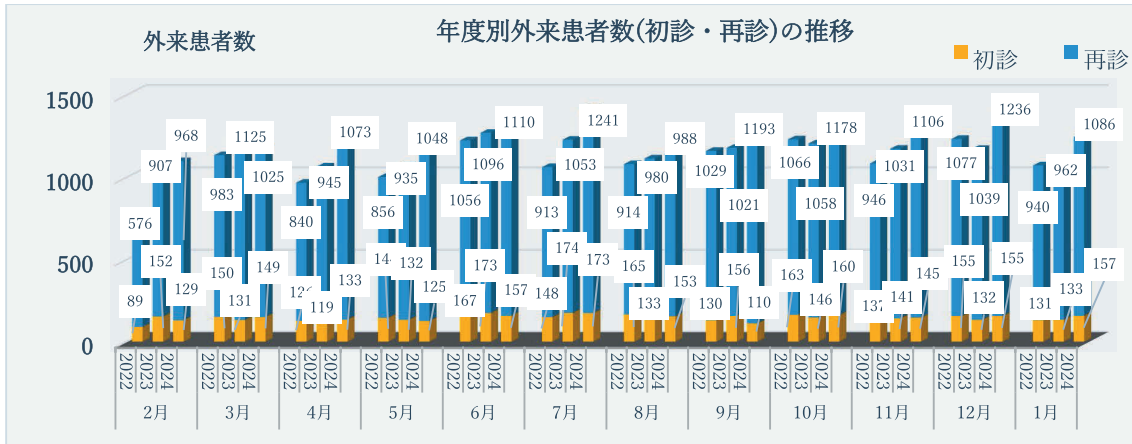
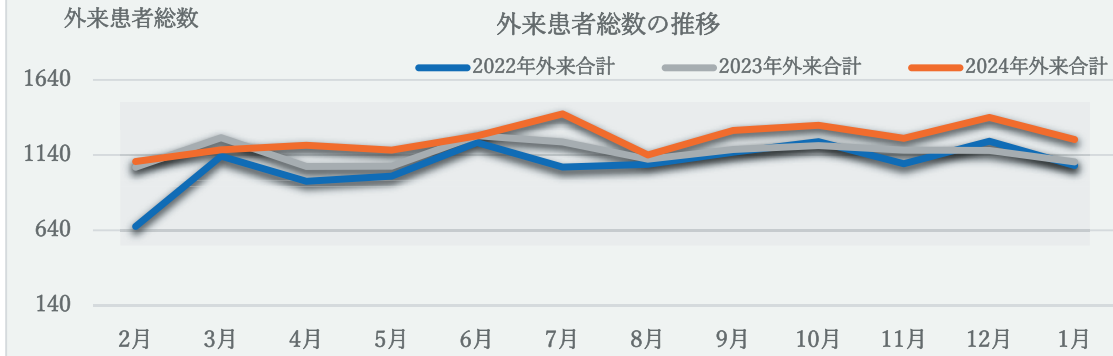
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

- 熊本労災病院は八代地域のみならず熊本県南地域における中核病院の 1 つとして救急医療をはじめとする地域の高度専門医療を担っている。
- また熊本大学病院から医師が赴任することで定期的に医療連携の機会を設けることができ、より専門性が高い症例については転院加療などにスムーズに移行することができる。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

- 消化器内科診療は、消化管疾患・胆膵疾患・肝疾患と多岐にわたり、近年それぞれの分野内でも専門性がより高くなってきている。地域医療拠点病院において専門医師が各分野全てで揃うことは現実的には難しい。各病院の苦手分野などを、今後も地域医療連携ネットワーク寄附講座による専門医・指導医の医師派遣などで補っていく必要があると考えられる。

熊本労災病院 消化器内科



派遣先地域医療拠点病院	有明医療センター
氏 名	飯尾 悦子
診療科名	消化器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

近隣の医療機関からの患者様をご紹介いただき、精査加療を行い、かかりつけ医の先生と連携しています。院内のHBV,HCV患者の拾い上げに関して、中央検査部と協力して取り組んでいます。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

研修医等と接する機会はあまりありませんでしたが、今後は研修医への肝臓疾患の教育・指導なども行ってきたいと思います。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

近隣の医療機関からの紹介患者さん、また健診2次精査などに対応しています。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMNで大学と有明医療センター間のデータやり取りは増えています。近隣開業医さんではKMN非対応が多く、いまだ紙媒体でのFAXでのやり取りが多いのが現状です。

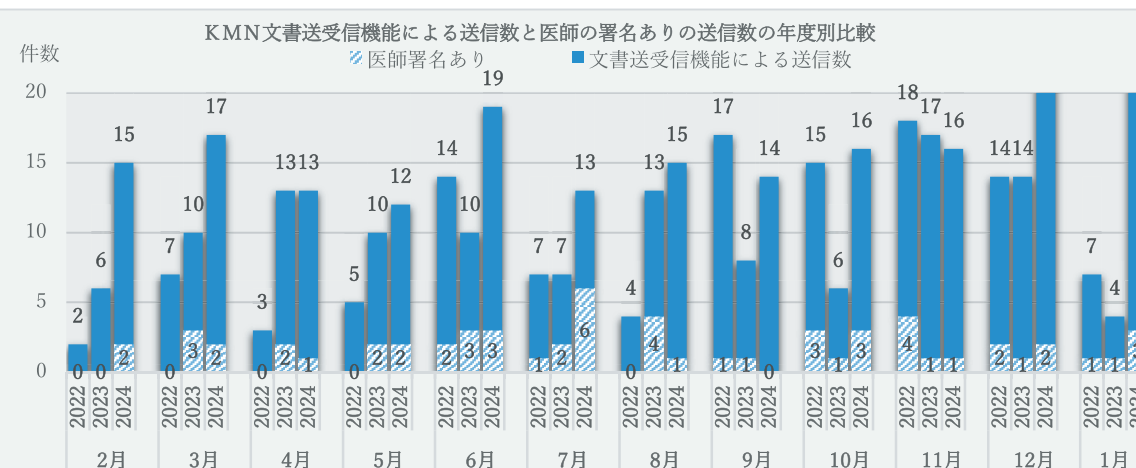
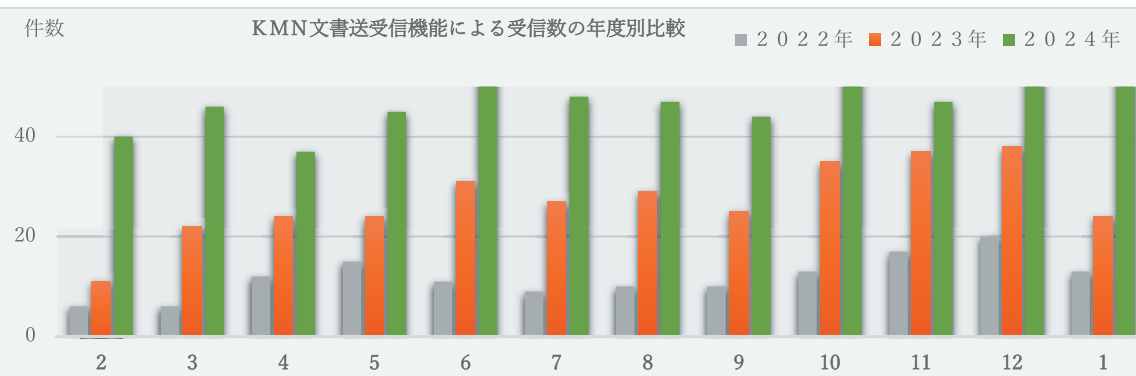
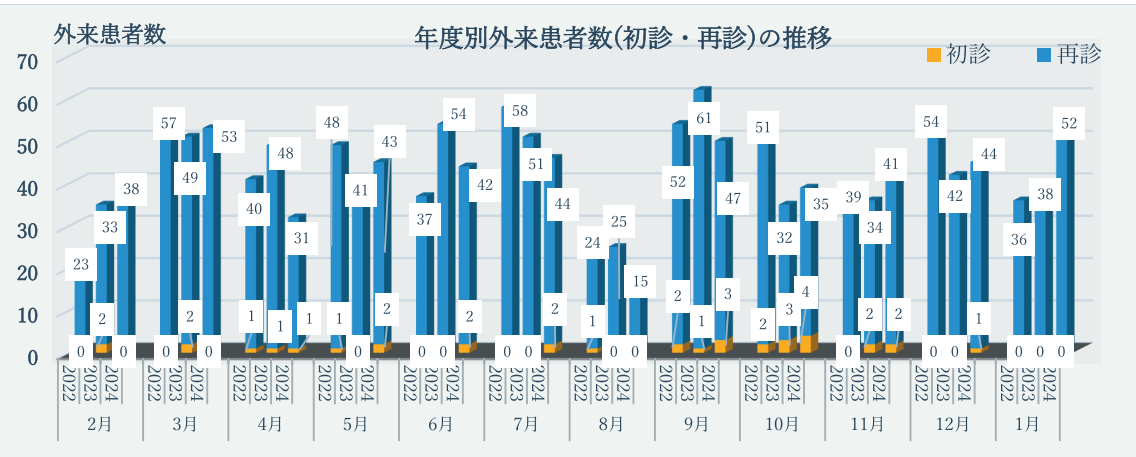
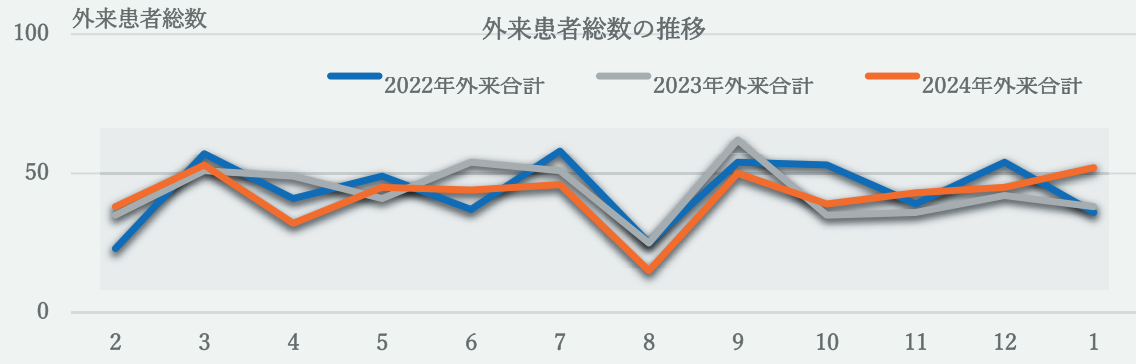
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域の開業医さんからの紹介患者さんの精査、また、さらに高次医療機関での精査治療が必要な場合は大学病院へ紹介しています。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

熊本県は全国的にも肝臓が多く、またかなり進行した状態で発見されることも多いため、早期発見、早期治療のために地域の医療機関との連携が必要と思われます。

荒尾市立有明医療センター 消化器内科



派遣先地域医療拠点病院	熊本総合病院
氏 名	坂田 康明
診療科名	血液・膠原病・感染症内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

熊本総合病院を拠点として、県南地域の膠原病領域の診療支援と病診連携の推進、KMN ネットワークの普及を目標に活動した。年々、近隣施設との診療交流は円滑となり、逆紹介の数も増えている。KMN ネットワークの使用実績も昨年を上回る結果であった。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

当科所属の地域枠の若手医師が、同院の常勤として勤務しており、週1回の外来勤務日の度に入院・外来症例について診療方針相談や指導を行っている。熊本総合病院には日本リウマチ学会指導医（非常勤1名＝小生）、専門医（非常勤1名、常勤1名）が勤務しており、日本リウマチ学会認定教育施設の資格を維持しており、若手医師の専門医キャリアのための研修期間としてカウントされる。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

週1回のリウマチ膠原病専門外来にて、初診2名＋外来20人前後の診療を行っている。地域の中核病院の専門医とも連携し、主に精査と寛解導入を熊本総合病院で行い、安定されたら地域の医療機関へ逆紹介を行っており、およそ毎月5例程度は逆紹介を行っている。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMN ネットワークの利用状況については、送信数1436件（前年比1.7倍）、受診数1984件（前年比1.6倍）と、前年と比較して飛躍的に伸びている。KMN 新規参加者数は年間88件と前年より落ち着きつつあるものの、これは既存の定期通院患者の登録がほぼ終了し、新規患者への案内に限られてきたことが要因と思われる。

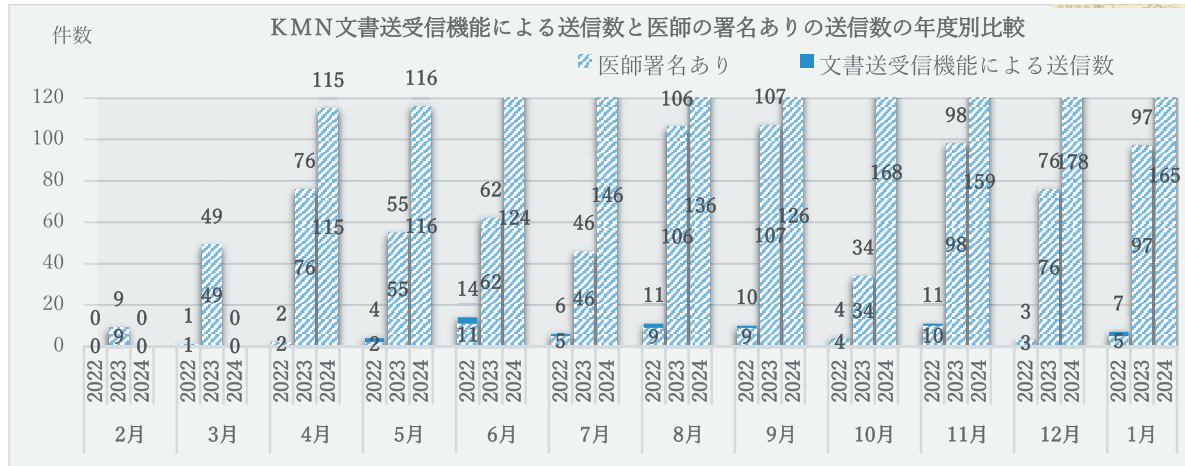
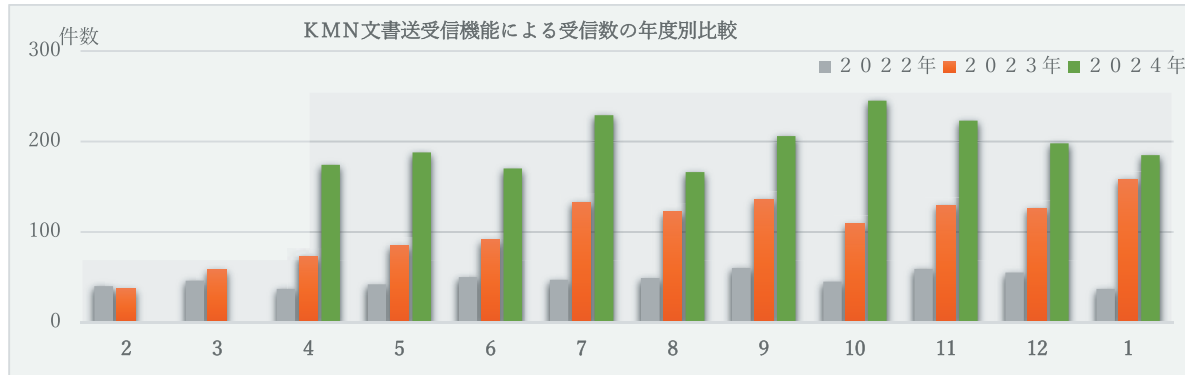
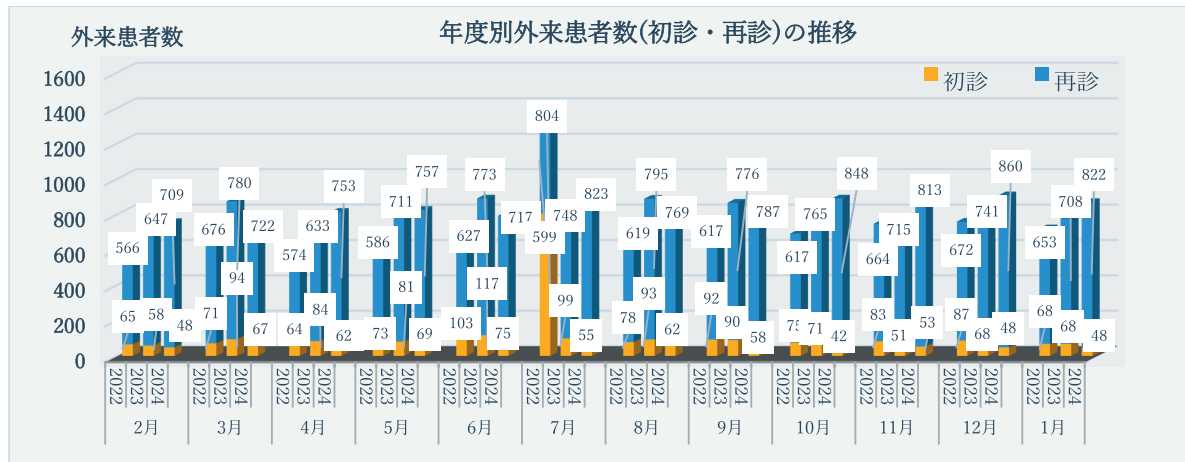
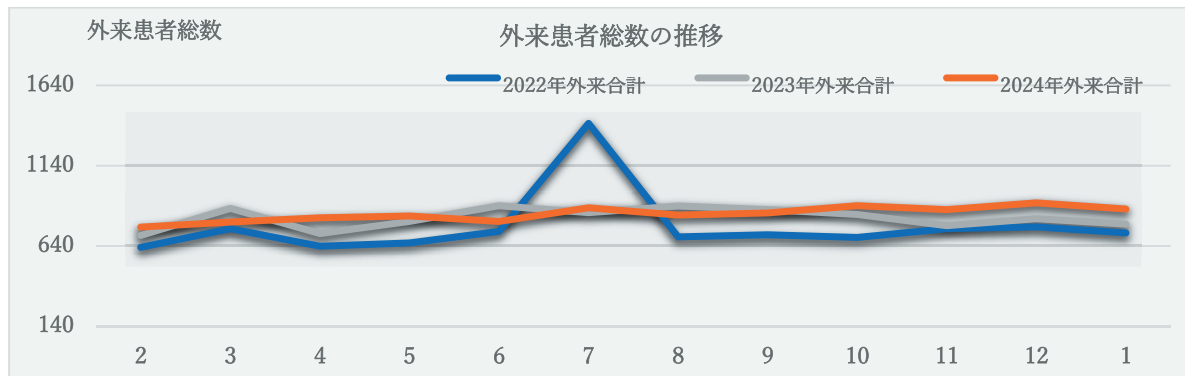
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

医療圏としては県南地域（人吉、水俣）や鹿児島県出水市までを主にカバーしており、地域の医療施設で可能な状態まで安定した患者については、近隣の病院やクリニックへ逆紹介を行い、病診連携を進めている。
また、年に1-2回は八代地域での講演会に参加し、地域における膠原病診療のアップデートと周辺の医療関係者との交流を行った。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

八代地域からさらに南方の水俣や出水市では十分なフォローを依頼できる医療機関が少なく、県南地域に限っても医師の偏在は見られる。また、地域の高齢化により、多疾患併存症例や通院困難例もあり、地域総合病院の充実と、訪問診療の充実の両面が必要と思われる。

熊本総合病院 血液・膠原病・感染症内科



派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院、上天草総合病院
氏 名	小野 薫
診療科名	糖尿病代謝内分泌内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

【小国公立病院】

総合診療科内で、糖尿病内分泌疾患を主に診療している。血糖コントロール不良の症例、インスリン療法の導入、甲状腺・副腎疾患の紹介などが増え専門性が高まっている。患者数は増加傾向にあり、高齢化を理由に、熊本市、大分県日田市の医療機関からの紹介されてくる患者も増えている。

月に1回、小国郷糖尿病対策チームブルーの定例会に参加している。病院スタッフや、小国圏域の保健師で構成された糖尿病対策チームであり、毎月40名ほどの患者について受診状況、生活状況や保健指導の内容などの情報を共有し、糖尿病合併症予防につなげるとともに、糖尿病の一般的な知識に加え、新規薬剤やその副作用、新たなデバイスの紹介などの情報発信に努めている。また2024年10月に研修会を実施し講演を行った。医療従事者、保健師等 多くの方に参加いただいた。

【上天草総合病院】

代謝内科は週2日間の専門外来を行っている。外来は2型糖尿病の他、1型糖尿病、その他疾患による糖尿病（膵摘出後、肝硬変、遺伝子異常等）などがあり、専門性が高い。経時的な血糖測定が可能なCGM（Continuous Glucose Monitoring、持続血糖測定）の導入も進んでおり、専門医療の向上に貢献していると考えている。内分泌科は甲状腺、副腎の疾患を中心に取り扱い、近隣医療機関からの紹介も多く、必要時は大学病院に紹介している。糖尿病などは病状が安定すれば、積極的に逆紹介を行っており、医療圏内である程度循環されていると考えている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

インスリン療法、内分泌疾患の診断・治療に際し相談があれば指導を行っている。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

【小国公立病院】

年度別外来患者総数は、2022年 16647人、2023年 15110人、2024年 17082人で外来患者総数も年々増加傾向にある。

【上天草総合病院】

外来患者数に関しては減少しています。こちらで把握できる情報に限界がありますので分析はしていませんが、おそらく外来担当医の移動・減少によると思われます。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

【小国公立病院】

新規参加者は多くない。さらなる努力が必要だと思います。しかしながら地域的に住民数が少なく、高齢化、少子化を考えれば今後数を増やすのは難しいのではないかと思います。KMNを使用した文書送信数は伸びており、浸透してきていると考えますが、今後も派遣医師から使用数を伸ばすよう努力します。

【上天草総合病院】

KMNの新規参加者数はここ3年は増加傾向にある。送信数、医師署名ありの送信数も増加傾向であり浸透しつつあると考える。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

【小国公立病院】

小国公立病院は県境にあり周辺医療機関が少ないことから、中核病院とかりつけ医療機関の両方の役割があります。総合内科的なスキルを求められている印象です。当科に関しては、徐々に糖尿病の紹介患者が増え、自ずとスタッフの専門的な知識も増えたのではないかと思います。良い傾向が見えていると思います。

【上天草総合病院】

糖尿病内分泌科としては、専門医が派遣されており、特殊な手技、機材が必要な疾患は少ないことから過不足なく医療を提供できていると考えます。病院としても糖尿病教室等があり、啓蒙活動等も行われていると思います。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

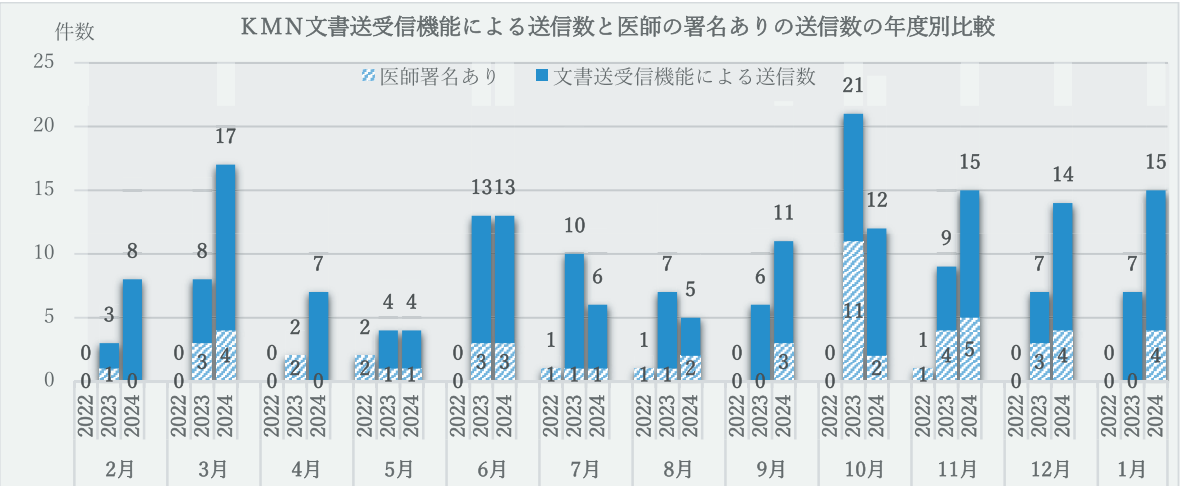
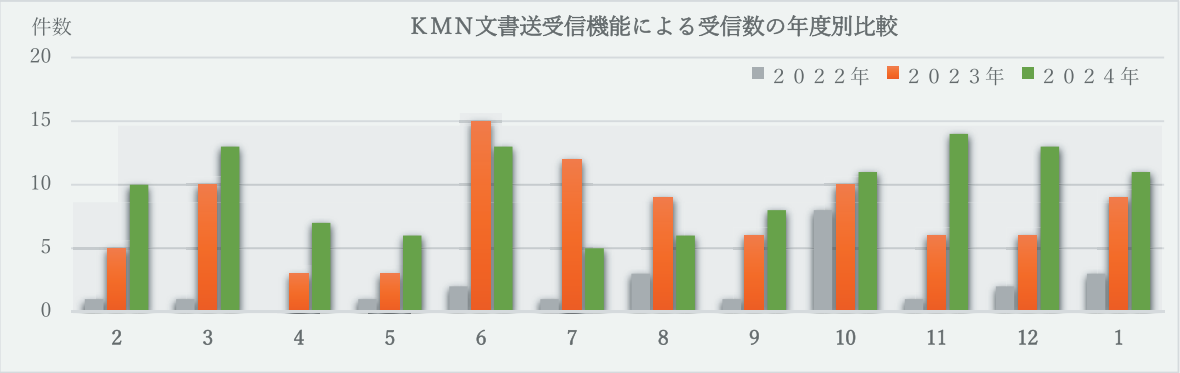
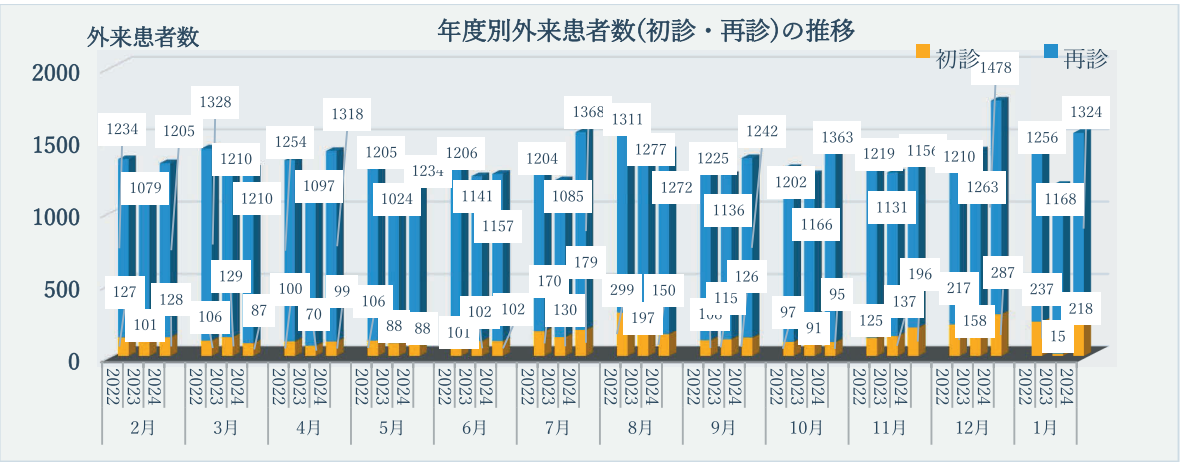
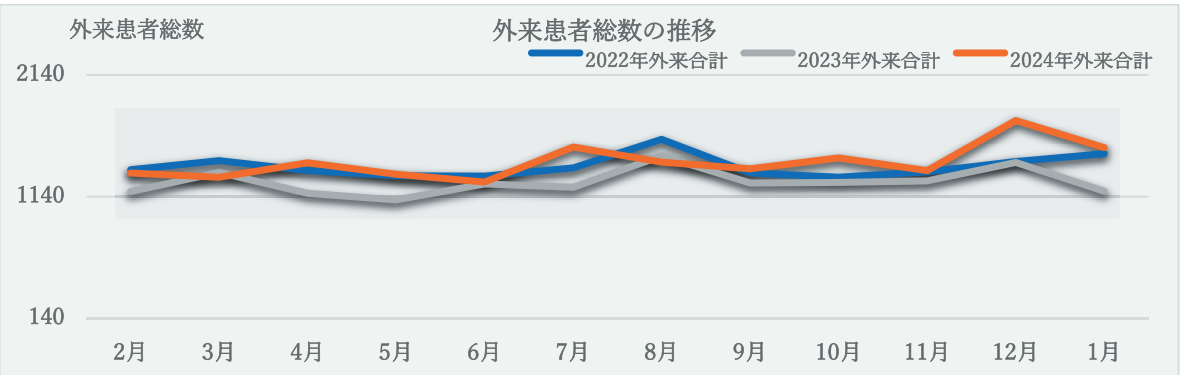
【小国公立病院】

マンパワー不足は否めません。また、次のステップとしては地域住民に対する啓蒙活動が重要と考えています。

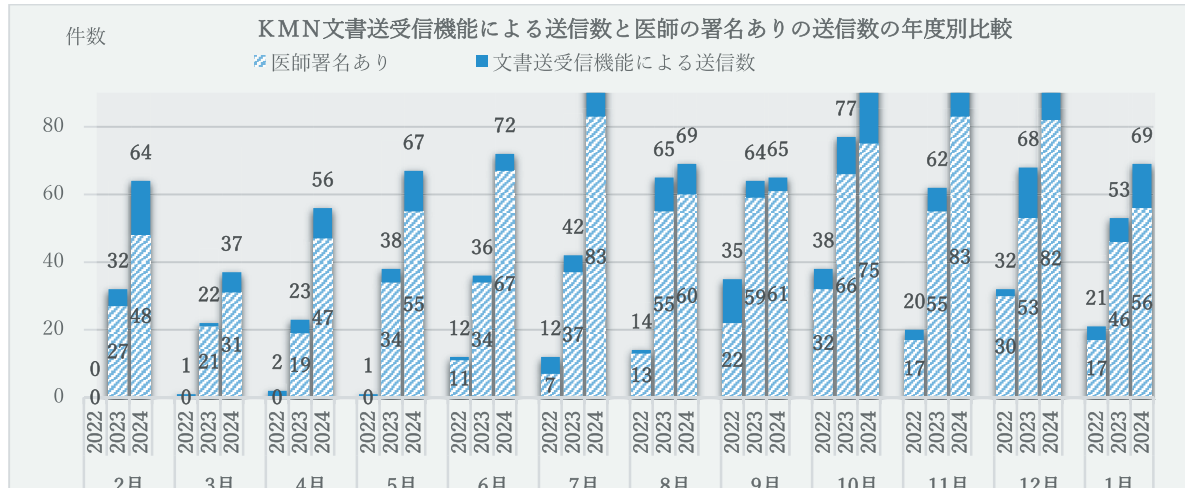
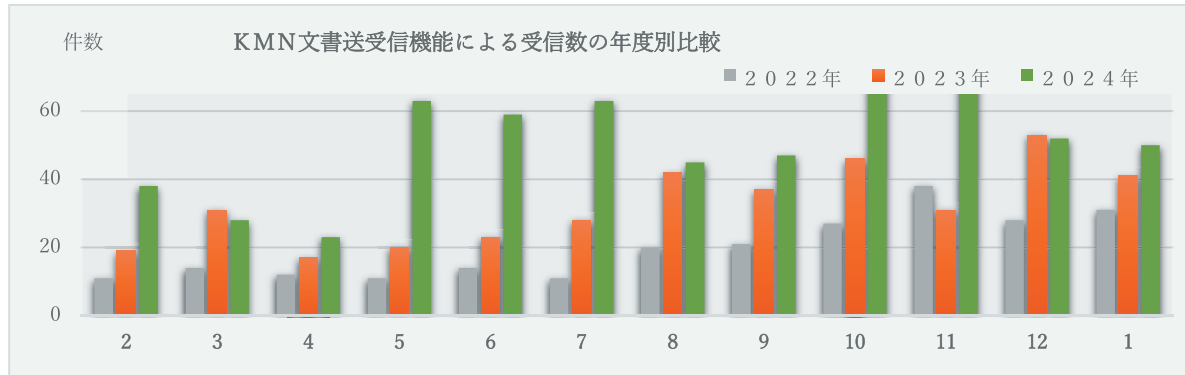
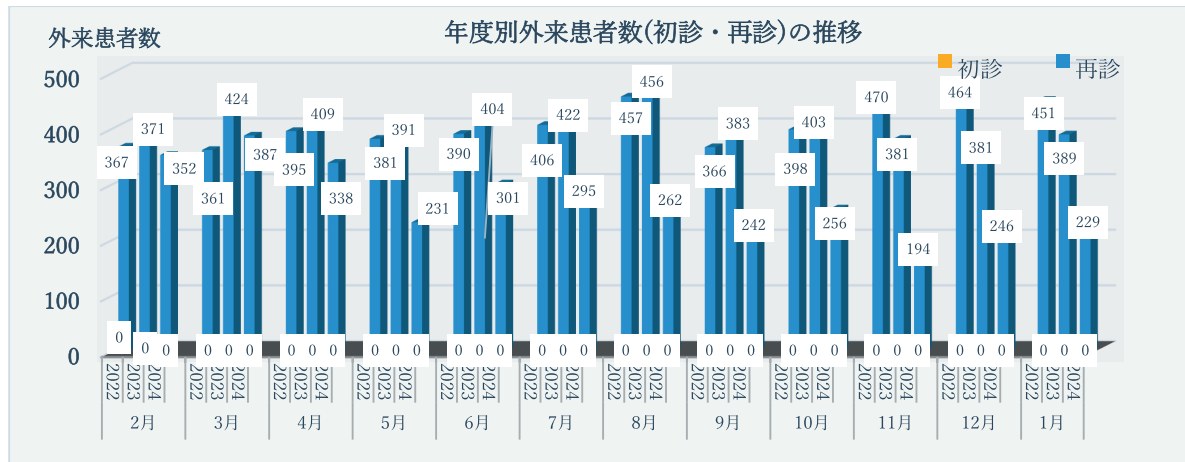
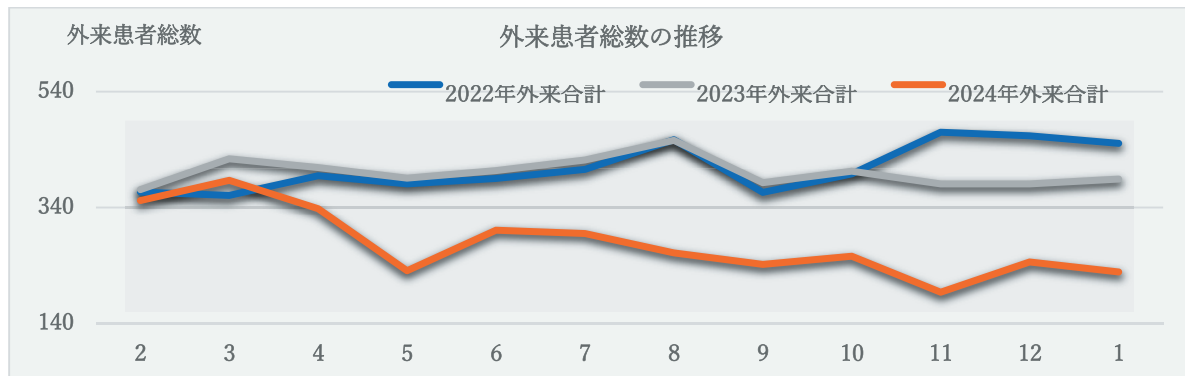
【上天草総合病院】

発症予防も重要な点と考えており、これに関する啓蒙活動はやや不十分と思います。

小国公立病院 糖尿病代謝内分泌内科



上天草総合病院 糖尿病代謝内分泌内科



派遣先地域医療拠点病院	上天草総合病院
氏 名	山本 正啓
診療科名	循環器内科
事業期間	令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

- 午前中の循環器内科外来業務の中で、循環器専門疾患のスクリーニングや専門医療機関への紹介、その後の医療の提供やリハビリテーションの案内を行っている。(拠点病院の医療機能の向上、地域で不足する専門医療の提供。)
*重症下肢虚血の早期発見。心臓アミロイドーシスのタファミジスによる外来治療。高度冠動脈三枝病変の評価や治療。慢性心筋炎・心臓サルコイドーシスのステロイド治療。など重症疾患の診療が増えております。
- 派遣業務中、拠点病院 循環器内科医師が、地域の看護学校の講義を実施いただいている。
(熊本県医師修学資金貸与医師や自治医科大学卒業医師の地域勤務と、新専門医制度を踏まえたキャリア形成の両立に向けた支援。)
- 大学病院や周辺施設との診療情報の共有に際してはくまもとメディカルネットワークを積極的に使用している。
(各拠点病院が取り組んでいる「くまもとメディカルネットワーク」の普及活動の支援。)
*上天草総合病院に関しては、くまもとメディカルネットワークの使用が各部署に浸透しており、医師としては、特に抵抗なく利用が来ております。
- 午後はホルター心電図読影や、冠動脈造影 CT 検査、心臓カテーテル検査、心臓カテーテル治療を行い、専門医療の提供を行っている。(拠点病院の医療機能の向上、地域で不足する専門医療の提供。)
*令和 6 年度の取り組みとして、重症心不全に対し、専門医複数名を要するカテーテル治療を実施し、成功しております。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

心臓カテーテル検査に同席していただき、指導を行っている。この活動に関しては、山本を派遣いただいていることにより、同院にその時間帯だけではあるが、循環器専門医が複数名在住することになる。そのために実施できていると考える。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

午前中 外来 平均 40 名/月程度、ホルター心電図 読影件数 平均 25 件/月程度

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

上天草総合病院に関しては、くまもとメディカルネットワークの使用が各部署に浸透しており、医師としては、特に抵抗なく利用が来ております。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

各業務を通して、地域医療拠点病院としての役割の一部を担っております。

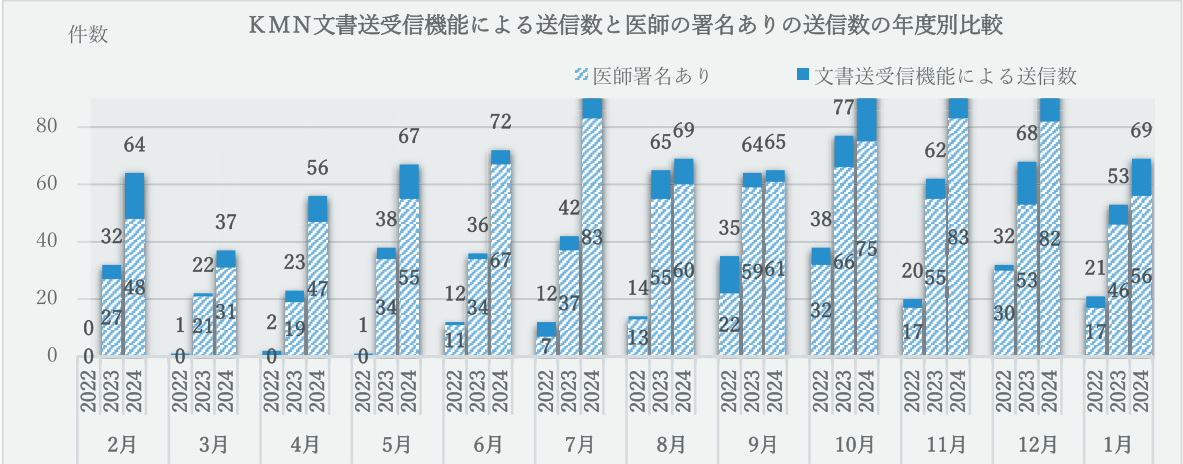
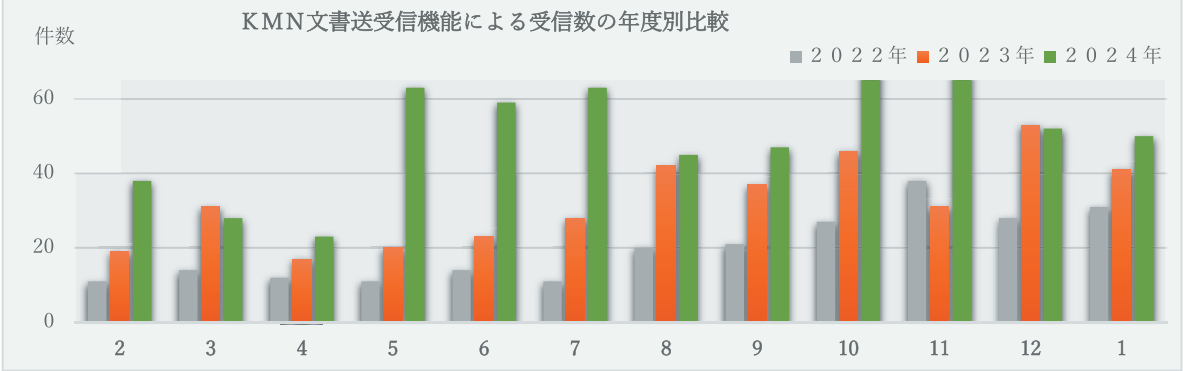
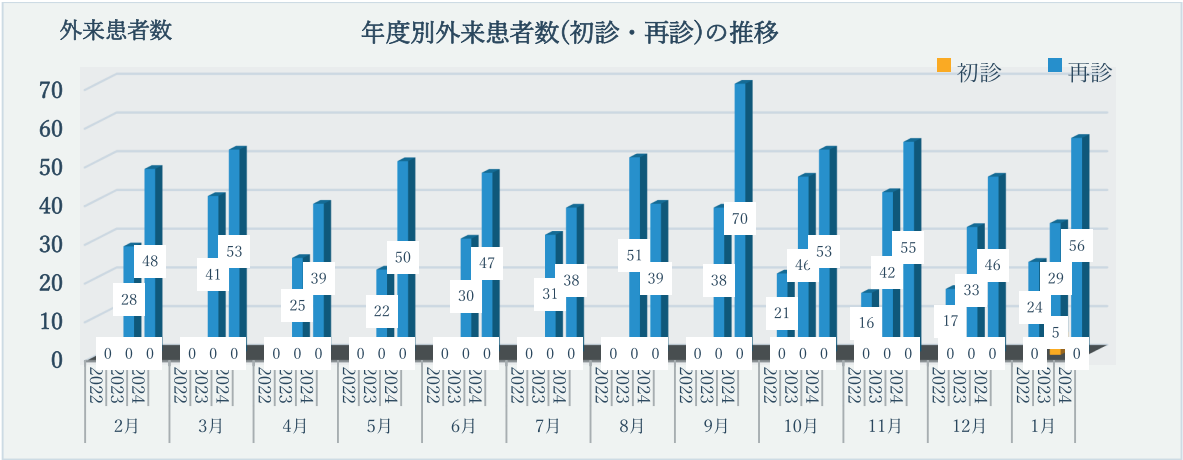
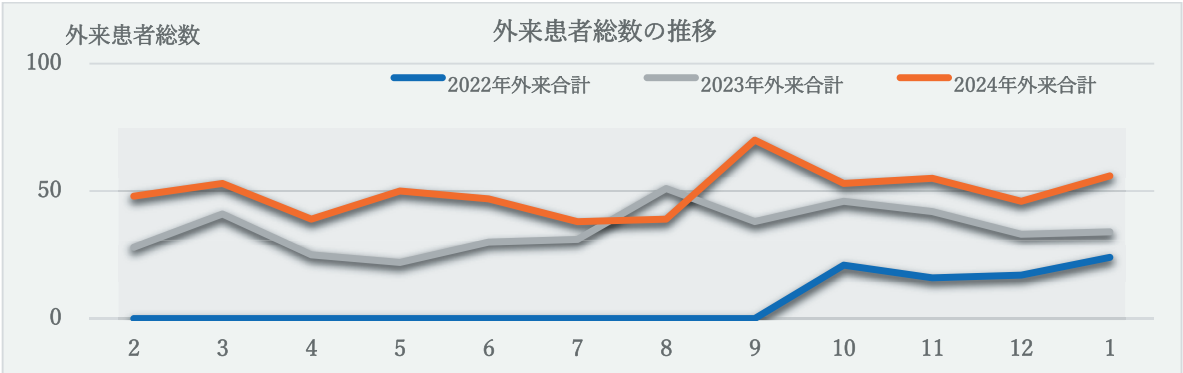
上天草総合病院の地域医療拠点病院の役割は多岐にわたります。同病院は上天草の南部にあり、天草本渡と熊本市内との交通網からは少し異なる地域に位置しております。そのため、同地域の急性期疾患への早期治療や早期対応を多く担っております。

また、周囲には離島である御所浦があり、同離島の県民の医療を担っております。さらに、上天草総合病院は健康管理センターをはじめ、介護老人保健施設、上天草訪問看護ステーション在宅看護支援センター、居宅介護支援センター、看護学校などを併設しており、同地域の健康や保健、看護、介護、リハビリテーション、そして教育に強く貢献している状況であります。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

令和 5 年度の事業報告書に記載させていただきました内容と重複いたしますが、教育という面では、上天草総合病院で勤務いただいている、『県の修学資金貸与医師等若手医師』の情報を事前に頂戴できると大変ありがたいと考えます。

上天草総合病院 循環器内科



派遣先地域医療拠点病院	山都町包括医療センターそよう病院
氏 名	白濱 裕一郎
診療科名	循環器内科
事業期間	令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

そよう病院で循環器内科医として週に 1 回の外来診療、月に 2 回の当直業務にあたっている。外来診療においては 1 日あたり 15 ～ 20 人程度の定期外来、さらに新患・コンサルト対応、また同院にはエコー技師がいないため、心エコーなどの業務にあたっている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師が当科外来で直接的に関わることは少なく、コンサルトや相談にたいしての対応を行なっている。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

患者診察数は以下の通り。前年度と比較し +270 人程度と受診人数は増加している。周辺病院からの紹介患者数は 24 人となっており、地域の拠点病院として専門医療の維持が行えていると考えられる。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMN 新規参加数はいなかったが、KMN を利用した紹介状のやり取り（特に受信数）は増加している。外来業務中に KMN を通じて送信を試みてはいるものの、KMN で送信できる PC が限定してされていたり、業務中の煩雑さからは難しい状況である。

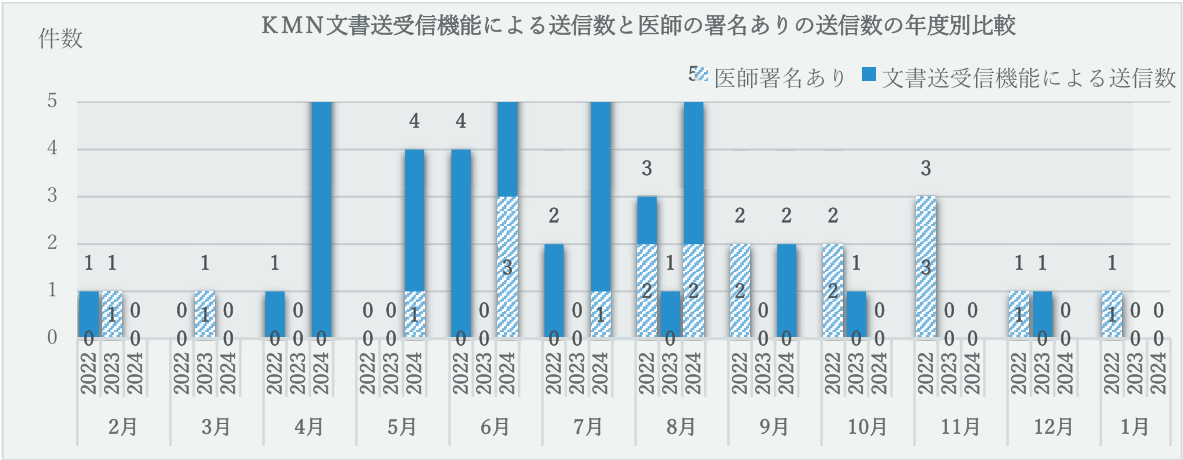
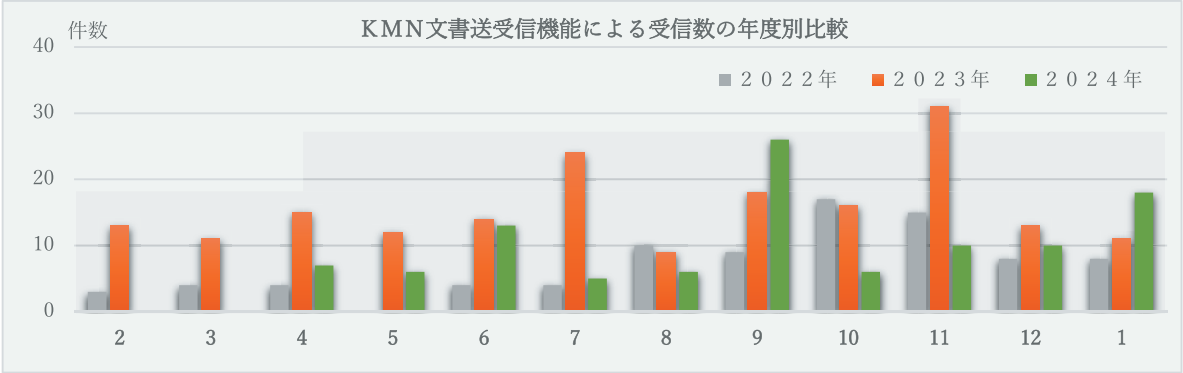
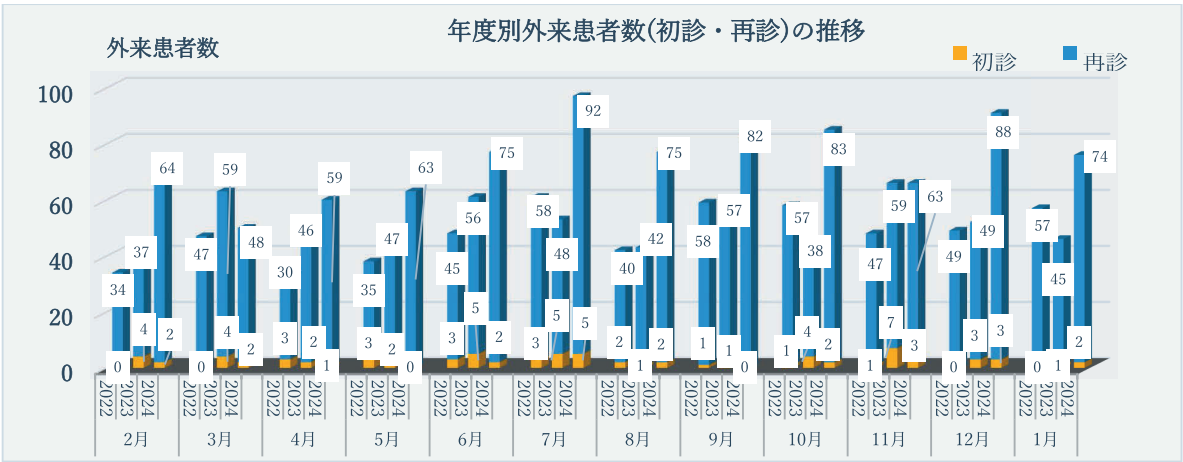
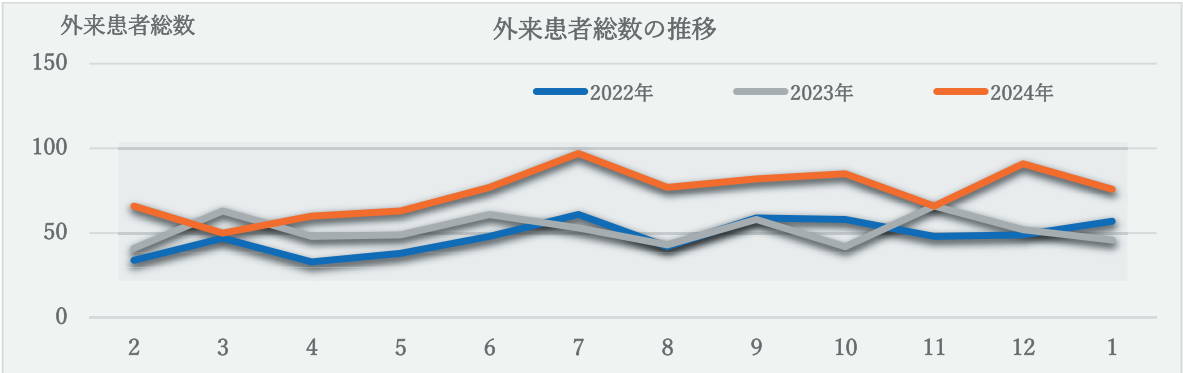
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域の拠点病院において、循環器の専門診療の維持が行えている。また、受診患者に対する KMN の情報発信を行い参加者が増加傾向となった。夜間においても、救急患者を積極的に受け入れることにより、重症患者においての三次救急拠点病院への搬送をより安全に施行することが可能であり、また軽症～中症患者においても地域完結型の医療の提供が可能となっている。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

KMN 参加数は経年的には増加傾向にはあるものの、文書送信総数の増加には至っていない。そよう病院においては文書送信を一括して行う部署がなく、多忙な外来診療中に送受信の手続きまで個々の Dr で行うのは限界があり、他職種へのタスクシフトが必要であると考えている。

山都町包括医療センターそよう病院 循環器内科



派遣先地域医療拠点病院	国保水俣市立総合医療センター
氏 名	北野 雄希
診療科名	消化器外科
事業期間	令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

週 1 回の手術応援、症例相談を行っている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師への手術指導やキャリア支援を行っている。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

手術件数の大きな変化はないが、手術に関しては難易度の高い症例を行えている。また症例に関する相談は頻繁に行っており、診療支援における成果は挙げられている。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KNM の送受信件数は、症例相談や紹介、経過フォローの際に頻繁に使用しており、年々増加傾向にある。

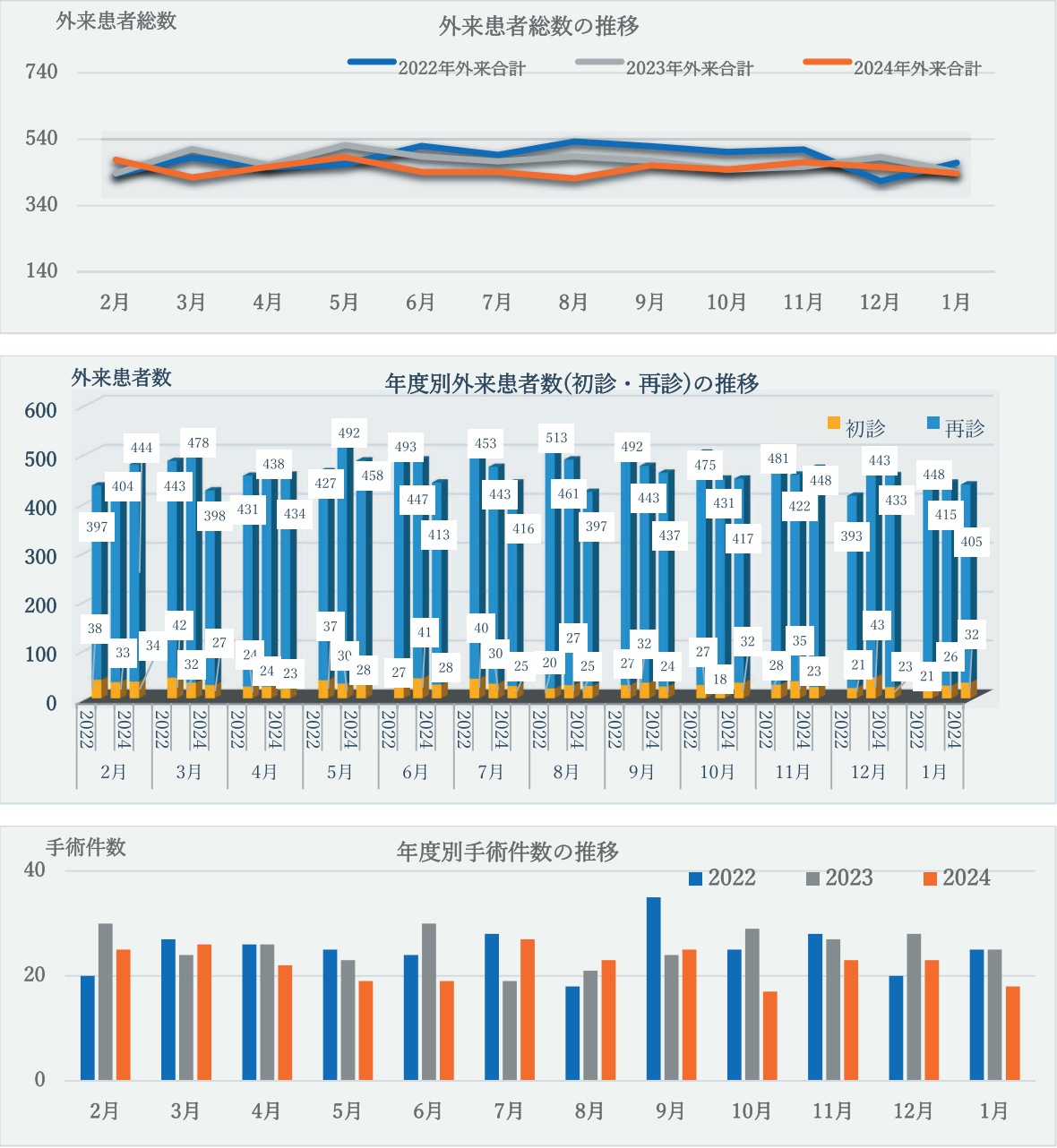
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

外科に関しては地域で行える治療は地域で行い、難しい症例は大学病院で治療を行えており、地域医療拠点病院としての役割は十分果たせていると考える。

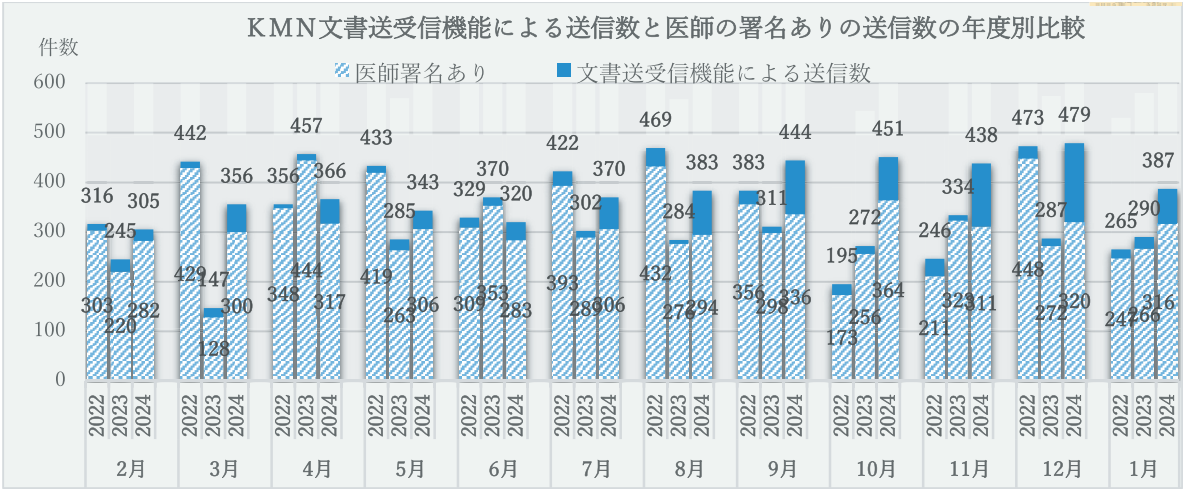
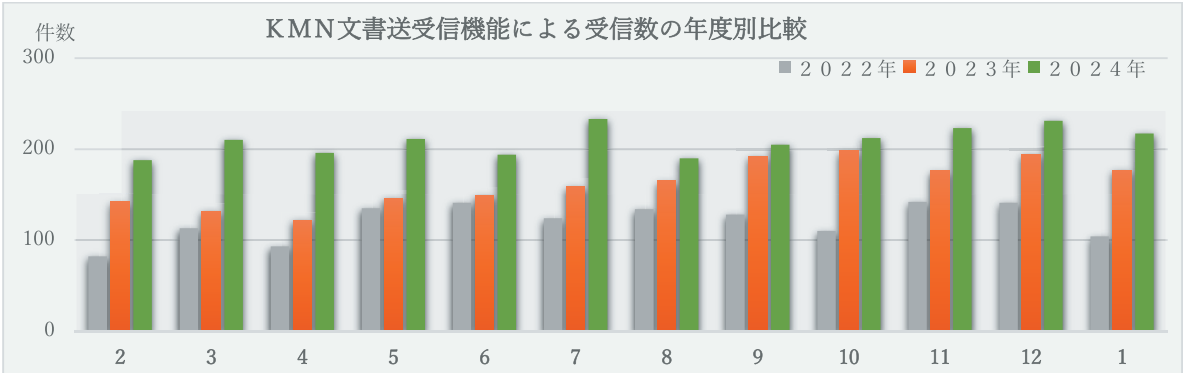
6. 地域医療における今後の課題・解決策等

水俣医療センターは十分質の高い地域医療を提供できていると考えます。

国保水俣市立総合医療センター 消化器外科



国保水俣市立総合医療センター 消化器外科



派遣先地域医療拠点病院	国保水俣市立総合医療センター
氏 名	原田 和人
診療科名	消化器外科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

週1回の手術応援、症例相談を行っている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師への手術指導やキャリア支援を行っている。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

手術件数の大きな変化はないが、手術に関しては難易度の高い症例を行えている。また症例に関する相談は頻繁に行っており、診療支援における成果は挙げられている。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KNM の送受信件数は、症例相談や紹介、経過フォローの際に頻繁に使用しており、年々増加傾向にある。

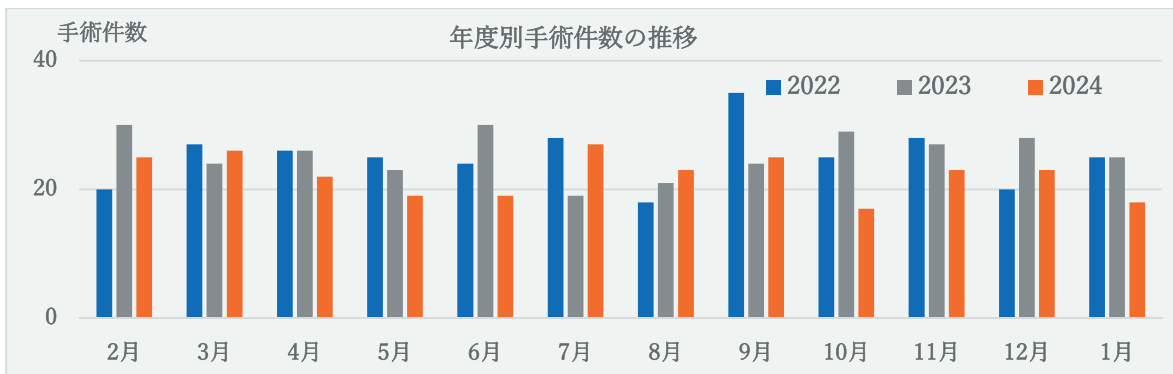
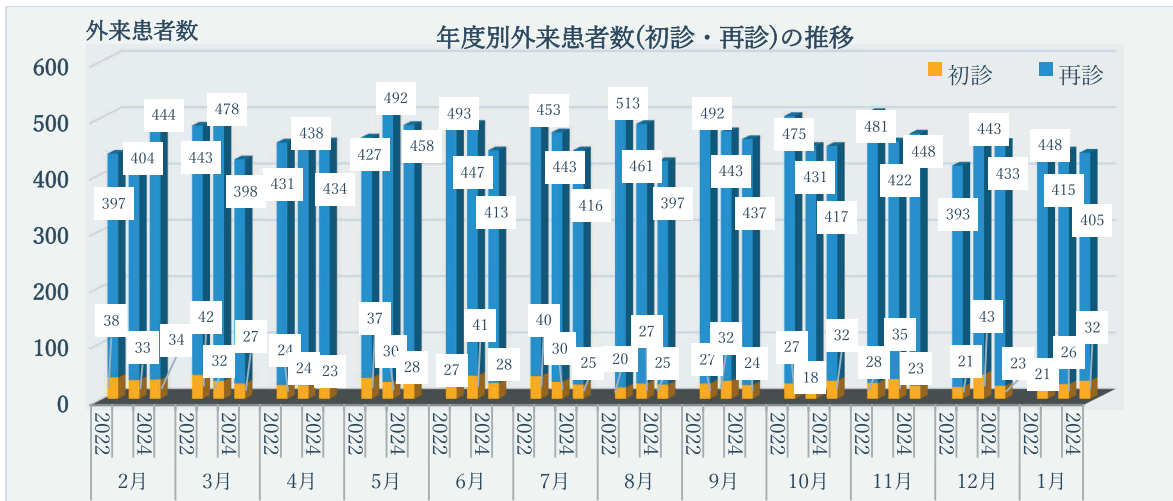
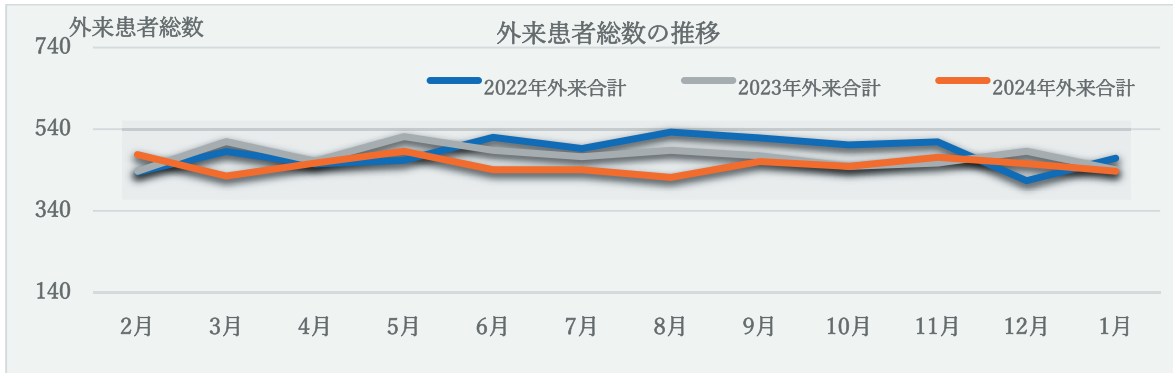
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

外科に関しては地域で行える治療は地域で行い、難しい症例は大学病院で治療を行えており、地域医療拠点病院としての役割は十分果たせていると考える。

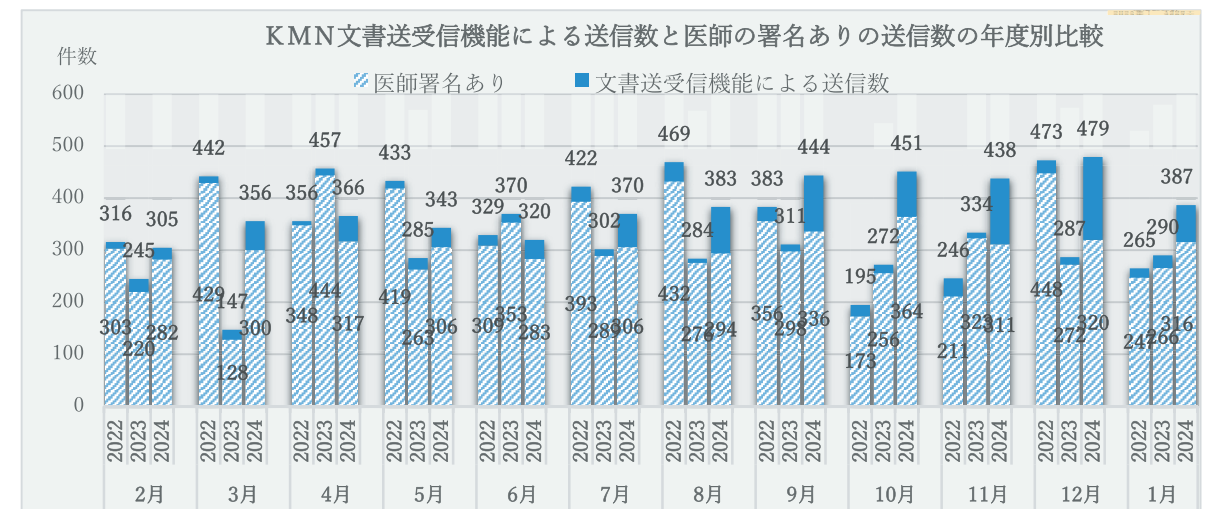
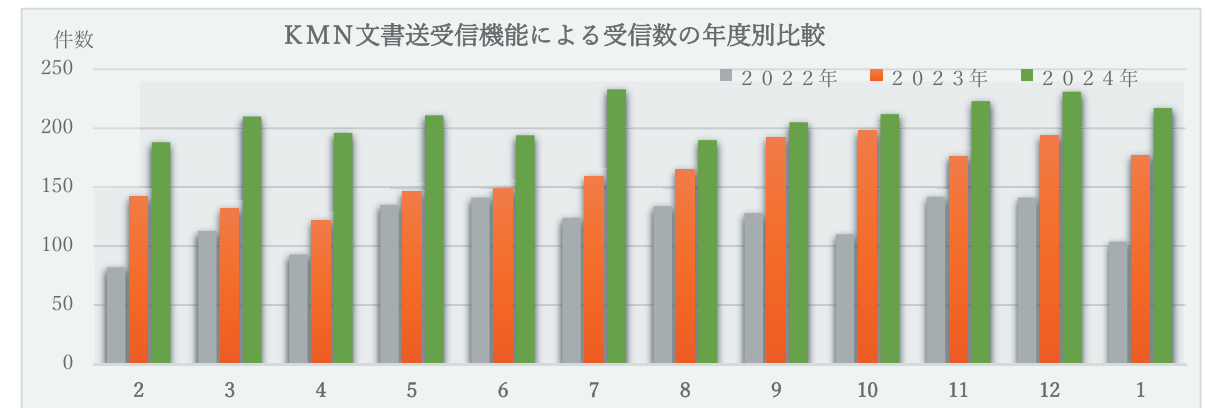
6. 地域医療における今後の課題・解決策等

水俣医療センターは十分質の高い地域医療を提供できていると考えます。

国保水俣市立総合医療センター 消化器外科



国保水俣市立総合医療センター 消化器外科



派遣先地域医療拠点病院	くまもと県北病院
氏 名	後藤 理沙
診療科名	乳腺・内分泌外科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

外来業務を主に担当しており、週に1回、画像診断(マンモグラフィ、乳腺超音波検査、MRI、CT等)や生検による病理学的診断、薬物療法(内分泌療法、化学療法、分子標的治療薬)を行っています。手術や遺伝カウンセリング、治験を含む特殊性が高い薬物療法等の、専門的な対応が必要な症例については、熊本大学病院と連携して対応を行っています。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師が長時間当科の外来につくことはあまりありませんが、指導が必要となったケースにおいてはガイドラインに基づき一般的な検査や治療方針に関する指導を行い、それぞれの症例をしっかりと吟味して検討し、今後のキャリア支援になるようにサポートを行っています。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

外来患者数の推移は次頁の通りです。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMNの利用状況は下記の通りです。熊本大学病院側からの送信が主体となっています。

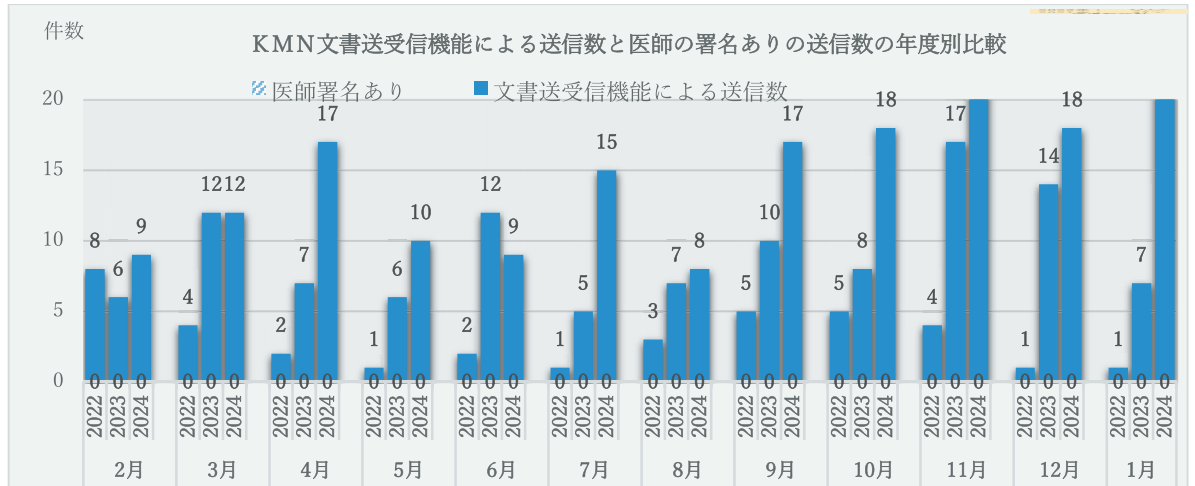
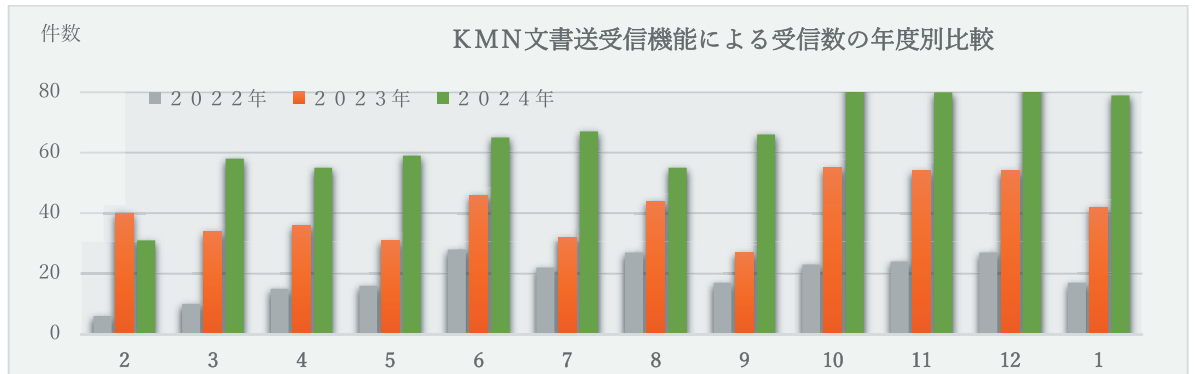
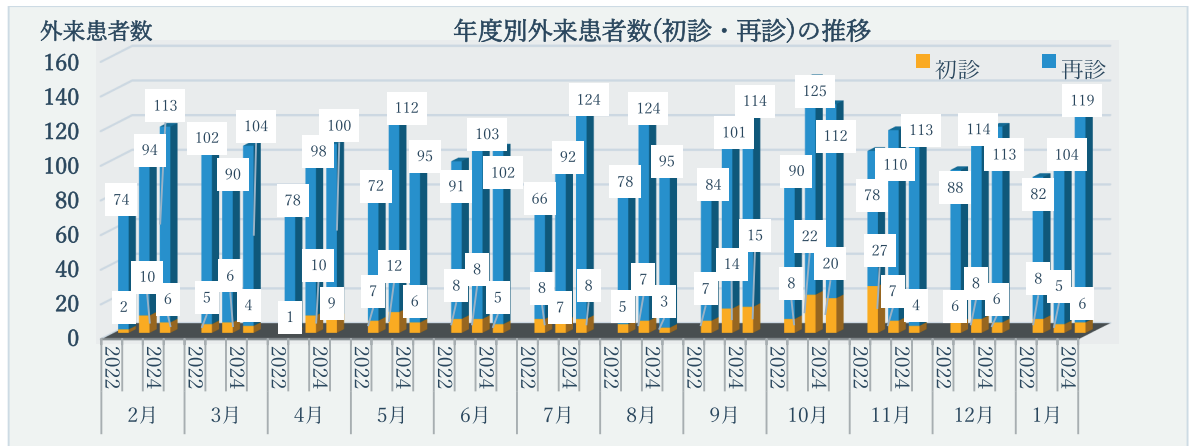
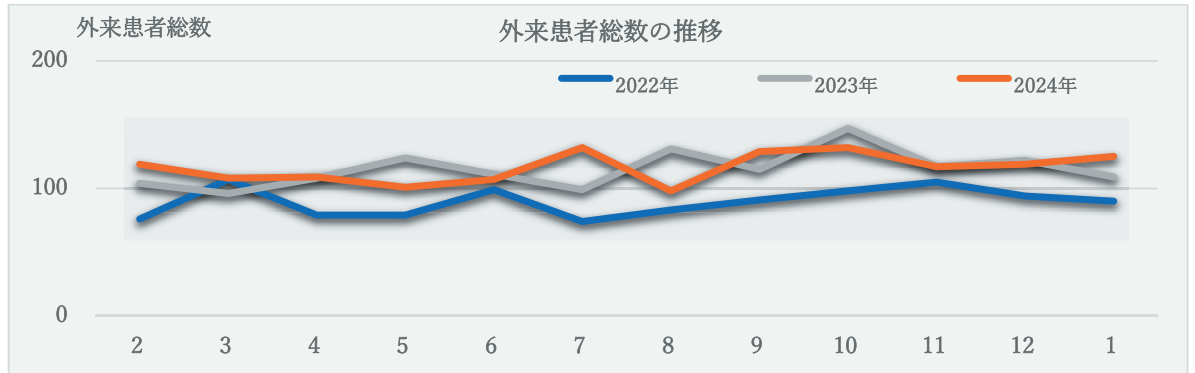
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

熊本大学病院とくまもと県北病院の連携については、これまで同様 KMN を活用したスムーズな連携が可能となっています。また、くまもと県北病院と周辺のクリニックとの連携についても密に行っており、診断からターミナル期まで患者の希望に合わせた対応を行うようにしています。一部の周辺診療所では KMN も導入していただいており、非常に利便性も高いと感じています。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

乳癌診療においては分子標的治療薬などの特殊性の高い治療が一般化してきており、熊本大学病院のみで対応していくことはかなり困難になってきています。すべての患者が自宅の近くの病院で通院の苦痛を少なく、最善の治療を受けられるようにするためには、それぞれの治療の有害事象や必要な対応について、看護師や他科の医師、近辺の薬局に勤務する薬剤師に教育・周知を行ったり、情報共有が簡便になるような工夫をすすめていく必要があると感じています。

くまもと県北病院 乳腺・内分泌外科



派遣先地域医療拠点病院	人吉医療センター
氏 名	穴見 俊樹
診療科名	乳腺・内分泌外科
事業期間	令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

本事業により、人吉地域の医療連携体制は大学病院との綿密な連携が可能となっていることで、高度な医療を要する患者を迅速かつ適切に紹介できる仕組みが整備されている。これにより、地域全体の医療水準が維持・向上されるだけでなく、患者さんが安心して治療を受けられる環境が整っていると思われる。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

外来診療の合間の限られた時間ではあるが、後輩医師からの治療方針に関する相談に応じたり、尿管ステント留置をはじめとする処置の具体的な指導を継続的に行っている。これらの取り組みを通じて、後輩医師の臨床スキル向上を支援している。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

- 人吉地域では、ロボット支援手術や難易度の高い手術、稀少癌に対する化学療法など、地域で対応が難しい症例を大学病院へ迅速に紹介できる仕組みが整備されており、医療連携体制が維持・強化されている。
- 外来診療の支援を継続することで新患の受け入れ体制が整い、外来患者数は着実に増加傾向である。また、外来患者数の増加に伴い、入院患者数および手術件数も増加するという好循環につながっていると考えられる。外来を支援することで、手術に常勤医師全員参加可能となり、全身麻酔を要するような比較的大きな手術も可能となっている。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

- 人吉地域で対応が難しい症例については、KMN を通じて熊本大学病院との相談や合同カンファレンスを継続的に実施しており、迅速で適切な治療が提供できている。また、大学病院から人吉地域への逆紹介の際にも KMN を活用することで円滑な転医が実現されている。
- 大学病院への紹介時に追加の画像検査が必要となった場合も、人吉医療センターで検査を実施し、その結果を KMN 経由で大学病院へ提供することで、患者さんの通院負担軽減に貢献している。
- メディカルネットワークの積極的な活用を継続した結果、新規参加患者数および情報の送受信数は着実に増加傾向を示しており、地域医療連携の強化と患者さんの利便性向上に大きく貢献している。

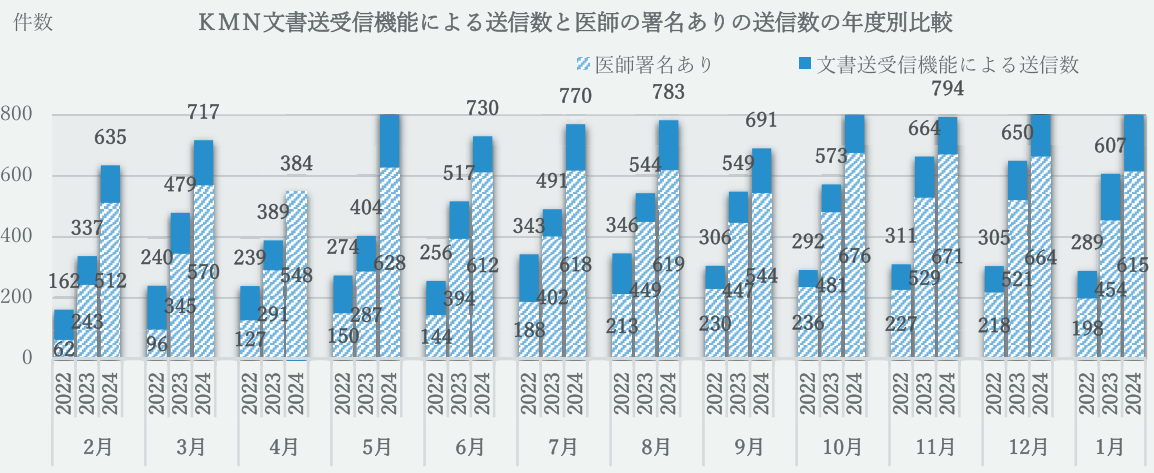
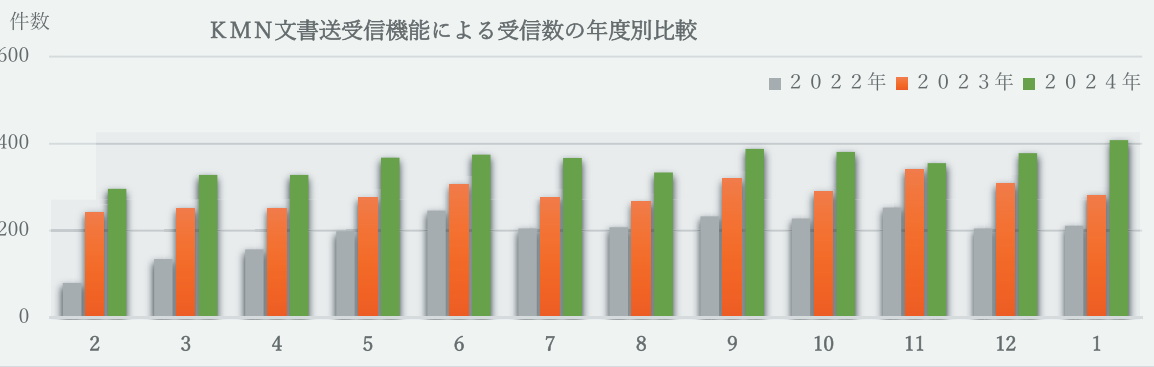
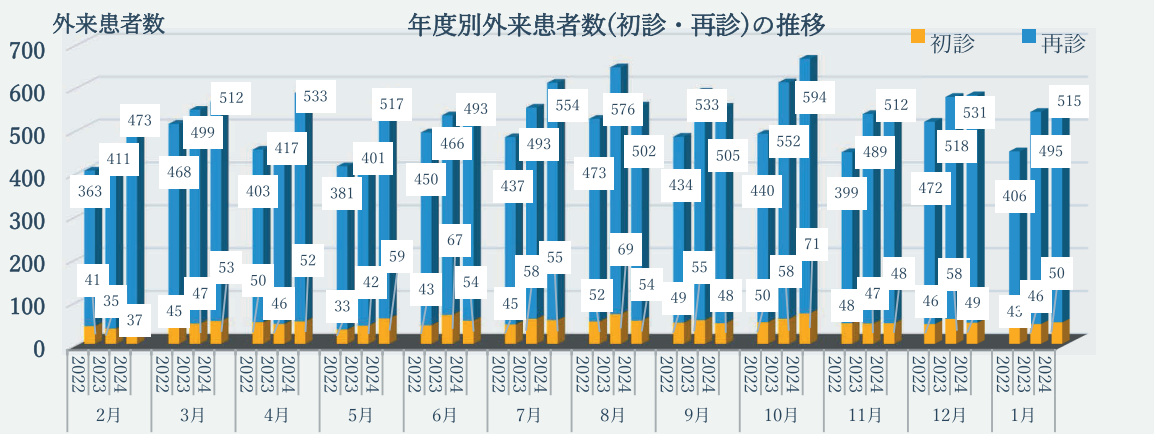
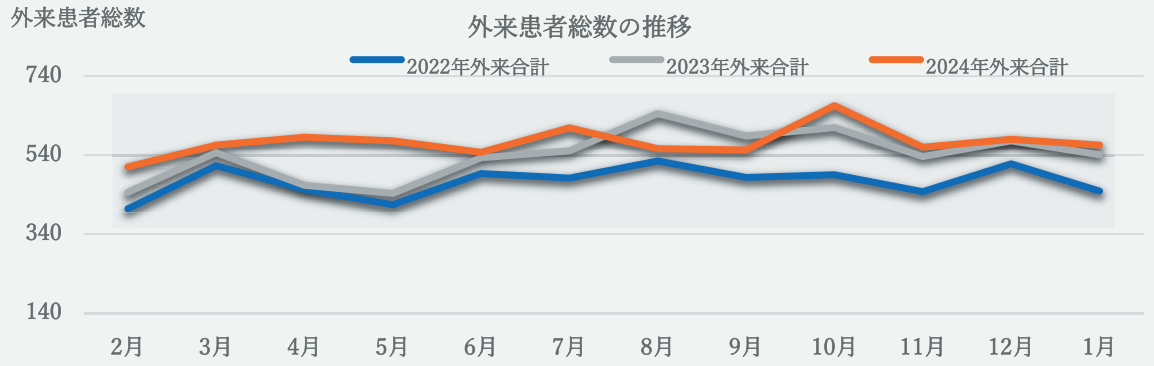
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域医療では依然として診療科の偏在や常勤医師数の不足などが課題となっており、高度医療の提供が困難な状況が続いている。しかし、本講座による地域医療拠点病院と県拠点病院間の連携強化を継続することで、人吉地域での診療が困難な疾患症例に対しても適切な治療が可能となっており、地域全体の医療サービス向上に寄与している。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

本講座を通じて地域医療拠点病院への医師派遣を継続的かつ適切に実施することで、大学病院をはじめとした県内拠点病院との連携がより密接となり、地域の医療機能の維持・強化に繋がっている。また、医師不足による地域医療現場での負担軽減にも寄与している。
今後さらに、熊本市内の拠点病院への医師派遣体制も整えば、各病院の特色を活かした役割分担により、地域間の医療格差のさらなる是正が期待できると考える。

人吉医療センター 泌尿器科



派遣先地域医療拠点病院	山鹿市民医療センター
氏 名	原田 成美（特任教員 西澤秀和）
診療科名	泌尿器科
事業期間	令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

山鹿市民医療センター近隣の病院から紹介のあった患者を診療し、状況によっては再紹介をするなど、山鹿地域の医療連携を推進した。

また、若手医師の相談・アドバイスや診療支援などを行うとともに、院内のセミナーやカンファレンスなどで、山鹿市民医療センターの教育面の支援も行っている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師へ診断治療のアドバイスをを行い、泌尿器科診療の重要性の普及をおこなった。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

泌尿器科では、排尿障害や悪性腫瘍のフォローアップの患者が多い傾向であり、初診、再診の患者はトータル毎月初診が 2-3 名、再診が 50 名程度ある。このように一定の患者数があり、泌尿器科の診療ニーズは高く、地域医療に貢献している。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

メディカルネットワークの送受信数は今年度受信数が 486 件、送信数が 135 件あり、年々件数は伸びている。また、今年度の KMN への新規参加者数は 450 件であった。今後も継続して普及を推進していく。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

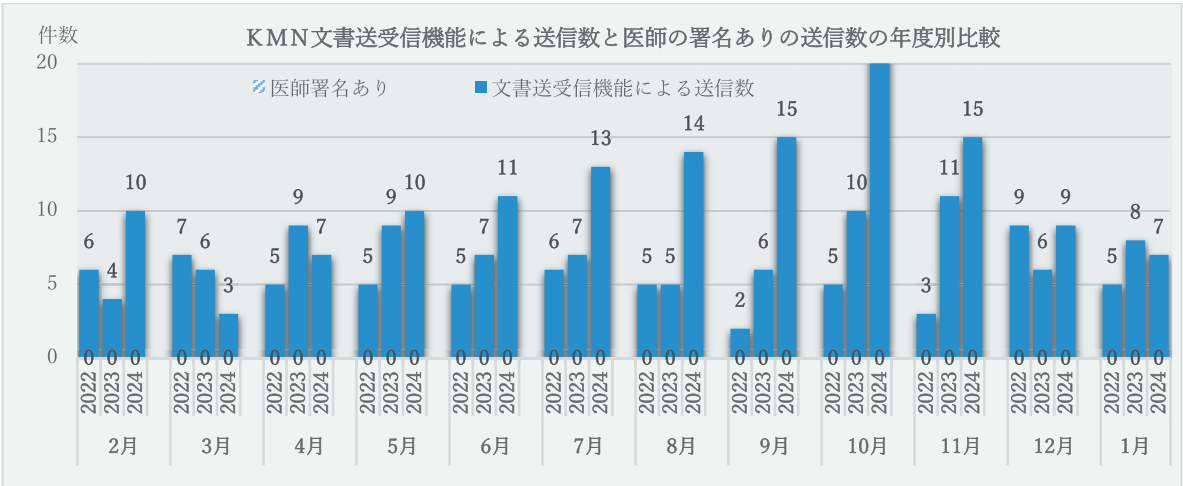
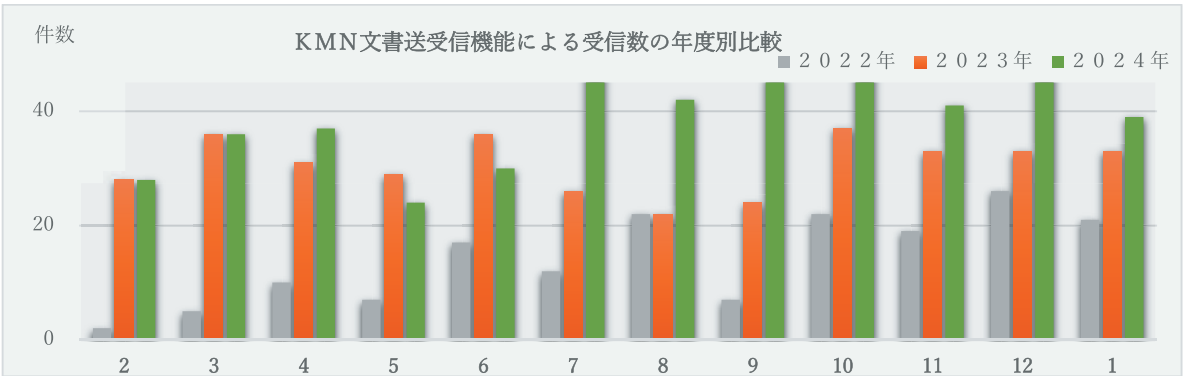
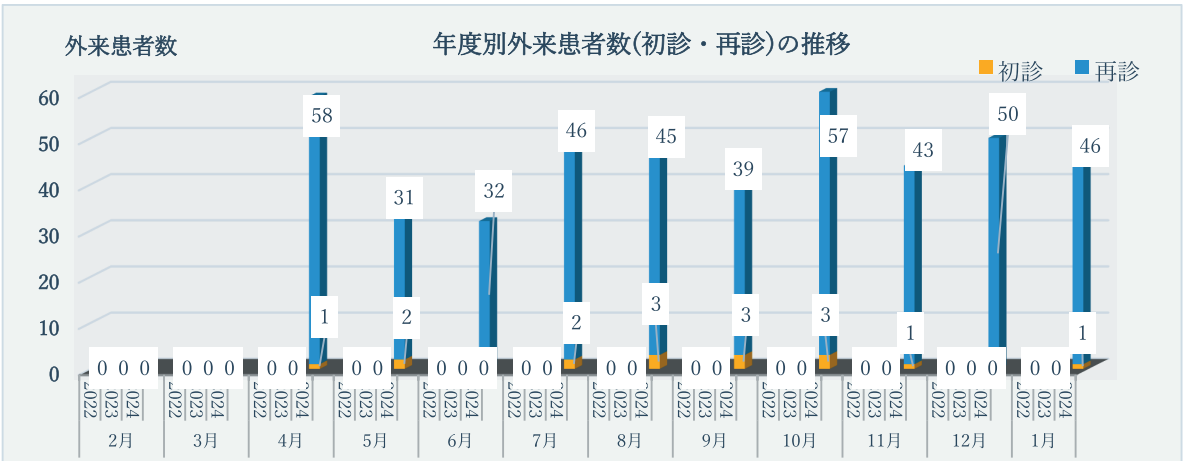
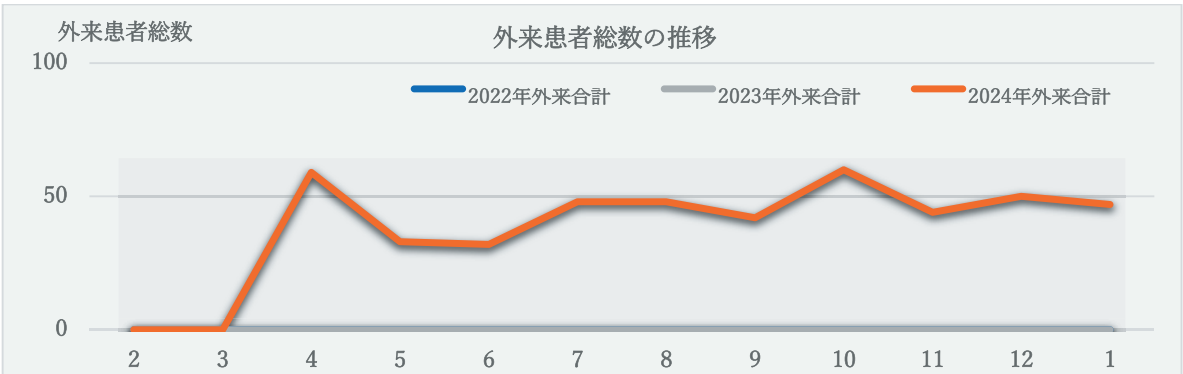
山鹿市民医療センターには、泌尿器科常勤医師がいないため、ネットワーク寄附講座による診療支援により、地域医療拠点病院としての役割を果たすことが不可欠である。

そのような中、地域医療拠点病院として、泌尿器科の専門医療を実践しながら、若手医師への教育やメディカルネットワークの普及を図り、より専門性の高い医療の提供を推進しているところである。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

地域のニーズに沿った医療を展開するためには、ハード面の整備はもとより、医師の働き方改革にも配慮した診療体制の構築が課題と考える。

山鹿市民医療センター 泌尿器科



派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院、国保水俣市立総合医療センター
氏 名	永田 裕子
診療科名	小児科
事業期間	令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

診療の主な内容は予防接種と一般小児科診療である。これらに加えて自分のサブスペシャリティを活かし、入園時検尿や学校検尿の陽性の児の対応もしくは、腎臓疾患を持つ児のフォローアップ、また昨年度から流行している溶連菌感染後の急性糸球体腎炎のフォローを行っている。そのため、小児腎臓専門医のいる熊本市内の病院を受診することなく、小国や水俣において腎臓疾患のある児(軽症例)は診療・治療をその医療圏で完結することができることが本寄附講座事業における成果の一つであると考えている。

また、寄附講座特任教員として小国公立病院で診療する日には、常勤医であられる小児科の大崎先生は地域の健診に行かれており、私が寄附講座特任教員として小国公立病院に行くことにより地域の小児の健康保持及び増進を図ることにつながっていると考えている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

現時点では、小国公立病院、水俣総合医療センターに熊本県の修学資金貸与医師等若手医師が不在である。ただし、水俣医療センターで働かれている小児科専攻医に対しては症例のフィードバックを行い支援している。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

患者数は次頁のとおりである。小児のウィルスもしくは細菌感染症がここ 2～3 年増加しており、少子化が進行しているが、患者数は減少していない。本事業により小児科の常勤医師先生方のご負担を少しでも減らせることができたと考えている。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

メディカルネットワークは少しずつ普及している。今後も普及を進めていきたい。

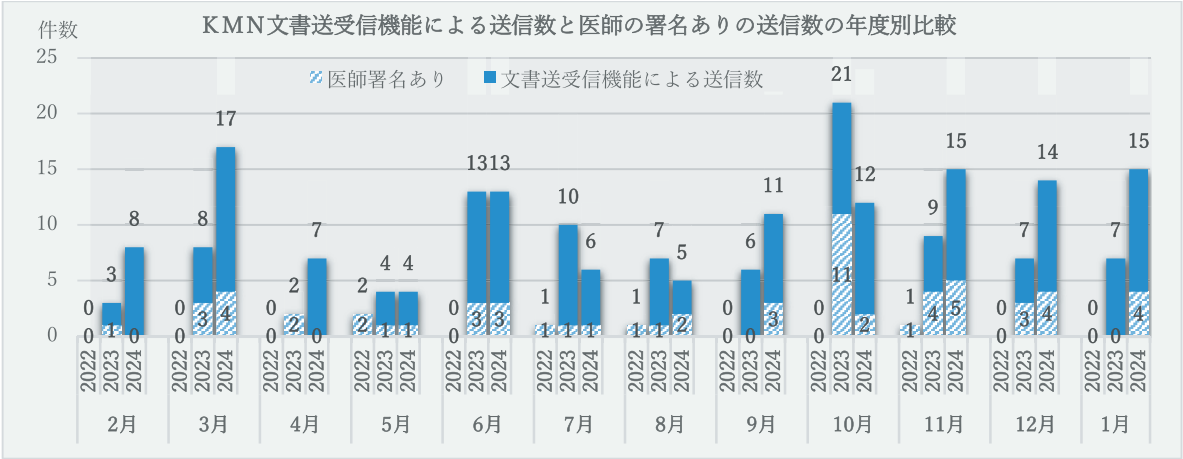
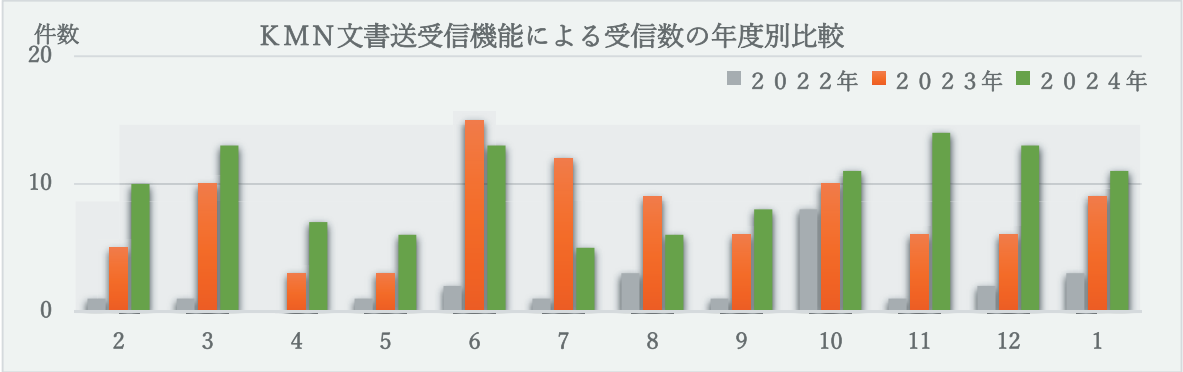
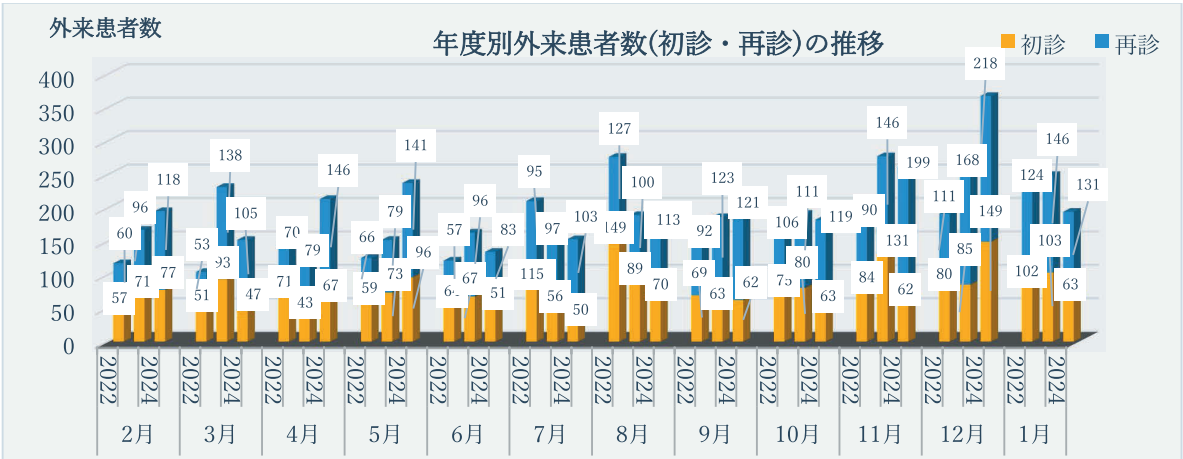
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

予防接種を推進することや日中受診された際に夜間緊急受診する必要がある目安をしっかりと説明するようにしており(日中の受診で良い旨)、少しでも地域医療拠点病院ご勤務の先生の負担を減らし、地域医療拠点病院としての継続した役割を推進できるように努めている。

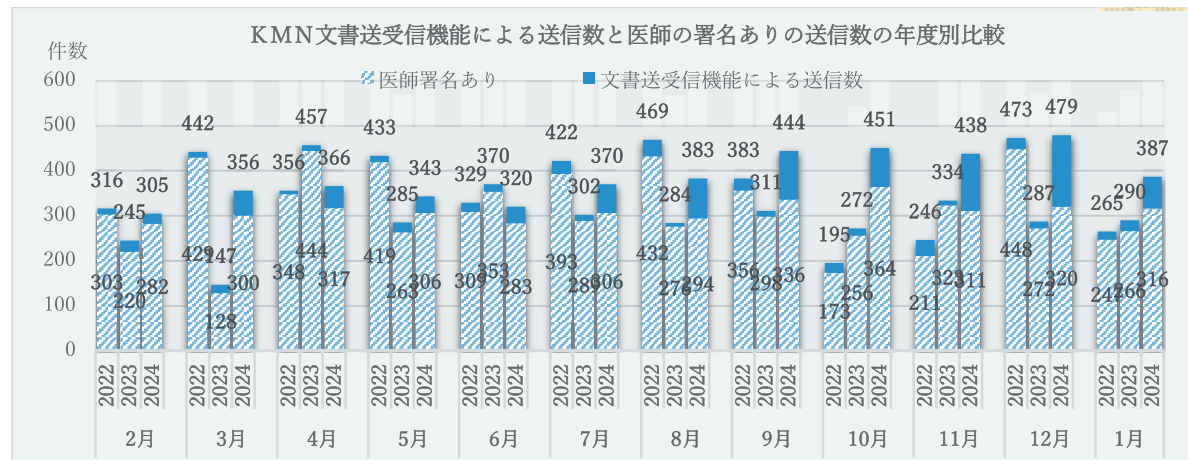
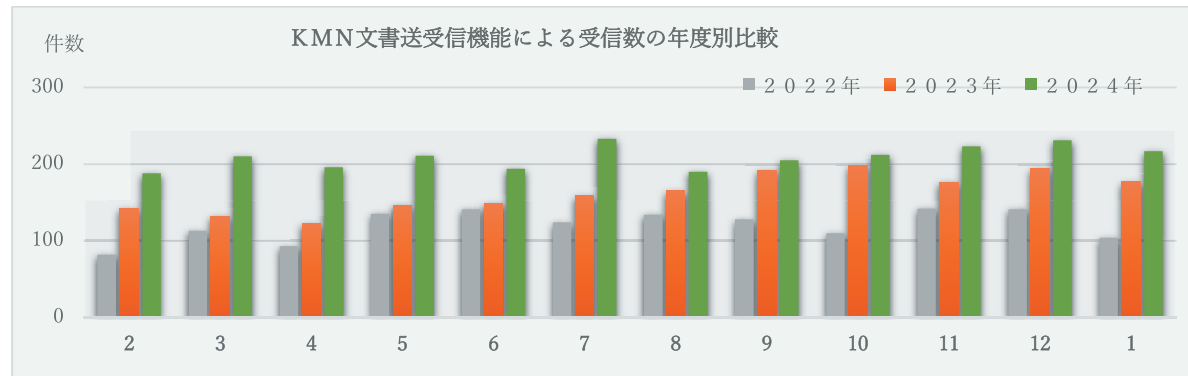
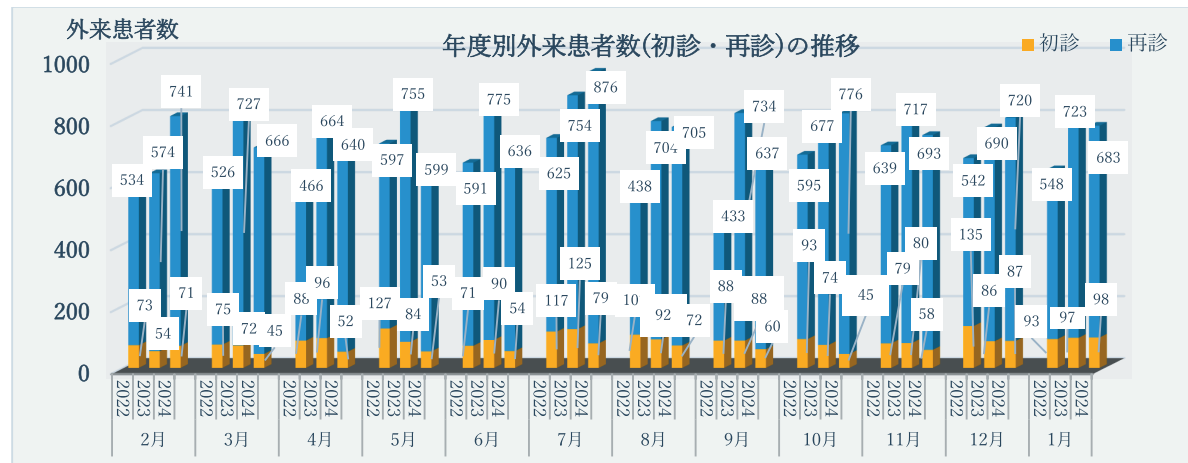
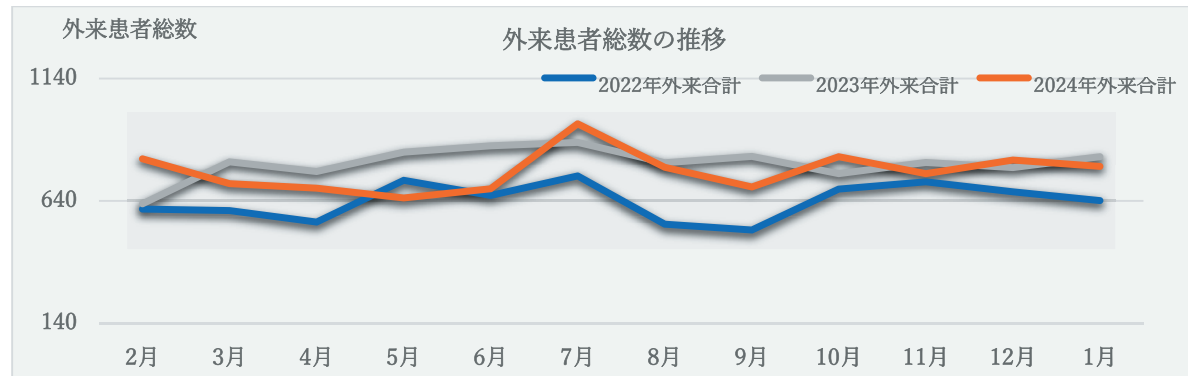
6. 地域医療における今後の課題・解決策等

地域医療の課題としては、今後も医師不足は続き深刻さは増すと思われる。解決策としては今後も、継続して診療支援を行うことである。

小国公立病院 小児科



国保水俣市立総合医療センター 小児科



派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院、国保水俣市立総合医療センター
氏 名	宮村 文弥
診療科名	小児科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

小国公立病院：一般診療、心臓検診、予防注射
水俣市立総合医療センター：一般診療

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

小児科内に該当する医師がいない

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

【小国公立病院】

各月平均 40～70 名程度の初診、100～140 名程度の再診

【水俣市立総合医療センター】

各月平均 70～130 名程度の初診、500～600 名程度の再診

※水俣に関しては、近隣小児科廃業の為、市内唯一の小児科診療拠点となり、患者数はかなり増加傾向である

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMNについては、各病院とも各月 5～30 名程度の利用

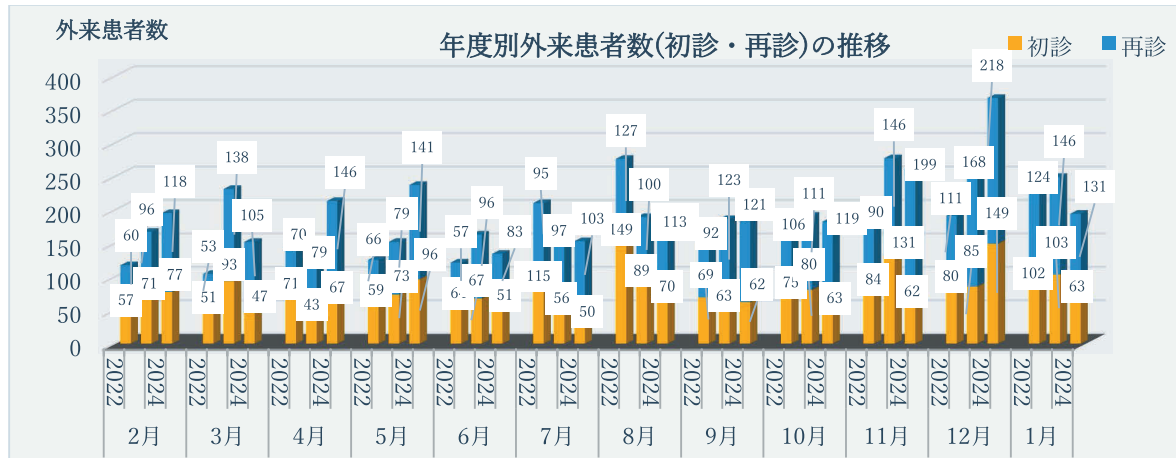
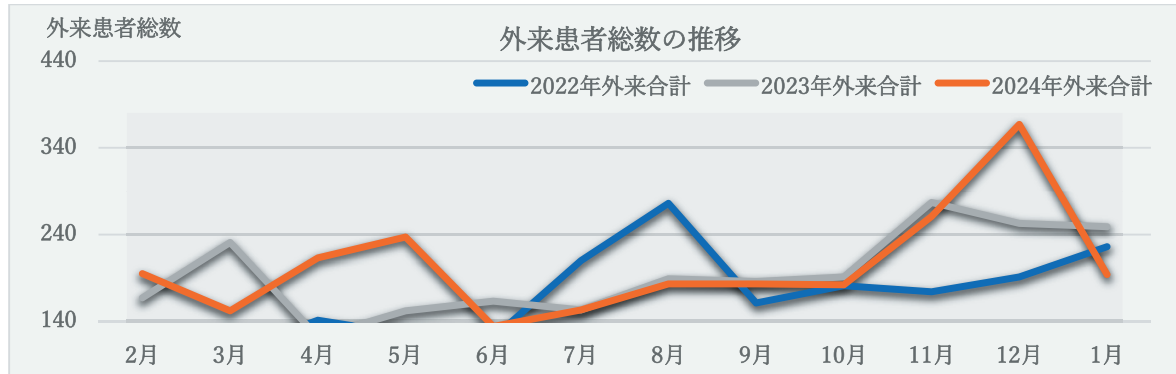
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

小国、水俣ともに地域唯一の小児科診療拠点となり、その重要性、ニーズは非常に高い。特に大学病院から派遣される医師は、サブスペシャリティーを持っており（各々、循環器、腎、血液など）、本来熊本市内まで行かないとフォローアップできないようなお子さんを、地域で治療管理が完結できるという点でも、非常に意義が高いと思われる。

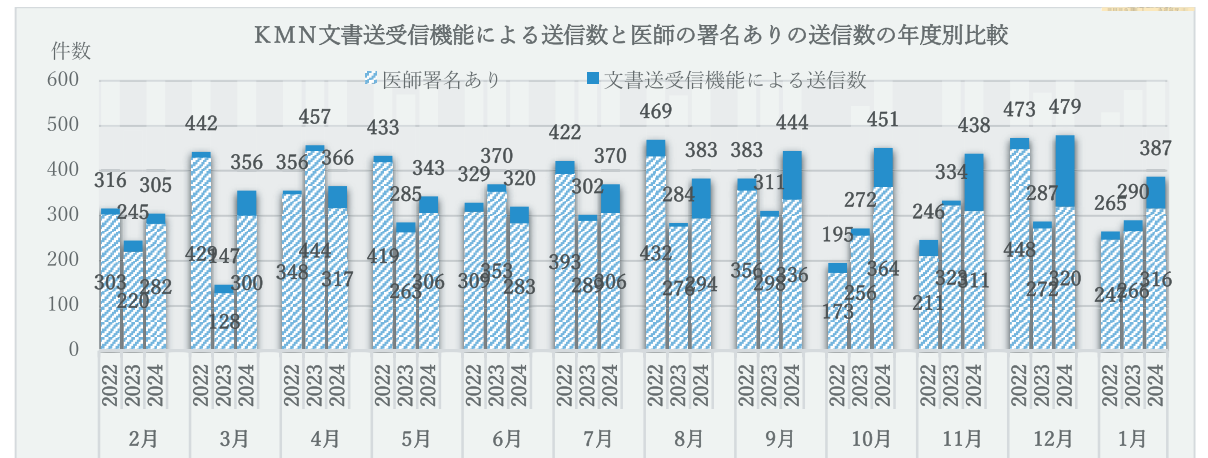
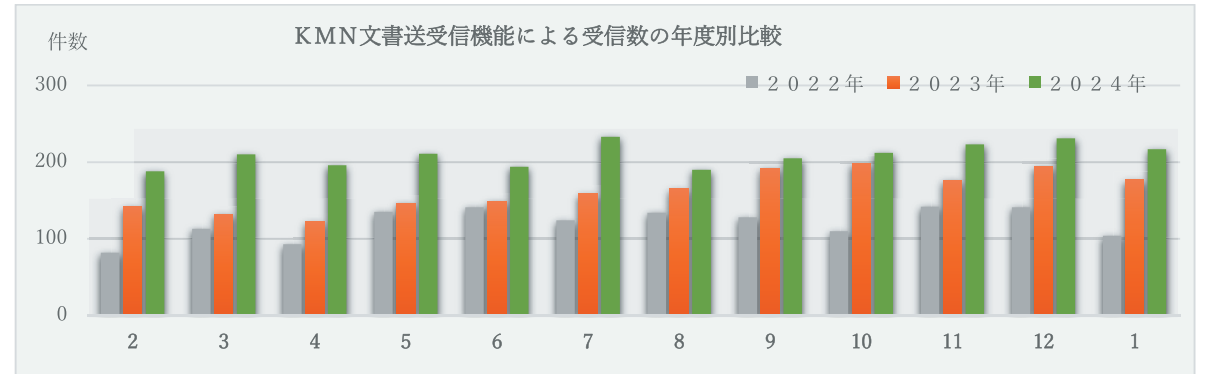
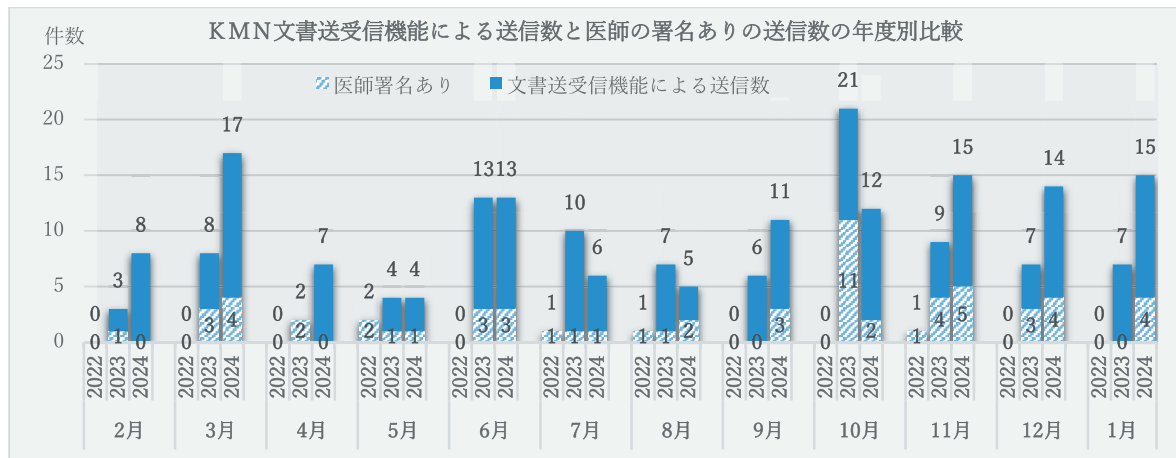
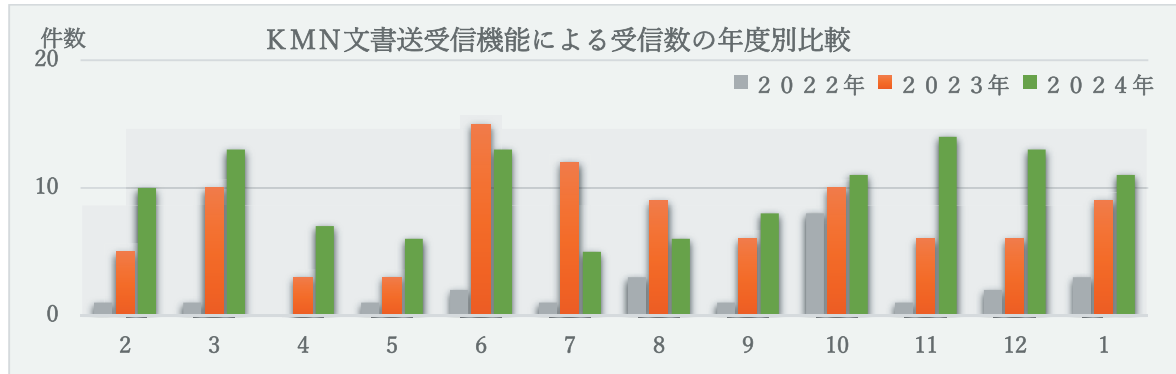
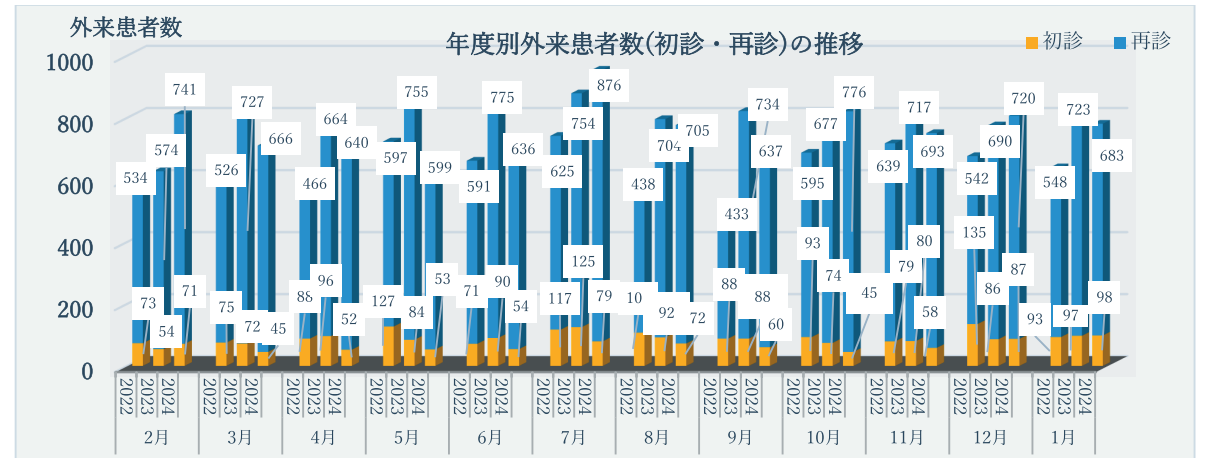
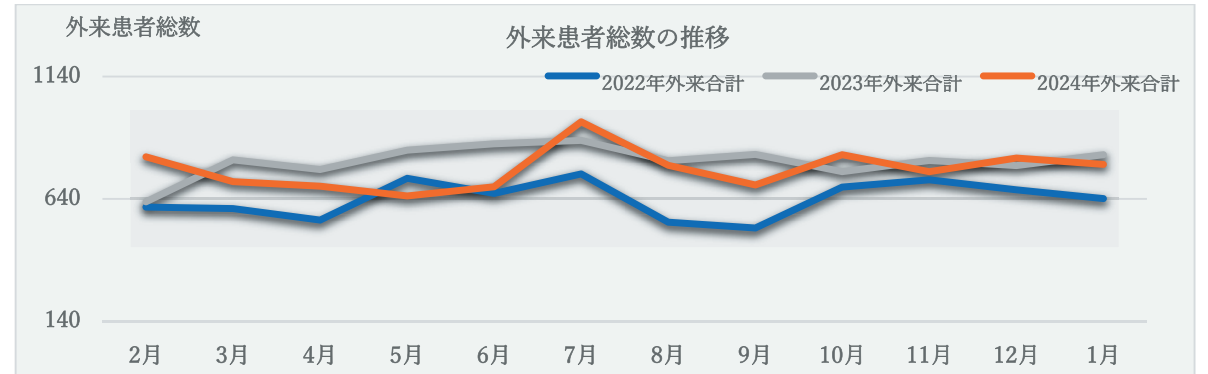
6. 地域医療における今後の課題・解決策等

特に小国公立病院は、医療機器や薬剤の数が少なく、その点では熊本市内とのギャップがみられる。そのため、どうしても、日赤や大学病院など高次医療機関との連携は不可欠となる。そのギャップを埋めるためには、医療経営上も財政上もかなり困難であり、医療機関の集約化や、患者搬送（受診の仕方）の工夫など、乗り越えなければならないハードルは多い印象である。

小国公立病院 小児科



国保水俣市立総合医療センター 小児科



派遣先地域医療拠点病院	熊本総合病院
氏 名	楠木 模
診療科名	産婦人科
事業期間	令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

- 外来診療 新来 1 日 2 名程度、再診 10 名程度
- 手術応援 助手 月 1 回程度

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

- 若手医師への悪性腫瘍の方針相談などに対応している。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

- 2024 年 4 月～2025 年 1 月まで、産婦人科全体で新来 686 人、再診 5544 人、週 5 日×2 枠の診療枠の 1 つを受け持ったため、上記のうちの 1/10 弱担当しました。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

熊本総合病院での KMN 新規導入者数は、2022 年 325 人、2023 年 105 人、2024 年 88 人で、普及が終了しつつあるが、文書送信数は 2022 年 71 件、2023 年 815 件、2024 年 1436 件、文書受信数は 2022 年 567 件、2023 年 1257 件、2024 年 1984 件、といずれも増加傾向である。産婦人科においても同様に増加傾向である。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域医療拠点病院が行うべき取組みとして、① 紹介患者に対する医療提供、② へき地診療所への医師派遣等による地域のかかりつけ医の支援、③ 地域の研修医・専攻医への教育、④ 勤務環境改善に向けた取組みがあげられている。

熊本総合病院において、地域医療拠点病院が行うべき取組みの①～④の達成状況は以下の通りである。

- ① については、婦人科疾患については、紹介患者への適切な医療提供が行われている。周産期診療については、2023 年まで熊本労災病院が受け入れていた妊産婦数・患者数と同じ程度の受け入れには至っておらず、八代地域在住の妊産婦が、これまでであれば八代地域で受けていた医療を、熊本市内や近隣市町村などの遠方の医療機関で受けていることが想定される。
- ② 、④については、熊本総合病院ではこれまで産婦人科常勤医師が 2 人と少ない中で多くの婦人科手術（腹腔鏡下手術含む）を予定しており、他科医師の応援も受けている状況であった。
また人吉地域への診療応援も行っていた。1 月からの新規の産婦人科医師 2 名の就職および、2 月からの地域医療連携ネットワーク寄付講座所属医師の派遣により、外来と手術を同時並行で行えるようになり、人吉地域への診療応援時にも自院で待機する医師を十分に確保することができるようになっている。このことは、へき地医療への貢献や勤務環境改善に寄与していると考えられる。
- ③ については、熊本総合病院は初期臨床研修医が少ないため初期研修医の指導の貢献にはなっていない。専攻医への教育という面においては、婦人科疾患については、症例数は多く腹腔鏡下手術にも携わることができるが、産科管理については経験症例数が不十分な状況である。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

熊本県内における産婦人科診療の問題点として、①地域拠点病院の部長や指導的立場であった医師が高齢となり定年を迎えつつある一方で、それを今後引き継ぐべき 30 代後半～40 代の医師が極端に少ない。②熊本市内の病院（熊本赤十字病院や福田病院など）では独自に若手医師の採用・教育を行えるが、地方（八代、人吉、天草など）の病院では、専攻医の研修プログラムの一環としての熊本大学の医局所属医師の派遣がなければ、人員の確保が困難である。以上 2 点があげられ、さらに、③周産期診療は急な多量の出血や胎児機能不全などで緊急を要すること

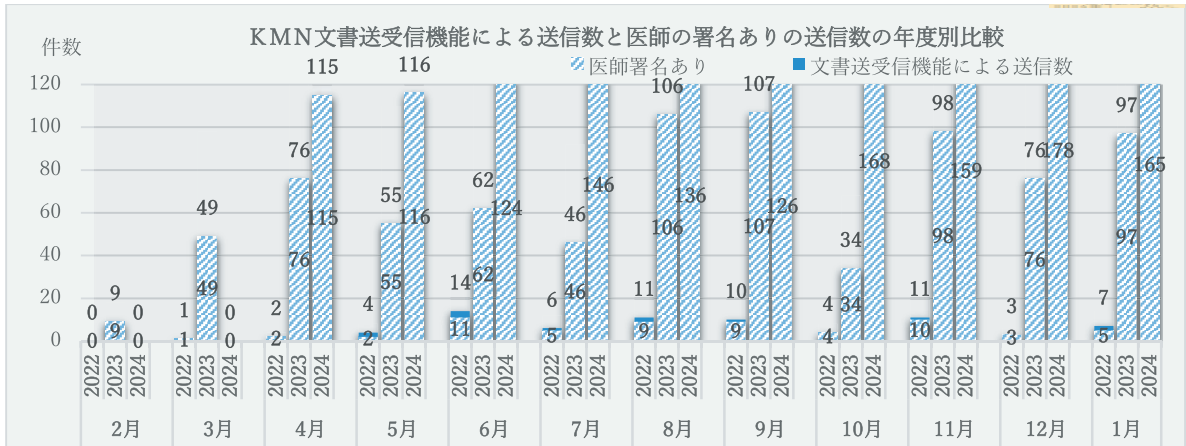
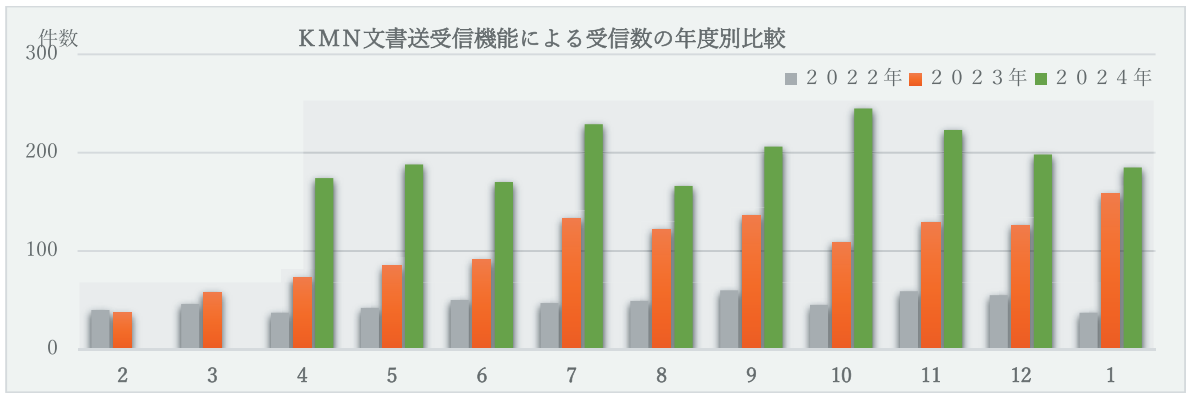
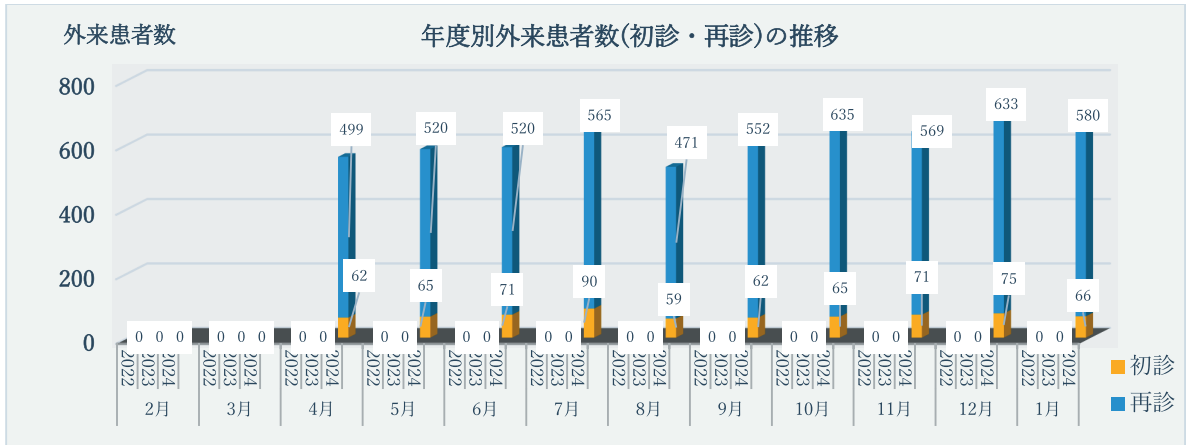
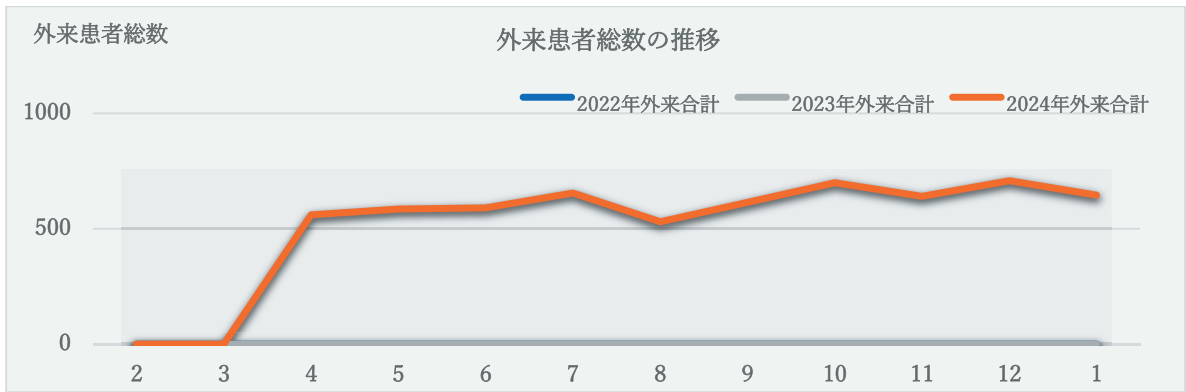
も多いため、他の診療とは異なり熊本市内への診療の集約化が必ずしも適さず、居住地域から短時間でアクセスできる位置に緊急時の対応ができる産科拠点病院が必要であるという点も重要である。

2024 年 2 月から、産婦人科に関して地域医療拠点病院が熊本労災病院から熊本総合病院に急遽変更となり、熊本大学産科婦人科学講座から派遣されていた医師（地域医療連携ネットワーク寄付講座常勤医師および非常勤医師）の派遣先が熊本労災病院から熊本総合病院に変更になった。

このため、熊本労災病院では、2024 年 1 月まで行っていた、手術、入院患者の受け入れ、周産期診療（妊婦の外来診療および分娩を含む入院診療）を 2 月より停止せざるを得なくなった。一方で、新規に産科診療を開始した熊本総合病院については、2023 年まで熊本労災病院が受け入れていた妊産婦数・患者数と同じ程度の受け入れには至っておらず、八代地域在住の妊産婦が、これまでであれば八代地域で受けていた医療を、熊本市内や近隣市町村などの遠方の医療機関で受けていることが想定される。この状況は 2024 年 1 年間で大きく変わっていない。

地域医療拠点病院の変更の背景として、上記①、②がある。産婦人科医師不足の中、若手医師の経験と地域での安全な周産期医療の提供を両立させなければならないことから、熊本総合病院に周産期医療を集約させたいという熊本大学産科婦人科教授の考えのもとで、このような変更に至ったと思われる。しかし、熊本労災病院で周産期診療が一切停止したにも関わらず熊本総合病院では十分数の周産期診療を行えていない現状にあり、その理由は明確ではないが、地域住民や、紹介をする立場の地域の産婦人科医院が、熊本総合病院への受診や紹介を控えている可能性がある。ハイリスクの周産期医療を行うために必要な小児科や血管内治療担当医師の不在も懸念材料と思われる。さらに、熊本総合病院の中堅～ベテラン医師が 2025 年 4 月、7 月より 2 名欠員になり、高齢の医師 2 人と若手のみの体制となり、さらに十分な教育が難しくなることが予想される。

熊本総合病院 産婦人科



派遣先地域医療拠点病院	阿蘇医療センター
氏 名	湯上 正樹
診療科名	整形外科
事業期間	令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

外来診療と手術を中心に診療支援を行うことにより、阿蘇地域の医療提供体制への貢献を図った。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

外来及び手術を通して、若手医師等への指導を行った。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

外来患者数は例年と大きな変化はなかった。

阿蘇医療センターでは、手術機材等の整備を図り、足部・足関節領域の外傷・障害に対する手術が可能となり、患者の生活圏内での手術を受けることができるようになった。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

メディカルネットワークの使用状況は例年と大きな変化はなかった。今後も普及に努める。

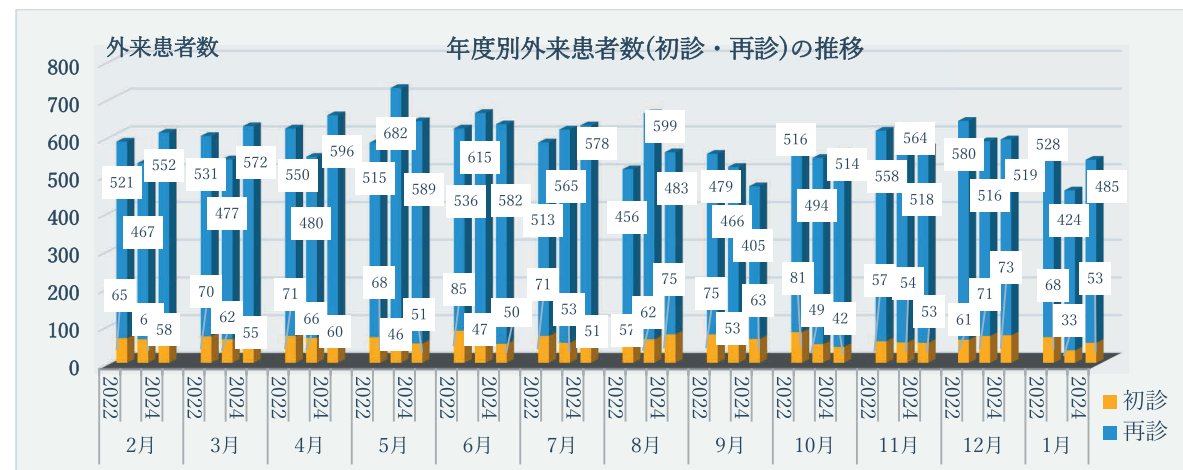
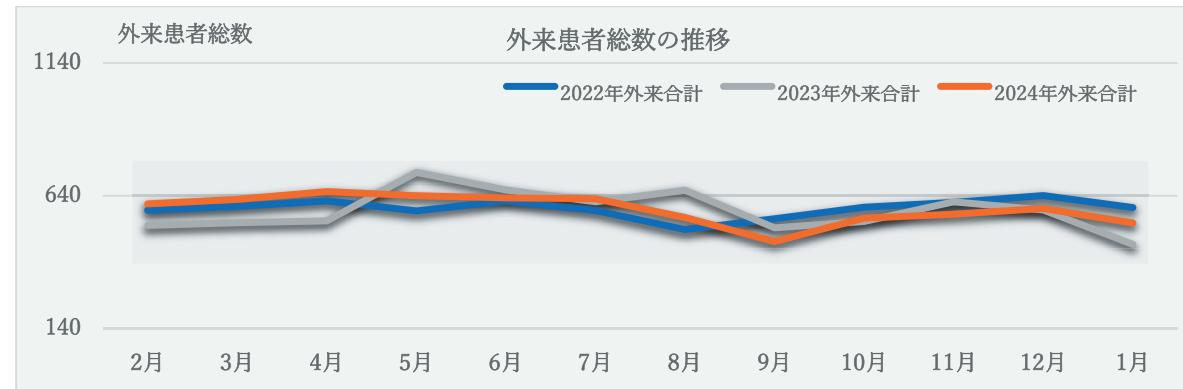
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

月に1例のペースで、足部・足関節の手術を行っており、患者自身が居住する圏域内で、専門性の高い治療が受けられることは、患者本人や家族の負担軽減と安心感につながっており、本事業による地域医療拠点病院としての役割の推進に寄与する活動の一つと考える。

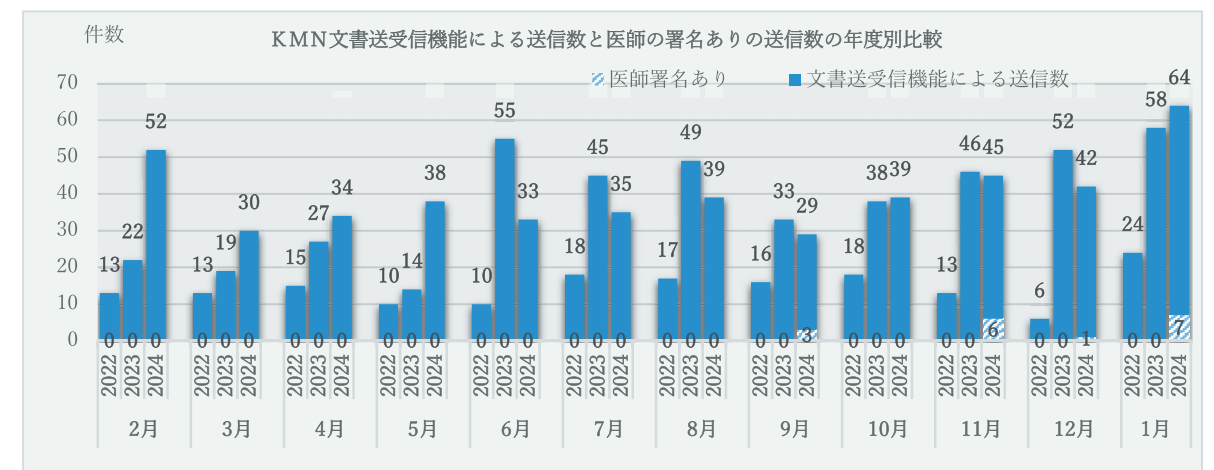
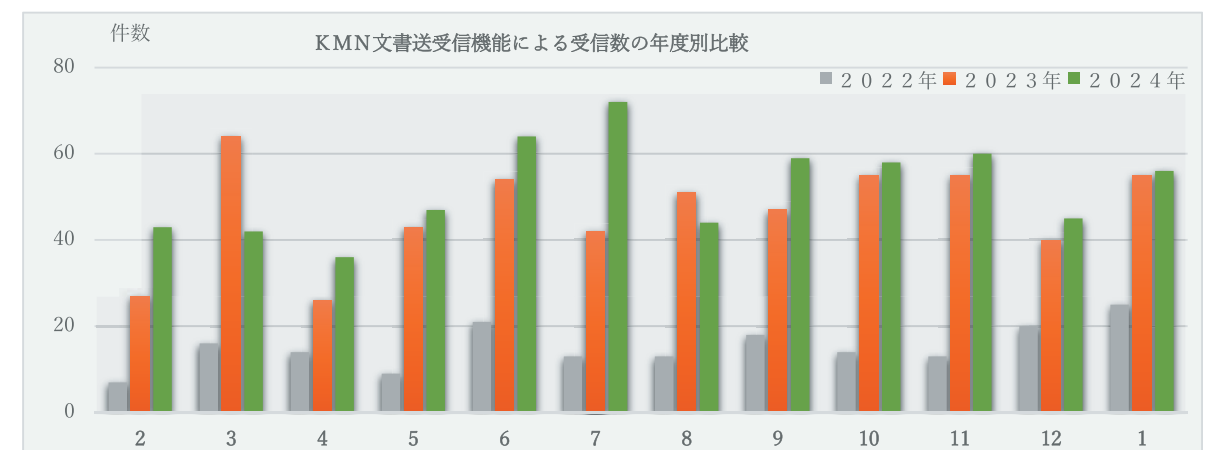
6. 地域医療における今後の課題・解決策等

阿蘇圏域内の他の病院との連携体制構築が課題と思われる。

阿蘇医療センター 整形外科



阿蘇医療センター 整形外科



派遣先地域医療拠点病院	山都町包括医療センターそよう病院
氏 名	米満 龍史
診療科名	整形外科
事業期間	令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

当科より整形外科として外来診療および入院診療にあたっている。入院患者については、常勤医師が主治医として担当いただき、外来日に整形外科として併診している。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

当科診療の範囲内で若手医師へ OJT の形で指導している。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

2024 年 2 月～2025 年 1 月の 12 か月間において、平均約 163 名/月（初診 13 名、再診 150 名）の外来診療にあたっている。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

2024 年 2 月～2025 年 1 月の 12 か月間において、KMN 新規参加 17 件、KMN の文書送受信機能による受信数平均 8.9 件/月、送信数 0.8 件/月で利用されている。

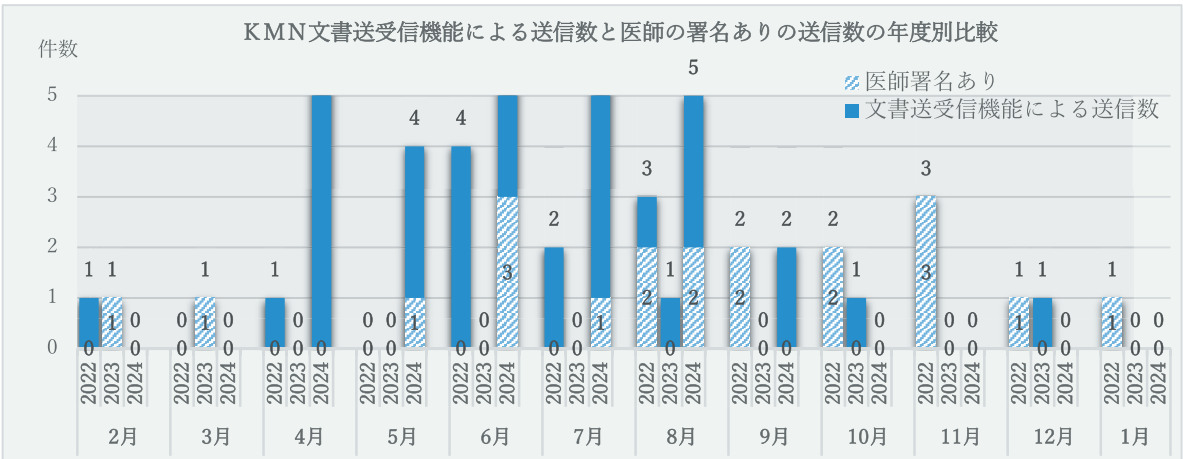
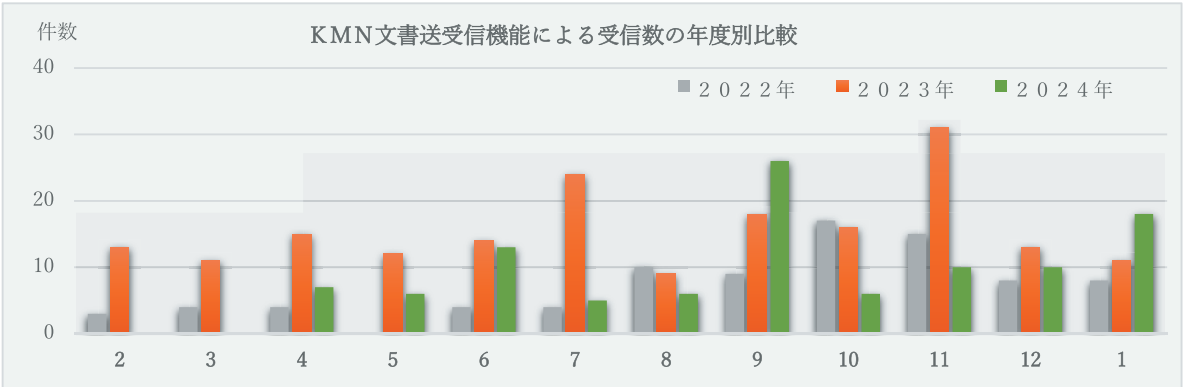
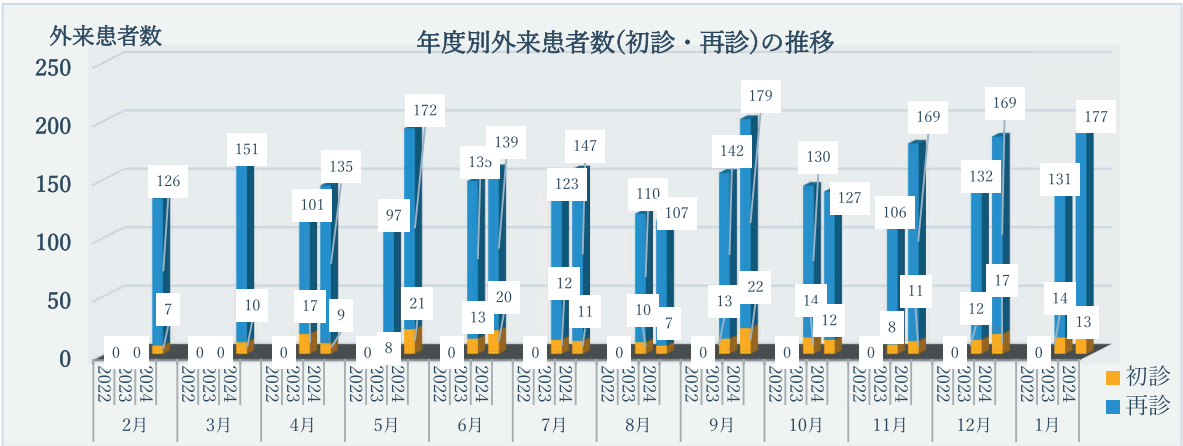
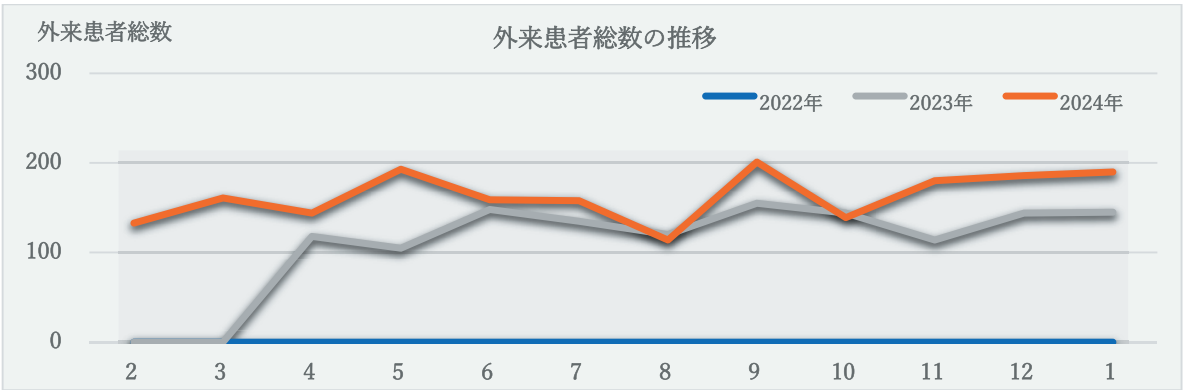
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域医療拠点病院として、地域住民の診療に従事しており、整形外科領域では手術が必要な整形外科疾患（骨折等の外傷、人工関節等の変性疾患、脊椎疾患）の手術可能施設への紹介と術後のリハビリテーション（入院、外来）を担っている。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

問題点としては KMN の送信がほとんど利用できないことが挙げられる。具体的には、KMN 立ち上げまでに 30 分以上を要するため、スムーズな KMN 利用が難しい状況と思われます。

山都町包括医療センターそよう病院 整形外科



派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院
氏 名	杉本 一樹
診療科名	整形外科
事業期間	令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

● 拠点病院の医療機能の向上、地域で不足する専門医療の提供

派遣先の地域医療拠点病院には整形外科常勤医は不在であり、令和 6 年度は大学病院から 3 名の整形外科専門医が週 3 回（火、木、金）派遣された。

整形外科疾患に対する保存療法や、専門的な加療（手術）が必要な患者の紹介、入院患者の整形外科コンサルトへの対応、専門医療機関での急性期加療後の転院やリハビリテーションの指示、地域の開業医からの整形外科患者の紹介への対応を行った。急性期の外傷などの疾患や専門的な精査・加療が必要な場合は、近隣の日田市、菊陽町の医療機関や大学病院を含む熊本市内の医療機関に紹介し急性期治療後の逆紹介に対応した。

● 地域におけるネットワーク構築に向けた地域医療の現状分析及び新たな方策の検討・提案・実践等

地域医療の現状分析として、農作業や旅館など観光業に従事する患者が多く、患者の大部分が高齢者であり、疾患としては変形性関節症や変形性腰椎症といった慢性疾患および骨粗鬆症を背景とした脊椎の圧迫骨折や橈骨遠位端骨折などの脆弱性骨折、ロコモティブシンドロームの患者の割合が高い。

また、独居の患者や日中に家族のサポートが得られない高齢の患者も多く、腰痛の悪化の際などに日常生活動作のサポート目的での入院もまれではない。

なお、脊椎外科として手術適応患者に対しては、積極的に大学病院での専門加療をすすめ紹介した。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

地域医療で派遣された研修医からの患者の診察依頼について対応した。地域での講演活動は施行できなかった。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

2024 年の整形外科の外来患者総数は 3624 人（初診 185 人）で 1 ヶ月あたり 300 名前後推移した。初診患者、再診患者ともに前年度と比較し減少した。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

小国公立病院における KMN の新規参加者数は 2024 年 31 名であった。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

整形外科常勤医が不在の派遣先病院において、整形外科疾患に対する拠点病院の医療機能の向上および不足する専門医療を提供する役割については、一定の成果をあげている。

今後も地域医療の支えとして貢献していく所存である。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

課題① 高齢化と移動手段

運転ができない高齢者の受診に際して、公共交通機関が不十分のため移動手段が限られ受診時間や回数に制約がある場合が多い。解決策としては乗り合いタクシーの利用などの他、診療科間での受診日調整などが考えられる。

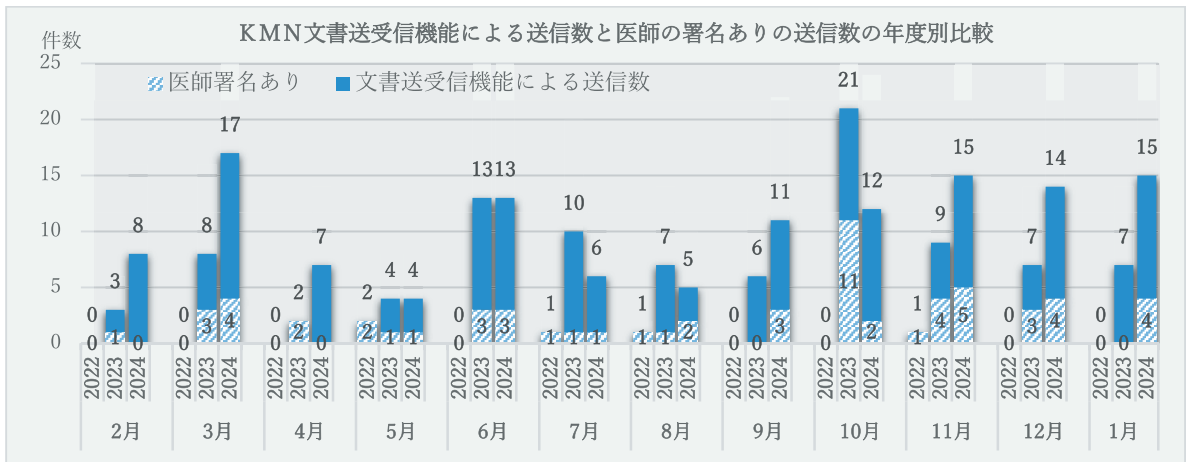
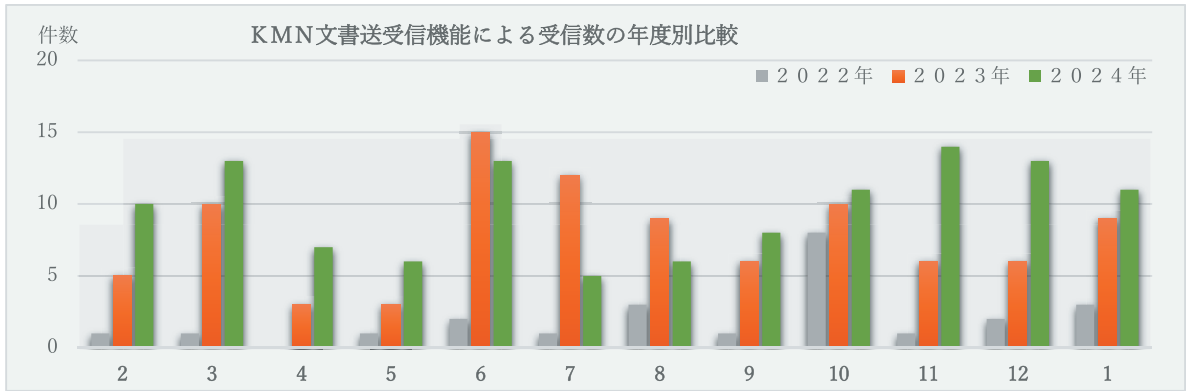
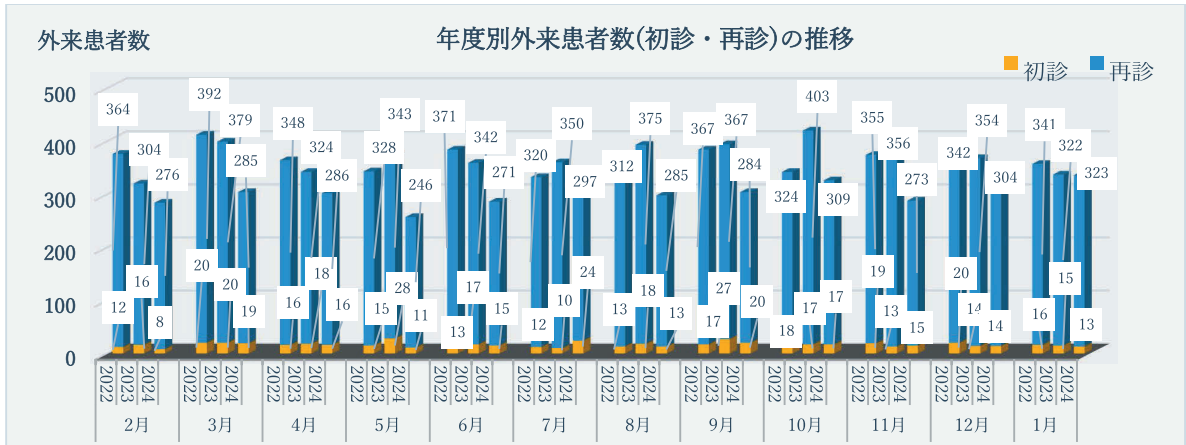
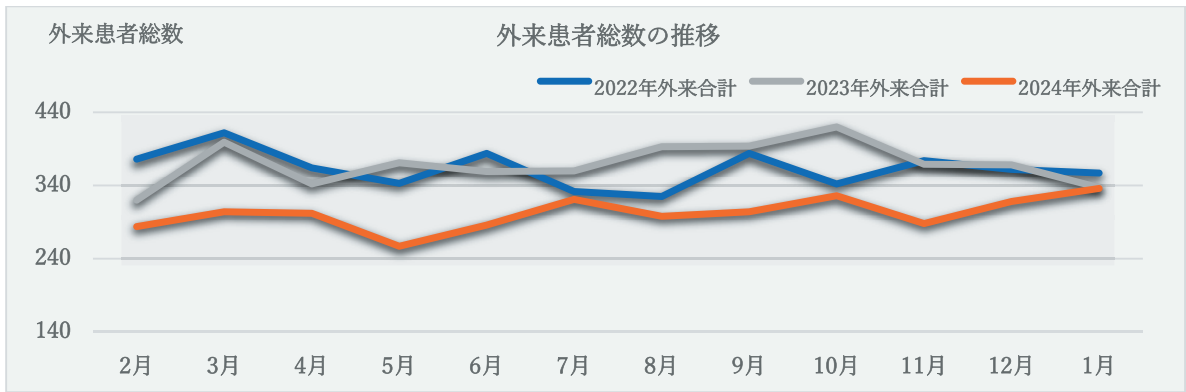
課題② 近隣医療機関・介護サービスとの連携

地域医療では一つの医療機関での診療科や対応可能な検査が限られている場合も少なくない。近隣の医療機関における診療科（対応可能な疾患）、対応可能な検査の情報が得られれば地域医療ネットワーク構築に有用であるとする。また、特に高齢者などでは、同一日に複数診療科の受診を要する場合も多く診療科間で情報を共有する

必要がある。

また、日常生活での介護を要する場合も多く、通常は入院の適応のない疾患においても自宅での生活が困難であるため社会的な入院となる例も多い。解決策としては、本人、キーパーソン、介護サービスとの連携が必要と考えられるが、地域における利用可能な介護施設などは限られている。

小国公立病院 整形外科



派遣先地域医療拠点病院	熊本県立こころの医療センター
氏 名	都 剛太郎
診療科名	神経精神科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

主に外来診療に対応している。こころの医療センターは、くまもとメディカルネットワーク未加入であるため、参加普及を促すよう働きかけを行った。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師や精神科専攻医への教育や診療相談の対応を行った。

3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

外来患者は、1月当たり60名～80名の診療を行った。
また、精神疾患や認知症の患者が新型コロナに感染した場合の入院対応等も行った。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

くまもとメディカルネットワークに未加入

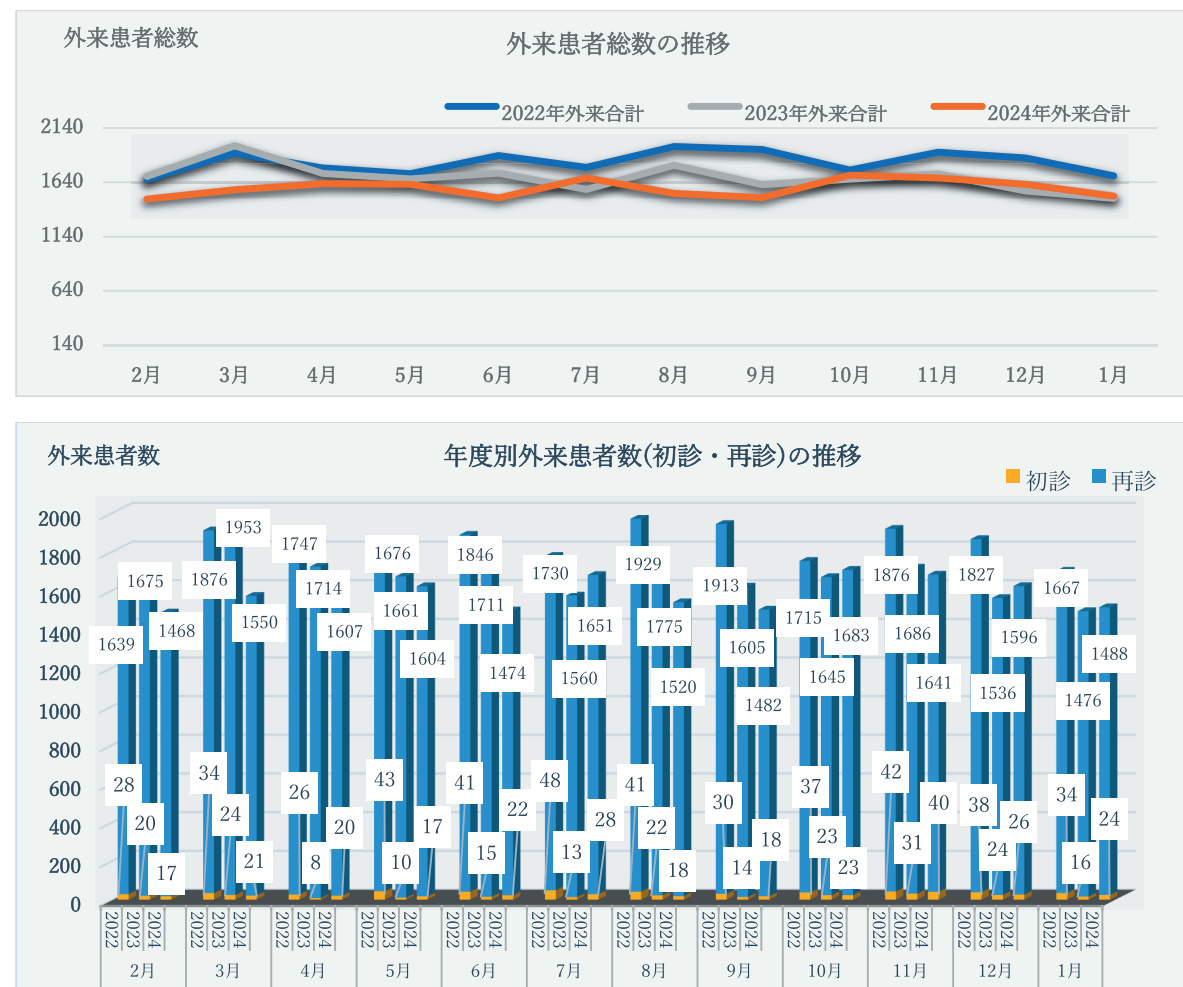
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

近隣の医療機関や診療所・クリニックとの連携をさらに深化させ、情報共有や緊急時の迅速な対応体制の確立に努めた。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

精神科を有する総合病院がほとんどなく、精神疾患を有する患者の身体加療を行う病院の選定に難渋している。

熊本県立こころの医療センター 神経精神科



7 感染症対応実践学寄附講座

1. 活動概要

● スタッフ一覧

・教授(兼任) 安永 純一郎(血液・膠原病・感染症内科学講座)
日本血液学会評議員、日本癌学会評議員、日本HTLV-1学会評議員、日本内科学会認定内科医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本血液学会認定血液指導医

・准教授(兼任) 中田 浩智(感染免疫診療部)
日本内科学会認定内科医、インфекションコントロールドクター(ICD)、抗菌化学療法指導医、日本エイズ学会認定指導医、日本感染症学会認定感染症専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液指導医、日本感染症学会認定感染症指導医

・特任講師 岩永 栄作
日本内科学会認定内科医、日本血液学会認定血液専門医、日本血液学会認定血液指導医、日本内科学会総合内科専門医

・特任助教 古田 梨愛
日本内科学会認定内科医、日本医師会認定産業医、日本血液学会認定血液専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液指導医

・特任助教 岡林 比呂子
日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本呼吸器学会専門医・指導医、日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医・指導医、難病指定医、身体障害者福祉法指定医

● 寄附講座設置概要

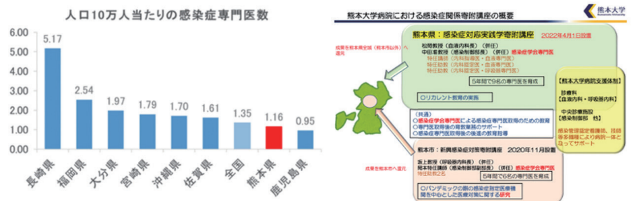
現在大流行している新型コロナウイルス感染症をはじめ、多くの新興ウイルス感染症が出現し、人類にとって大きな脅威となっている。新型コロナウイルス感染症で実感されたように、人々の移動の高速化により一箇所で発生した感染症が瞬く間に全世界に拡がる時代となっている。

新興感染症や災害時の感染症に対応できる幅広い知識、経験を有する医師・メディカルスタッフが極めて少ない状況であり、これらの感染症に対応できる人材の育成は喫緊の課題となっている。

本講座においては、熊本県全域で感染症に対応できる医療体制の連携・強化を図ることを目的として、熊本大学病院の感染症専門医を中心に、血液内科や呼吸器内科などの関連診療科及び感染制御部などの協力を得て、病院一体となって、講座運営、教育を行うこととしている。プランとしては、5年間で9名の感染症専門医を育成することとしており、先に設置された市の寄附講座においては「熊本市」へ、県の本寄附講座においては、「熊本市以外の熊本県全域」へ、その育成した人材を送り込むこととしている。併せて、熊本県内の感染認定管理看護師、技師等に対する講演会の開催等、リカレント教育の実践により、県内各地域における医療現場の最前線に立つ医療従事者の人材育成、ひいては、その地域のゆるぎない医療体制の確立へと繋げていければと考えている。熊本大学病院の理念には、「高度な医療安全管理によって、患者本位の医療を実践し、医学の発展及び医療人の育成に努め、地域の福祉と健康に貢献すること」がうたわれており、これらの課題の解決に向けて貢献することは、社会的使命の一つであると考えている。

熊本大学病院 感染症対応実践学寄附講座（熊本県設置）

新型コロナウイルスを含む新興感染症が世界的な脅威となる中、**感染症対応の専門医や医療スタッフの不足**が課題となっている。熊本大学病院では、県内の医療体制強化を目的に、感染症対応実践学寄附講座設置し**感染症専門医の育成**講座を運営。専門医を育成し、**熊本市や県内全域に派遣**する計画である。また、認定看護師や技師向けの**講演会などを通じ、地域の医療従事者のスキル向上を図る。**



【活動内容】

- 重症コロナ患者の集中治療
- 大学病院AST・ICT活動
- 感染症コンサルテーション
- 医学生教育・実技指導（OSCE）
- 教育用Webコンテンツの作成
- 医療者、行政担当者も含めた多職種を対象としたセミナー

- 令和4年度前期（令和4年10月25日）：天草中央総合病院「コロナウイルス感染症の取り組みと今後の課題」
- 令和4年度後期（令和5年1月21日）：熊本城ホール+webハイブリッド開催「新型コロナウイルス感染症の現状と対策」
- 令和4年度後期（令和5年2月21日）：天草中央総合病院「コロナウイルス感染症の取り組みと今後の課題、その2」
- 令和5年度前期感染症セミナー：2023年10月29日
テーマ：新型コロナウイルス感染症 ～これまでの経過と今後の課題～
- 熊本大学病院多職種カンファ：2023年11月16日（17名）
テーマ：新興感染症に対する諸君及びPPE着脱訓練
- 玉名地域での講演会：2023年12月15日（約40名）
開催場所：くまもと県北病院
テーマ：感染症への理解と感染対策
- 球磨地域での講演会：2023年12月1日（約15名）
開催場所：球磨郡医師会館
テーマ：感染症への理解と感染対策
- 令和5年度後期感染症セミナー：2024年2月4日
テーマ：ポストコロナのAMR対策～熊本のAMR対策を考える～
- 熊本大学病院 令和6年度感染症セミナー、令和6年10月6日、熊本城ホール
「新型コロナウイルスだけじゃない！～あなたの身近に迫る感染症の脅威～」
- 熊本大学病院 令和6年度後期感染症セミナー、令和7年2月15日（土）、熊本城ホール
「感染症の有事に備える～再興感染症と災害感染対策の現場からの学び～」

2. 年間活動実績

月	活動内容
通年	【新型コロナウイルス・重症感染症診療】 ・重症患者受け入れ、（大学病院 ICU） 【一般感染対策】 ・ICT コンサルテーション（随時） ・抗菌薬適正使用支援チーム(AST)(Antimicrobial Stewardship Team)会議：毎週火曜日 ・院内感染対策チーム（Infection Control Team：ICT）ラウンド：毎週木曜日 ・インフルエンザ・コロナワクチン接種 【感染症リカレント教育コースの作成】 ・（先端ウイルス学コース、院内感染制御コース、災害時感染対策コース）等の受講・人材育成へむけた動画コンテンツの整備
9 月	臨床実習入門「感染対策」（学生向け実習指導）
10 月	【令和 6 年度前期感染症セミナー】 開催日時：令和 6 年 10 月 6 日（日）13：30～15：30 開催場所：熊本城ホール 座 長：安永 純一郎（血液・膠原病・感染症内科）、坂上 拓郎（呼吸器内科） 演 者：中田 浩智（熊本大学病院） 和田 正文（上天草市立上天草総合病院） テーマ：新型コロナだけじゃない！～あなたの身近に迫る感染症の脅威～ 内 容：① 中田 浩智：増加する性感染症 ～他人事にしないための基礎知識～ ② 和田 正文：マダニ媒介感染症 ～マダニに刺されやすい人の行動と天気の話～

2 月	【令和 6 年度後期感染症セミナー】 開催日時：令和 7 年 2 月 15 日（土）13 時 30 分～15 時 30 分 開催場所：熊本城ホール 座 長：坂上拓郎（呼吸器内科）、安永純一郎（血液・膠原病・感染症内科） 演 者：山中 徹（熊本南病院呼吸器科部長） 櫻井 滋（東八幡平病院危機管理担当顧問） テーマ：感染症の有事に備える～再興感染症と災害感染対策の現場からの学び～ 内 容：① 山中 徹：高齢者施設における結核対策 ～その必要性和実際～ ② 櫻井 滋：災害時の感染制御支援について ～DICT の生い立ちと現在地～
3 月	【令和 6 年度第 2 回抗菌薬適正使用に関する研修会】 開催日時：令和 7 年 3 月 19 日（水）16 時 00 分～17 時 00 分 開催場所：熊本労災病院 演 者：中田 浩智、岩永 栄作 対象者：医師・看護師・技師等の医療従事者 テーマ：感染症への理解と感染対策 内 容：日本の新しい薬剤耐性(AMR)対策 ～アクションプランについて～

3. 活動報告

● セミナー等の開催

感染症対応実践学寄附講座の活動目標として医療者、行政担当者も含めた多職種を対象としたセミナーを年 2 回以上企画・実施している。令和 6 年度の開催実績は以下の通りである。

- 令和 6 年度前期感染症セミナー：令和 6 年 10 月 6 日（約 100 名）

テーマ：新型コロナだけじゃない！ ～あなたの身近に迫る感染症の脅威～
開催場所：熊本城ホール

- 令和 6 年度後期感染症セミナー：令和 7 年 2 月 15 日（約 100 名）

テーマ：感染症の有事に備える ～再興感染症と災害感染対策の現場からの学び～
開催場所：熊本城ホール

- 八代地域での講演会：2025 年 3 月 19 日（約 50 名）

開催場所：熊本労災病院
テーマ：日本の新しい薬剤耐性(AMR)対策

● 各セミナーの実施概要

- 熊本大学病院 令和 6 年度 前期感染症セミナー
＜開催概要＞

令和 6 年 10 月 6 日に「熊本大学病院 令和 6 年度 前期感染症セミナー」を、熊本城ホールでの現地開催および Web でのハイブリッドセミナー形式にて開催した。テーマを「新型コロナだけじゃない！ ～あなたの身近に迫る感染症の脅威～」と題し、中田 浩智先生（熊本大学病院）から「増加する性感染症」、和田 正文先生（上天草市立上天草総合病院）から「マダニ媒介感染症」についてご講演いただいた。

性感染症への対応や、熊本県地域特有のマダニ関連感染症について最新知見の解説がなされた。参加人数は約 100 名で、医師、薬剤師、看護師、獣医師、介護職、臨床検査技師など多職種の聴講があった。

論文、執筆

- Takashi Noda, Kotaro Nochioka, Koichi Kaikita, Masaharu Akao, Junya Ako, Tetsuya Matoba, Masato Nakamura, Katsumi Miyauchi, Nobuhisa Hagiwara, Kazuo Kimura, Atsushi Hirayama, Kunihiko Matsui, Hisao Ogawa, Satoshi Yasuda, on behalf of the AFIRE investigators. Antithrombotic therapy for stable coronary artery disease and atrial fibrillation in patients with and without revascularisation: the AFIRE trial. EuroIntervention. 2024 Apr 1;20(7):e425–e435. doi: 10.4244/EIJ-D-23-00396
- Kunihiko Matsui, Kengo Kusano, Masaharu Akao, Hikari Tsuji, Shinya Hiramitsu, Yutaka Hatori, Hironori Odakura, Hisao Ogawa. Observational study of frailty in older Japanese patients with non-valvular atrial fibrillation receiving anticoagulation therapy. Sci Rep. 2024 Jun 22;14:14423. doi: 10.1038/s41598-024-65237-4
- Yasuhiro Otsuka, Masanobu Ishii, Noriaki Tabata, Seitaro Oda, Masafumi Kidoh, Yuichiro Shirahama, Koichi Egashira, Naoto Kuyama, Taku Rokutanda, Katsuo Noda, Eiji Horio, Tomohiro Sakamoto, Takashi Kudo, Hideki Shimomura, Tomokazu Ikemoto, Ryusuke Tsunoda, Taishi Nakamura, Kunihiko Matsui, Koichi Kaikita, Kenichi Tsujita; ENRICH AF TAVI Investigators. Subclinical leaflet thrombus in patients with severe aortic stenosis and atrial fibrillation -ENRICH-AF TAVI study. Sci Rep. 2024 Jun 28;14:14902. doi: 10.1038/s41598-024-65600-5
- Naoto Kuyama, Satoshi Araki, Koichi Kaikita, Nobuhiro Nakanishi, Naoya Nakashima, Shinsuke Hanatani, Yuichiro Arima, Masahiro Yamamoto, Taishi Nakamura, Eiichiro Yamamoto, Kenichi Matsushita, Kunihiko Matsui, Kenichi Tsujita. Mineralocorticoid Receptor Blocker Prevents Mineralocorticoid Receptor–Mediated Inflammation by Modulating Transcriptional Activity of Mineralocorticoid Receptor–p65–Signal Transducer and Activator of Transcription 3 Complex. Journal of the American Heart Association, 13(18), e034672. doi: 10.1161/jaha.123.030
- Matsui K. Good News or Bad News? JMA J. 2024 Apr 15;7(2):222-223. doi: 10.31662/jmaj.2024-0025. Epub 2024 Mar 18. PMID: 38721081
- Sugawara M, Kojima S, Hisatome I, Matsui K, Uchiyama K, Yokota N, Tokutake E, Wakasa Y, Hiramitsu S, Waki M, Jinnouchi H, Kakuda H, Hayashi T, Kawai N, Mori H, Tsujita K, Ohya Y, Kimura K, Saito Y, Ogawa H; Febuxostat for Cerebral and CaRdiorenovascular Events PrEvEntion StuDY (FREED) investigators. Impacts of Febuxostat on Cerebral and Cardiovascular Events in Elderly Patients with Hyperuricemia: Post Hoc Analysis of a Randomized Controlled Trial. Clin Pharmacol Ther. 2024 Jun;115(6):1358-1364. doi: 10.1002/cpt.3217. Epub 2024 Feb 23.
- Ishizuka K, Shikino K, Kuriyama A, Nishimura Y, Tanaka E, Nonaka S, Sadohara M, Moriya M, Yamamoto N, Wada Y, Makiishi T. A proposal for coping strategies on burnout among Japanese resident physicians. Journal of General and Family Medicine. page 83-84 Vol.25 2024.
- Kunitomo K, Tsuji T, Kouzaki Y, Yoshimura F, Kubosaki J, Shimizu T. Factors Affecting Diagnostic Difficulties in Aseptic Meningitis: A retrospective observational study. Diagnosis. Vol. 11, No. 1, pp. 29–36, 2024
- 久保崎 順子,「後医は名医? 始めは急性腸炎と診断されていたが…」, 日経メディカル「診療バイアス」連載記事, 2024年7月、Web掲載(ページなし)

＜内容＞

- ① 中田 浩智：増加する性感染症
～他人事にしないための基礎知識～
- ② 和田 正文：マダニ媒介感染症
～マダニに刺されやすい人の行動と天気の話～

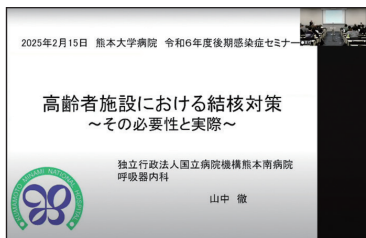
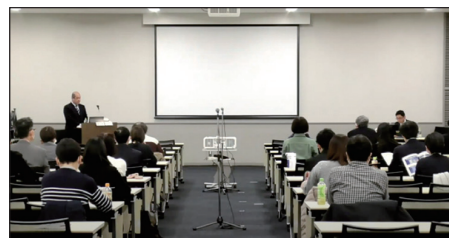


<https://www.youtube.com/watch?v=hynRMCKlbt4>

○ 熊本大学病院 令和6年度 後期感染症セミナー

＜開催概要＞

令和7年2月15日に「熊本大学病院 令和6年度 後期感染症セミナー」を、熊本城ホールでの現地開催およびWebでのハイブリッドセミナー形式にて開催した。テーマを「感染症の有事に備える～再興感染症と災害感染対策の現場からの学び～」と題し、山中 徹先生(熊本南病院)から「高齢者施設における結核対策」、櫻井 滋先生(東八幡平病院)から「災害時の感染制御支援」についてご講演いただいた。結核感染や災害時のICT活動について最新知見の解説がなされた。参加人数は約100名で、医師、薬剤師、看護師、獣医師、介護職、臨床検査技師など多職種の聴講があった。



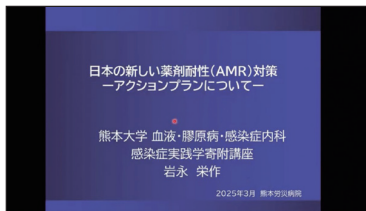
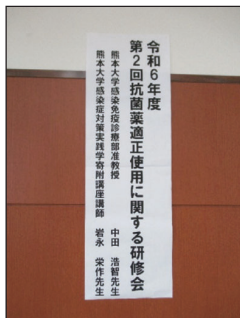
<https://www.youtube.com/watch?v=F8OPwYWSHdM>

○ 令和6年度第2回抗菌薬適正使用に関する研修会 (熊本労災病院)

＜開催概要＞

令和7年3月19日に感染症対応実践学寄附講座セミナー「抗菌薬適正使用に関する研修会」を熊本労災病院で開催した。2演題の講演があり、岩永特任講師によりトピックス「AMRアクションプラン」が、中田准教授より「院内感染と多剤耐性菌対策」について最新知見の解説がなされた。

参加人数は会場での参加が約50名で、医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師、臨床工学技士、事務職など多職種の聴講があった。



研究

- 松井 邦彦（研究分担者）、基盤研究 (C)「粒子状物質による急性心筋梗塞や院外心停止の発症および発症メカニズムの解明」、研究期間：2021/4/1-2025/3/31
- 松井 邦彦（研究分担者）、基盤研究 (A)「臨床現場での多重課題における意思決定要因の解明」、研究期間：2020/4/1-2025/3/31
- 荒木 智、基盤研究 (C)「トレハロースによる腸 - 脳 - 心連関の解明」、研究期間：2022/4/1-2025/3/31
- 佐土原 道人、「地域医療研修による研修医のレジリエンスの変化に関する質的研究」、研究期間：2018/08/20-2025/03/31
- 佐土原 道人、「働き方改革のためのホスピタリスト・システムの導入に対し、米国で働く日本人ホスピタリストはどのような見方をしているか?」、研究期間：2018/09/20-2025/03/31
- 佐土原 道人、「地域医療研修による研修医のレジリエンスの変化に関するアンケート調査」、研究期間：2019/06/21-2025/03/31
- 佐土原 道人、「研究倫理と公正に係る患者・市民参画 (PPI) に関する質的研究」、研究期間：2023/12/05-2025/03/31
- 佐土原 道人、「ポストコロナの地域医療特別実習の教育的効果とコミュニティへの視点に関する研究」、研究期間：2023/11/22-2025/03/31
- 佐土原 道人、「日本医療研究開発機構 研究公正高度化モデル開発支援事業 医療分野の「責任ある研究・イノベーション (RRI)」推進に資する取り組み」、研究期間：2022/12/01-2025/03/31
- 高柳 宏史、基盤研究 (C)「ICPC-3 日本語版の開発」、研究期間：2024/4/1-2027/3/31
- 北村 泰斗、佐土原 道人 (研究開発分担者)、「軽症・中等症として入院した COVID-19 患者における入院長期化の関連因子」、研究期間：2022/12/05-2029/03/31

学会発表

- Michito SADOHARA, Kosuke Honda, Taito Kitamura, Hiromichi Tanaka, Hiroki Irie, Kunihiko Matsui. A FIRST REPORT OF FOODBORNE BOTULISM CAUSED BY TYPE C TOXIN WITHIN A FAMILY IN JAPAN. Annual Meeting of the Society of General Internal Medicine 2024. 2024/5/15～5/18. Boston, MA. Sheraton Boston Hotel and Hynes Convention Center . (Poster presentation)
- Michito SADOHARA, Kunihiko MATSUI. A RARE CASE OF PRIMARY INTESTINAL LYMPHANGIECTASIA (WALDMANN’S DISEASE) DIAGNOSED DEFINITELY AFTER 30 YEARS AND DEVELOPMENT OF EXTRA-INTESTINAL DIFFUSE LARGE B-CELL LYMPHOMA. Annual Meeting of the Society of General Internal Medicine 2024. 2024/5/15～5/18. Boston, MA. Sheraton Boston Hotel and Hynes Convention Center . (Poster presentation)
- Taito Kitamura, Michito Sadohara, Kunihiko Matsui. THE FAVORABLE PERCEPTION AND EDUCATIONAL IMPACT OF A FIELDWORK AND LODGING TRIPS FOR MEDICAL STUDENTS WITH SCHOLARSHIPS AND OBLIGATIONS TO WORK IN RURAL AREAS. Annual Meeting of the Society of General Internal Medicine 2024. 2024/5/15～5/18. Boston, MA. Sheraton Boston Hotel and Hynes Convention Center . (Poster presentation)
- 佐土原 道人, 松井 邦彦、「臨床研究実施段階の研究者と研究参加者の捉え方のギャップと配慮すべき研究倫理・公正の事項とは?」、第 56 回日本医学教育学会大会、2024/8/9 ～ 8/10、東京都板橋区、帝京大学板橋キャンパス、(ポスター)
- 高柳 宏史、「熊本大学の地域枠学生による医療者教育の取り組み：地域医療総合演習」、第 56 回日本医

学教育学会大会、2024/8/9-8/10、東京、帝京大学板橋キャンパス、(口演)

- 小山 耕太、「ポストコロナ時代の地域医療教育」、第 10 回九州地域医療教育研究会、那覇市、沖縄県立博物館・美術館、2024/5/11、(口演)
- 久保崎 順子、「SGLT2 阻害薬に関連した正常血糖ケトーシスの 2 症例」、第 30 回 熊本医療センター医学会、熊本市、国立病院機構熊本医療センター、2025/1/18、(口演)

講演会、講師

- 松井 邦彦、「この 15 年間を振り返って」、熊本県地域医療支援機構、令和 6 年度熊本県地域医療支援機構講演会、2025/3/18、熊本市中央区、熊本大学病院 くすのきテラス 3 階 大会議室、(口演)
- 佐土原 道人、「研修方法と研修評価」、2024 年度第 2 回看護師特定行為指導者養成講習会、2024/11/10、(タスクフォースとして)
- 佐土原 道人、「社会が求める医師の臨床能力とは?、臨床研修の充実に向けて『研修の現場の問題点と対応』」、第 23 回熊本大学病院群臨床研修指導医研修ワークショップ、2024/11/29, 11/30、(タスクフォースとして)
- 佐土原 道人、「研修方法と研修評価」、2024 年度第 4 回看護師特定行為指導者養成講習会、2024/12/22、(タスクフォースとして)
- 佐土原 道人、「研修評価」、2024 年度全日病指導医講習会、2025/2/2、(タスクフォースとして)
- 佐土原 道人、「医師臨床研修制度の理念と概要、臨床推論を引き出すプレゼンテーションの指導、臨床現場での評価とポートフォリオ、指導医に必要な医療安全・労働安全の知識、フィードセッションの体験」、第 30 回徳洲会グループ指導医養成講習会、2025/2/8, 2/9、(タスクフォースとして)
- 佐土原 道人、石塚 晃介、「バーンアウトに対するマネジメント～個人レベルと組織レベルでのアプローチ～」、ACPPWC オンラインセミナー、2025/2/13、(オンラインセミナー)
- 高柳 宏史、「地域保健医療における AI 利活用の展望 2025 超高齢化社会の訪れ -SDGs と地域創生」、日台青年国際フォーラム、2024/5/30、(講演)
- 高柳 宏史、「備えあれば憂いなし災害医療の ABC ～総論と災害サイクル～」、Dr.’s Prime Academia、2024/7/28、(講演)
- 高柳 宏史、「家庭医療専門医による臨床研究ネットワーク」、日本プライマリ・ケア連合学会専門医部会フォーラム、2024/11/10、(ファシリテーター)
- 高柳 宏史、「備えあれば憂いなし災害医療の ABC ～CSCATTT～」、Dr.’s Prime Academia、2024/11/12、(講演)
- 高柳 宏史、「ICPC 抄読会」、ICPC 抄読会、2024/11/14、(講演)
- 高柳 宏史、「災害の地域への影響」、福島県立医科大学修士課程講義、2024/12/4、(講義)
- 山本 幸近, 西郡 棕也, 土田 紗愛, 吉岡 志保, 松尾 絹子, 高柳 宏史、「世代を超えて語ろう!! しくじり経験談から学ぶ未来」、日本プライマリ・ケア連合学会 第 19 回九州支部総会・学術大会、2025/1/12、(ファシリテーター)
- 高柳 宏史、「ICPC-3 概説」、ICPC セミナー、2025/3/20、(講演)
- 小山 耕太、「熊本県の医師偏在解消に向けて」、熊本県全国自治体病院協議会熊本県支部定時総会、2024/7/12、(口演)
- 久保崎 順子、「院内急変事例の検討」、月曜会 (内科症例検討会)、2024/1/15、(口演)
- 久保崎 順子、「下顎骨髄炎について」、月曜会 (内科症例検討会)、2024/5/20、(口演)
- 松田 圭史、「貸与医師としての義務を終えて」、熊本県地域医療支援機構、令和 6 年度熊本県地域医療支援機構講演会、2025/3/18、熊本市中央区、熊本大学病院 くすのきテラス 3 階 大会議室、(口演)

1. 教員

佐土原 道人 特任助教

[地域医療・総合診療実践学寄附講座]

診療支援先は、昨年度も、阿蘇医療センターでお世話になりました。様々な病院から実習、研修に来ている学生や研修医からよい刺激を受けております。

総合診療専門研修プログラム関連では、2024年度は修了者2名が専門医試験に合格し総合診療専門医となりました。次年度も3名の専攻医が新しく加わり、当総合診療専門研修プログラムへ毎年途切れずに採用できています。気がつけば、総合診療科、地域医療支援センター、寄附講座関連のいわゆる医局の所属者は、各所合わせて20名以上になりました。ゆっくりですが、着実に総合診療専門研修プログラムの安定した運営と専門医育成ができてきております。次年度は、制度開始初年度の専門医の専門医更新もひかえております。引き続き専攻医の専門研修を各連携施設で願います。

地域枠学生や自治医科大学学生を対象に行っている地域医療特別実習も、夏季と冬季の2回に行うのも定着してきました。その成果は、参加学生自身が、2024年5月の九州地域医療教育研究会と6月のプライマリ・ケア連合学会で発表しました。まあ、地域医療特別実習で行った新しい教育手法の試みを2025年フロリダで行われる米国総合内科学会で発表予定です。我々の教育活動を世界に発信できることは、うれしい限りです。今後ともよろしくお願いいたします。

高柳 宏史 特任助教

[地域医療支援センター]

コロナ禍後に初めて海外に足を延ばした(しかも2度)という点をとらえると、私自身の中でもコロナ禍の制限や抑制がとれたのだと思いました。2018年に高齢者医療におけるAIへの期待

と題して老年医学会雑誌に掲載した記事を目にされて、台湾にある中華医事科技大学よりシンポジウムでの講演依頼をいただきました。シンポジウムでは、地域の健康・保健に対する取り組みにおけるAIの利活用について講演を行いました。しかし、今振り返って、すでにその講演の内容は古いものになってしまっています。そのくらいAIが社会の中や、専門分野の中で急速に浸透してきていると思います。

昨年は台湾だけでなく、イギリスとアイルランドにも足を運びました。世界家庭医機構(WONCA)の国際分類委員会(WICC)の日本委員としての参加です。対面での参加は初めてでしたが、諸外国での取り組みを垣間見ることができました。まったく医療における情報の集積方法、コーディングなどが日本とことなるのだと改めて理解しました。一方で、日本でどんな情報源を持つべきかなどについても知見を深めることができました。また新たなプロジェクトの一つとして、大規模言語モデル(LLM)を用いての医療情報のコーディングプロジェクトが話し合われました。ここでもAIの話題がでてきたと印象深かったです。

イギリスのWICCに参加したのち、アイルランドにわたってWONCA Europe 2024 conferenceに参加してきました。ここでもやはりAIに関連するトピックが基調講演や、ワークショップ、一般口演などで発表がありました。

私自身も、Chat GPT、GeminiなどのAIツールを用いるようになりましたし、多くの方がそれらのAIツールを使うようになりました。そう考えると、2024年はAIがより身近に躍進、浸透した年であったように思います。

堤 龍子 特任助教

[地域医療支援センター]

今年度から地域医療支援センターで勤務し、早くも1年が経ちました。これまでは熊本県の地域医療で主に臨床を行ってきたため、大学病院での診療や教育活動は私にとって新鮮な経験でした。また、女性医師・子育て医師支援専任として、女性医師同士が意見交換を行える場を設定し、対面・

オンラインを合わせて7回実施することができました。

私自身が地域医療に従事し、地域で妊娠・出産・育児をした経験を活かしながら、現在地域医療を行っている女性医師から、地域で働く楽しさや悩みを直接聞くことができたと感じています。また、アンケートも実施し、多くの課題が依然として存在していることが明らかになりました。お忙しい中、アンケートにご協力くださった皆さま、意見交換会にご参加くださった皆さまに心から感謝申し上げます。

今後は、こうした活動を継続しながら抽出された課題を整理し、県や各医療機関と連携を取りつつ、その解決策を模索していきたいと考えています。地域で勤務する医師や、地域枠の医学生の皆さんの力になれるよう、来年度も精いっぱい取り組んでまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

北村 泰斗 特任助教

[地域医療・総合診療実践学寄附講座]

今年度もひきつづき、地域医療・総合診療に関連した臨床研究、地域枠学生・医師のキャリア支援、医学部カリキュラム、診療支援(学内総合診療科外来、そよう病院外来、くまもと県北病院救急外来)等の活動に関わらせていただきました。一方、テレビ会議システムを利用した合同WEBカンファがなかなか開催できなかったのも、本年度は専攻医の学会発表等に合わせて企画できたかなと思っています。

地域枠学生・自治医大生を対象とした夏季・冬季地域医療特別実習では、みなさん地域の方々の期待や風土などについて、それぞれに感じ取っておられるようで、各地域における医療や保健・福祉としての視点はもとより、よりよい地域づくりといった視点でも思いを馳せておられる様子を見るに、photovoiceや肥後狂句も有用であったのではないかと思います。私も地域医療特別実習に限らず効果的でわくわくするようなアイデアを楽しみながら考えていけたらなと学びになりました。

今年は、熊本大学総合診療専門研修プログラムに、新たに三人参加してくれました。彼らが日々の生活の中で自然と学び、気がつけば広い視野をもった自立した医師になっていけるような環境を

整えられるよう自分も研鑽を積んでいきたいと思っています。今後ともご支援ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

鶴田 真三 特任助教

[地域医療・総合診療実践学寄附講座]

河浦教育拠点]

今年度は、レジデントを修了した下地先生が河浦病院にそのまま在任していただき、人員的には大きな変化もなくスタートすることができました。地域活動としては、これまで地域や他職種との関りの蓄積と下地先生の持ち前の積極性もあり、介護施設ではじめて勉強会を開催したり、地域での住民向け講座を昨年より充実して行ったり、昨年までよりも一歩進んだ活躍ができたと思います。また、地域活動を行っている「しきちの会」で年3回の食支援をテーマにした勉強会を開催することもできました。さらに、新たに自分は看護学校で授業させていただくようになり、学生への地域医療の教育、特に多くの天草育ちの学生さんたちに天草での医療の楽しさ、素晴らしさを伝える機会をいただきました。大学からの医学生や地域研修で河浦に来る初期研修医も、実習や研修期間以外でも遊びに来てくれる方もいて、天草の地域の楽しさを多少なりとも伝えられたかなと感じています。

医療そのものによる地域貢献はもちろんですが、地域啓発活動や人材育成など、今後も地域貢献になる活動を年々前進して行い、自分たちも楽しんでいきたいと思っています。新たなレジデントとの日々も楽しみです。

これからどうぞよろしくお願いいたします。

中村 孝典 特任助教

[地域医療・総合診療実践学寄附講座]

くまもと県北教育拠点]

令和4年度は、熊本大学病院地域医療・総合診療実践学寄付講座の特任助教としてくまもと県北病院教育拠点に赴任し、臨床業務および卒前卒後教育を行いました。また社会人大学院生として研究活動も開始しました。

自身の臨床業務だけでなく、学生、初期研修医、後期研修医の教育業務についても今まで以上に時間を割くことで新たな発見もあり、自分としても

新たな発見がありました。後期研修医に対する教育では、ワークライフバランスを考えるいい機会となりました。

プライベートなことでは7月に第3子が誕生して、それぞれ2学年違いで3人の子供をもつことになりました。出産だけでなく、育児に際して急な休みをとることが増えたため、その都度まわりのスタッフにはかなり助けていただきました。

研究活動については、なかなか研究テーマが決まらずに取り掛かりまで時間がかかってしまい思うように進まず次年度への課題となりました。

子供も増え、仕事や研究活動も行うとなると公私ともに時間の使い方が今後のテーマになってくると思います。臨床のレベルを落とさないという大前提のうえで、学生、初期研修医、後期研修医のモチベーションを上げ続ける指導を目標に次年度も頑張りたいと思います。

2. 拠点指導医・客員研究員

田宮 貞宏 県北教育拠点指導医

〔くまもと県北病院 院長／総合診療科〕

令和6年度の医療の変化と言えば大袈裟になるかも知れませんが、地域の基幹病院を職場とする私は大きな変化を感じ続けた1年でした。その主要な要因は「診療報酬改定」であるのは間違いありません。

施設基準の改訂に対応するため、病院は評価基準を満たす入院患者の割合を維持しながら、入院期間を短縮する必要が生じました。一昔前の月毎に傷病名を吟味、確定する感覚だと振るい落とされてしまう状況です。

個々の患者の診療を行いつつ、施設基準を維持するための評価基準を漏れなく把握し、全体で入院退院をリアルタイムに制御する毎日を例えると、終わりの見えない疾走感といったところです。決して1日や1年が短くなった訳ではないですが、この疾走感は時間の欠乏感なのだと思っています。

もうひとつの令和6年度の改革である「働き方改革」も大切な施策と思っていますが、残念ながらこの制度がもたらす時間の欠乏感もあると思っています。欠乏感があると差し迫ったニーズに集

中し易くなると言います。一方その他のことを無意識に排除してしまうようです。これは、そのまま令和6年度の私の反省点になります。

令和7年度は制度による欠乏感の中、本当に重要なものに集中しつつ、その他のことにも目配せをしつつ、気持ちよく疾走したいと思っています。令和6年度は横腹が痛んだり、喉から心臓が飛び出そうだったので。

小山 耕太 県北教育拠点指導医／非常勤講師

〔くまもと県北病院 総合診療科／
熊本県健康福祉部健康局医療政策課
熊本県へき地医療支援機構〕

「ドキドキが止まらない(動悸ではないですよ!)」

熊本大学に帰還して12年目、教育拠点に赴任して11年目に突入しました。

この11年で総合診療科医局も、たった3名の医局員から31名まで増加しました。それと共にくまもと県北教育拠点(当拠点)の医局員も2名から6名まで増え、発足当初とは比較にならないほど、教育と診療の幅が広がりました。これもひとえに、熊本大学医局員の皆様の支援あってのことと、感謝する次第です。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。これからも、新入局員を更に増やすべく、教育と診療の質の向上に努める所存です。

私個人としては、2023年4月から熊本県庁医療政策課に兼務の形で赴任し、これまでの教育拠点での取り組みを基に、当初の教育対象を熊本県北地域から熊本県全土に展開する機会を得ました。2024年1月から自治医大卒業医師が義務年限に赴任する現場に赴き、教育・診療支援を開始しております。昨年度の本報告書で、ワクワクが止まらない旨、お伝えしましたが、既に教育支援対象の先生方から直接の感謝のお言葉も頂戴し、当時のワクワクは、今後の発展へのドキドキへ変化しております。

最後に、2025年4月からは兼務から専任の形で熊本県医療政策課に移籍することになりました。このドキドキを将来の医局員の方が楽しめる様に、引き継げる仕事に育てる新しいステップを踏み、医局及び熊本県の組織としての飛躍のため、常に前向きに活動したいと思います。

引き続き、皆様のご指導とご鞭撻のほど、何卒

よろしくお願い申し上げます。

古賀 義規 客員研究員

〔御所浦診療所 所長〕

御所浦診療所に赴任して10年になりました。常勤の総合診療科医師2名と非常勤の総合診療科医師、整形外科医師、眼科医師による週1の支援、非常勤精神科医師による2ヶ月に1回の支援により運営しております。今年度も私以外の常勤医と非常勤の総合診療科医師は大学からの支援です。大変ありがたく感謝しております。

今年度の主な活動としては、御所浦診療所での外来診療・訪問診療、御所浦北診療所での週2回の診療・訪問診療を行いつつ、各種予防活動、保健・介護・福祉との連携に力を注ぎました。それとともに、研修医教育・医学生や看護学生への学生教育にも携わらせて頂きました。

2024年末で御所浦島の民間の診療所が休院することになり、当診療所が担う役割・責任も少し増えることになりそうです。

今後も特に離島医療・へき地医療の魅力を伝え続け、ごのような地域で働きたいと思える人材育成に微力ながら尽力したいと考えています。

片岡 恵一郎 客員研究員

〔小国公立病院 病院事業管理者〕

2018年度より、松井教授のご厚意により客員研究員として、小国公立病院に勤務しながら、地域医療支援センターに所属させていただいており、2024年度が7年目となりました。

大学より支援をいただく地方の立場としての状況をお伝えすると、今年度も、少子高齢化の急速な進行為地方を直撃しつつあることを肌で感じる1年となりました。小国郷の医療・介護のニーズは今後15年ほどは大きく減少しないと予測される一方で、それを担う人材の確保はますます困難を極めております。まさに「津波が来る前に、いかに備えるか」が問われる状況であり、限られた資源の中で縮小均衡を取りながらも、地域が持続可能であるための知恵と工夫、そして技術と連携の力が不可欠であると強く感じています。

このような状況において、昨年度より本格始動した「小国郷医療MaaS・DX推進事業」は、地域の課題解決に向けた一助となっています。国のデ

ジタル田園都市国家構想に採択され、熊本大学からもご支援をいただきながら進めてきたこの事業は、2年目を迎え、オンライン診療車「柴三郎号」が地域に根付き始めました。2024年度は約130名の住民に対する保険診療を行い、移動手段の制約や医療人材の不足といった、地域特有の課題を実際に緩和しつつあります。

また、AIやヒューマノイドロボットの進展も目覚ましく、マンパワーに限られる中、人間が“人間らしい仕事”に集中できる環境づくりへの貢献が期待されます。こうした技術の導入と連携により、持続可能な医療提供体制の実現を目指してまいります。

小国郷で進めている取り組みは、地域医療の未来を見据えた全国的なモデルとなる可能性を秘めており、今後も情報発信と実践を通じて貢献していく所存です。また、地域医療を志す学生や研修医の先生方にとって、リアルで多面的な地域医療の実習素材を提供できる場としての価値も、引き続き高めていきたいと考えています。

今年度も熊本大学をはじめ多くの方々から温かいご支援をいただき、心より感謝申し上げます。今後も、客員研究員として微力ながら役割を果たしてまいりたいと存じますので、引き続きご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

松本 朋樹 客員研究員

〔松本内科・眼科 院長〕

令和6年度は、牛深・本渡両地域の医療・介護資源を束ね、法人全体で“つなげるケア”を合言葉に挑戦を続けた一年でした。天草での総合診療の実践に取り組み、今年度も診療所(松本内科眼科)と天草地域医療センターの二足のわらじを続けています。慢性期から急性期まで、在宅から入院診療まで、地域の患者さんの継続性のある診療に関わることが出来るのが天草の総合診療の一番の強みであると感じています。

法人内の連携だけでなく、地域連携、多職種連携の強化のため立ち上げた地域団体「KAIGO!」も二期目に入り、地域の医療介護職との研修を継続しています。

また、2025年9月には天草の本渡地域に分院となる「天草まつもとクリニック」を開院し、緩和ケア専門医である妻と共に、訪問診療の拠点を

作っていきます。

僻地の医療体制は年々変化し、特に承継問題は大きな課題となっています。その中で、総合診療医の存在は、地域課題を解決するための大きな力ギとなると確信しています。

地域としても、島外からの企業参入や地域おこし協力隊を中心とした活動などの刺激を受けて、天草が過ごしやすい地域に変化しているのを感じます。そういった地域の魅力も発信していければと思います。

2025年も天草から、熊本の総合診療に貢献していきたいと思います。よろしくお願いします。

3. 総合診療科

武末 真希子 医師
[大学院生]

令和6年度も引き続き大学院生として研究活動を継続しました。ようやく本格的にデータの収集を進めることができ、令和7年度早期の論文化を目指して取り組んでおります。また、現在の研究から発展した研究など、在学中に臨床研究に対する知見をより深めたいと考えております。

次年度からは非常勤ではありますが復職し、臨床、教育業務についても役割を全うしていきます。大学院での学びを還元できればと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

松田 圭史 医師
[熊本大学病院 総合診療科]

今年度は、熊本県医師修学資金貸与制度の義務年限を終え、熊本大学病院に勤務することになりました。これまでは貸与医師という立場でしたが、今年度からは貸与医師・学生、そして熊本県の地域医療全体のマネジメントに関わる立場となりました。

その中で、地域で活躍できる総合診療医の必要性を改めて認識し、リクルートや教育にも力を入れていく必要があると感じました。

また、総合診療科の先輩・後輩と関わる機会も多くありましたが、診療だけでなく、研究や教育、学会発表、執筆など、様々な分野でご活躍されて

いるのを目の当たりにし、大変刺激を受けました。

今後も熊本県の地域医療、総合診療に引き続き関わっていくことになるかと思いますが、地域で学んだこと、大学で学んだことを活かしながら、広い視野を持って自分にできることをしっかりとやっていきたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

空田 健一 医師
[湯島へき地診療所 所長]

上天草市立湯島へき地診療所に赴任し3年目になりました。

熊本県医師就学資金貸与制度による義務のプレッシャーは想像以上に大きいものでした。満了できて、ほっとしました。

地域の医療に携わってきて、「熊本県に総合診療医がもっと増えてほしい」と強く感じております。

さて、第15回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会において、実行委員会特別企画である「田舎で楽しく医者をする方法」に参加しました。

記憶があやふやになってきておりますが、田舎に仲田和正先生が赴任された際、上級医より年に3回の旅行を推奨されたとのことで、旅の話がたくさんありました。

教育・やりがい・家族が大事と言っておられたと思います。

今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。申し上げます。

平賀 円 医師
[熊本赤十字病院]

医師9年目となる2024年度は、義務年限の最後の1年でした。この1年は自分自身のスキルアップのため、高次医療機関での経験を積みたいと考え、熊本赤十字病院の総合内科を選択しました。熊本市内で勤務するのは初めてであり、マクドナルドまで車で5分で行けること、ウーバーイーツなるものがあることに衝撃を受けました。

熊本赤十字病院は救急車の受け入れ台数も多く、内科への入院患者もかなり多かったように感じます。集中治療が必要な患者も多く、緊張感のある環境でした。また、血液腫瘍内科、腎臓内科、リウマチ膠原病内科の医師と協力しながら、総合内科というスタイルで診療を経験できたことも良

かったです。ネフローゼ症候群の診断から治療を行った患者や、急性骨髄性白血病の診断・治療導入・転院まで担当した患者のことは特に印象に残っています。

初期研修医数も多く、彼らとの「チーム診療」を経験しました。研修医のバックアップとして日々の回診でアドバイスをを行うとともに、私も指導医からのフィードバックを受けながら学ぶ機会にも恵まれていました。

また、論文抄読会に毎週参加し、水曜日本曜日のWEB勉強会には朝7時半から欠かさず出席しました。さぼろうと思えばさぼれる環境ではあるものの、あえてそこで自分に鞭打ち、学習の機会も確保できたことは良かった点です。さらに、研修医向けの外来診療セミナーの企画にも携わったり、レクチャーをする機会にも恵まれました。

この1年間、熊本赤十字病院で過ごした経験は、医師としてのキャリアの中でも非常に価値のあるものだったと感じている。今後は、5年ぶりにくまもと県北病院（前 公立玉名中央病院）に戻ってきました。これまで培ってきた診療の経験、教育への意識、そして困難から逃げない姿勢を活かし、地域医療の要としてさらなる成長を遂げたいです。

社会人大学院の方は、当初は週1で時間確保するとは言っていたのですが中々難しく、進捗はありません。内科専攻医の方の症例登録はぼちぼちといったところです。プログラム移籍に伴い、各所にご迷惑をおかけしましたが、県北病院でも引き続き頑張っていきたいと思います。

久保崎 順子 医師
[熊本医療センター]

令和6年度は、雑誌寄稿や院内学会の機会を通じて、自験例をいくつかまとめました。これまでと同様に、さまざまな症例を通して知見を広げることができていると感じています。

総合診療科には、他院や他科で原因不明とされたケースや、臓器ごとに分類できない疾患が多く紹介されます。個人的には、薬剤性、いわゆる医原病に注目する視点が重要だと考えています。

「クスリはリスク」という言葉がありますが、特に高齢者では、いわゆるDO処方はリスクになると感じます。SGLT2阻害薬によるケトosisで、嘔気や食欲不振、頭痛、呼吸困難感といった不定

愁訴を呈する例を、これまでに何例も経験しました。そうした視点を持って診ているからこそ気付けた面もあり、頻度としては月1回程度遭遇しています。一度、PPIによる大腸炎も経験しました。

薬が多い方が安心だという患者さんもおられますが、不調をきたしたときに内服薬を見直すことは、総合診療科だからこそ担える役割だと感じており、患者さんにも理解してもらえようわかりやすい説明を心がけています（処方医の立場も配慮していきます）。

そうした日々の診療の合間に、いま最も気がかりなのは、内科専門医の症例登録です。日々の業務と並行しての取り組みに追われています。

永田 洋介 医師
[球磨郡公立多良木病院]

昨年に引き続き球磨郡公立多良木病院に総合診療専門医として勤務致しました。

総合診療専門医として必要とされることを考えながら活動する1年でした。

総合診療科外来に加え、救急外来での救急対応、一般病棟管理や集中治療管理、診療所勤務、地域公演と様々な経験をしました。今年は医師会生涯教育講座で講師としてお話しする機会を頂き、総合診療専門医の展望に関しても講演致しました。開業医の先生と連携を深め、総合診療専門医が地域で活躍することで地域医療がさらに良くなることを願っています。今後も引き続き成長出来るように研鑽を積みたいと思います。

早川 香菜美 医師
[山都町包括医療センターそよう病院]

この1年間、そよう病院 総合診療科での診療と並行されながら、週に一度、大学病院 緩和ケアセンターでの研修にも精力的に取り組んでられました。また、自治医科大学卒業医師として、本年度をもって9年間の義務期間を満了されました。長きにわたり、地域医療に貢献してこられたご経験は、かけがえのない財産となることと思います（松井 邦彦）

下地 徹 医師

[天草市立河浦病院]

2023年7月より、天草市立河浦病院での勤務を継続しています。この1年で地域に徐々に馴染み、地元の祭りなどにも積極的に参加することで、地域とのつながりを深めることができました。

診療面では、新たに週1回の高浜診療所での診療を担当するとともに、関連施設である特別養護老人ホームへの回診を年間を通して実施しました。継続的に関わる中で、各施設の職員や患者さんと信頼関係を築くことができ、結果として診療の質の向上に寄与できたと感じています。

特に印象に残った取り組みとして、当院関連の2つの特別養護老人ホームと合同で勉強会を開催したことが挙げられます。それぞれ「施設からの救急搬送事例を基にした救急対応とDNAR指示について」と「人生会議」をテーマに実施しました。勉強会の企画段階から携わり、内容を組み立てる過程を通じて、企画運営の実践力を養う貴重な機会となりました。

また、今年度の個人的なトピックとして、総合診療専門医試験に合格することができました。今後は上級医として、後進の指導や教育にも一層力を入れていきたいと考えています。

松岡 隼平 医師

[阿蘇医療センター]

令和5年～6年度は、阿蘇医療センターで2年間の勤務を行いました。私は総合診療科ですが、ここでは内科医師として従事しました。働く場所により柔軟に働き方を適応させられるのも総合診療科の強みであり、また地域医療の需要にもマッチしており、日々必要とされている実感を強く感じられました。日々の外来・入院・救急外来業務に加えて、前年度も力を入れていた学生・研修医の教育にも注力しました。新たに呼内、脳内、代内、腎内、泌尿器の常勤の先生が増えたので、地域医療の弱点になりがちな臓器別専門診療も嫌厭せず積極的に診るように心がけました。更には内科症例での振り返りの時間を設けて、チーム全体での内科疾患全般に対する理解の底上げも図りました。幸い学生や研修医からも「楽しかったし勉強にもなった」という声も多数聞け、とても嬉しかったです。

他にも診療所所長や特別養護老人ホームの嘱託医も経験させていただきました。そういった現場での実際の医療提供や入所者管理を目の当たりにすることで、教科書には書いていない実状を知り、地域医療の全体像を理解するのにとても役立ちました。また、病院業務と並行した嘱託医業務はとても大変でした。入所者数も多いため、必要な時に必要な情報をすぐに確認できるような管理(カルテ記載の工夫など)を徹底することで、情報の齟齬の予防、二度手間の回避、不要な確認作業の削減を図りました。この色々な性格の違う業務を並行して行うための様々な工夫を通して「情報管理能力」が特に高まったと思います。

また、今年度1番頑張ったと言えるのは、総合診療専門医試験に合格したことです。この自分が義務履行を行いながら最短で専門医取得ができるなど全く思っていなかったのも、関係者の皆様には多大なる感謝を申し上げます。これから受けた恩以上のものを返していける様、総合診療科発展のため尽力していこうと思います。

最後に今年度の目標は「体調を崩さないこと」です。去年10回以上風邪をひいていたので、感染防御の基礎から意識していこうと思います。

本田 宏介 専攻医

令和6年度の上半期は熊本大学病院、下半期は小国公立病院の総合診療科に勤務しました。熊本大学病院では主に救急部で軽症から重症までの初期対応、入院症例を持ち、水曜午後は総合診療科の外来患者カンファレンスに参加しました。

救急部には救急専門医、各診療科の救急担当医師が勤務しており、各科の医師を通して該当診療科へのコンサルトもスムーズにいき、幅広いアドバイスを知識を得ることができました。また、血液検査、CT、MRIが必要だと思ったらいつでもできるのも強みです。下半期の小国公立病院にはCT装置、MRI装置などの医療機器が揃っていますが、夜勤帯での検査は検査技師呼び出しになるため、場合によっては聴診器と心電図検査だけで高次医療機関に搬送する必要があります。大学病院よりも、身体診察や病歴などの聴取がより大切になってくると感じました。また、小国が好きで、小国のできる範囲の治療で良いと言う患者さんが多いのも印象的でした。

西富 友哉 専攻医

令和6年度は天草市立御所浦診療所に勤務しました。受診される患者さんの多くはCommon Diseaseで幅広く、プライマリケアを学ぶ場としてとても良い環境でした。一方で、離島という環境もあり、不便なことも多く、抗菌薬を使いたいけど培養が取れない(そもそも抗菌薬の種類が少なく点滴にいたってはセフトリアキソンしかない)、グラム染色もできない、採血したところで外注なので結果がすぐにはわからない、血ガスも測れない、生食を点滴したいけど100mLパックしかない、レントゲンで胸写と腹単以外の条件は技師さんがいないのでうまく撮れない、外科に紹介した方がよさそうな外傷なのに夕方から船で遠くの病院に行くのは大変だからなんとかここで縫ってくれと患者さんに頼まれて縫合する、等々、これまでにない貴重な経験をさせていただきました。台風で停電し、エアコンも非常灯も消え、手をかざすと出るタイプの水道(ほとんどこのタイプ)も止まり、救急艇も出ない中で救急車が来た際には、江戸時代にでもタイムスリップしたかのようでした。文明の利器ペンライトが大変役に立ちました。

0歳～100歳オーバーまで幅広い年齢層の患者さんと接し、時には保育園や小学校の健診業務も行う中で、診療所が地域にとって必要性の高いものであることを実感しました。いくつもの成功と失敗を繰り返しながら充実した1年間を過ごすことができました。

足立 瑛彦 専攻医

今年度は、前年度より一人きりでできることが増えた。特に、誤嚥性肺炎と腎盂腎炎の診断と治療(抗菌薬投与)までできるようになった。

しかし、まだ課題は山積している。特に、患者や家族への接遇や、オンコール対応で不適切な応対をしたことで叱責を受けたことも、複数回あった。コミュニケーションエラーを起こす回数がありにも多いのが、現在自分にとっての課題の一つである。相手側と意見が食い違い、双方衝突しかけたときは、一旦落ち着いて状況を整理し、現時点で最良の選択をとるところから改善を試みている。

但し、患者家族とのやりとりの困難さは容易に

克服しがたい。臨床医として働き続けることに困難さを覚えてもおり、臨床とは別の進路に変更することも考え始めた。少なくとも、総合診療育成プログラムに所属中は、自分が一人でできることを増やすことと、改善すべきものを減らしていくことを考えたい。それから先は、まず研修を終えてから決めていくことにする。

田添 英典 専攻医

令和6年度は昨年に引き続き、くまもと県北病院で勤務をさせていただきました。4月から10月までは総合診療Ⅱの研修を行い、11月から翌年1月までは小児科の研修を行いました。総合診療Ⅱの領域では昨年に比べるとできることが増え、少しずつではありますが前に進んでいる実感を得ることができました。それと同時に、自分の未熟さを痛感する出来事も多々あり、身体診察や手技はもっともっと勉強しなければいけないと思いました。また、小児科研修では、今までほとんど触れてこなかった小児の感染症について、多くの経験を積むことができました。成人にしろ小児にしろ、正しい診断に至るためには丁寧な病歴聴取と診察が重要であることを学びました。

来年度は熊本大学病院や地域の病院での勤務を控えており、新天地で働けることを楽しみにしています。引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

藤本 千里 専攻医

自治医科大学の義務年限後半に入らる中で、今現在の自分に中途半端さを感じ、総合診療科の学問をしっかりと学びたいと思う気持ちが強くなったことをきっかけに、令和5年度より専攻医プログラムに入らせていただきました。令和5年末に出産し、生後3ヶ月の子供とともに派遣先の多良木町から実家に戻り、地元の病院であるくまもと県北病院で勤務させていただけたことは非常に感慨深いものでした。ただ、実際に勤務する中で、産後で体力がなかなか追いつかず、子供も保育園で風邪や胃腸炎を度々もらい、親子揃って体調を崩し、急な早退・病欠で現場の先生方にご迷惑をおかけすることばかりで申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

日当直の業務は体力的に余裕がなく免除いただ

いておりましたが、実家からの支援を大いに受け、この1年間で考え方に関する学びから、貴重な症例まで幅広く経験させていただくことができ、今後の派遣先でこれらの学びをしっかりと還元したいとより一層強く意気込んでおります。学会発表や論文執筆など学術的なことに時間を割く余裕がなかなかなく、しばらくは育児との両立を続けることで精一杯の生活となりそうですが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

4. 事務職員

無田 英昭 地域医療支援コーディネーター

年度末に修学資金制度創設15周年記念の講演会が開催され、3人のご講演を拝聴しました。県医療政策課の笠課長から、熊本は全国的には医師多数県であるものの、35歳未満の医師の割合は全国最小で、若手医師確保が大きな課題との報告がありました。地域医療支援センター長の松井先生から、15年間で約70名の医師が巣立ち地域医療に貢献するなど着実に成果が出ている一方で、医師不足病院間の格差など医師の偏在解消に向けては課題が残っているとの問題提起がありました。本制度の一期生で初の義務年限満了者でもある松田先生のお話から、地域医療に向けられた先生の熱い気持ちを感じました。地域医療に従事されるこうした先生方を応援し、地域の皆さんが安心して医療を受けられるよう、残された課題の解決も含めこの制度を適切かつ円滑に運用していくことが当センターの使命であると再認識しました。来年度は3年目となりますが、引き続き頑張っていく所存です。

川添 光芳 地域医療支援コーディネーター

令和5年4月に地域医療支援コーディネーターに採用され、令和6年度は2年目となり、これまでの経験を踏まえ、ある程度余裕を持って活動できたと思います。

8月に上球磨地域等で実施した夏季地域医療特別実習や、12月に山都町で実施した冬季地域医療特別実習は、事故やアクシデント等もなく順調に実施でき、学生さんが、地域医療の現場で一生

懸命かつ積極的に実習に取り組んでいる姿を目にして、大変頼もしく思いました。

また、私が企画・制作を担当している、地域医療支援機構の広報誌「COCODE」も、掲載内容をリニューアルしてページ数も増やし、義務を終えられる先輩医師のインタビューや、夫婦ともに医師であるご家族を取材し、仕事と家庭生活の両立などが垣間見れる内容などを新しく取り入れました。今後も読者の視点にたって、内容等を工夫していきたいと思います。

もう一つ私が担当している、地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座を中心にした地域医療支援体制の構築は、へき地などの医師不足地域の支援が、まだ十分にできていないので、令和7年度は、これらの課題に対応した事業の在り方等を検討するのが宿題と思っております。

令和7年度は地域医療支援コーディネーターの仕事も3年目になりますので、自分で考え行動し、地域医療支援センターや県庁医療政策課の方々に支えていただきながら、微力ではありますが頑張りたいと思います。

原田 淳子 女性医師復職支援コーディネーター

昨年度は女性医師・子育て医師支援専任の医師がおられず、女性医師の現状もよくわからないまま1年が過ぎましたが、今年度は堤龍子先生に専任医師として着任いただき、一緒にお仕事をして、医師生活の実際を少しですが知ることができました。

地域枠・自治医卒の女性医師意見交換会、通称「ジョイトーク!」は7回開催し、21名の先生方に参加いただきました。皆様お忙しい中でしたが、「色々話ができて良かった」「また参加したい」などうれしいお言葉も頂きました。地域枠・自治医卒だからこその疑問やご苦労など貴重なお話を伺えました。

また、出産経験のある先生方に「出産前後の勤務等に関するアンケート」を実施し、育休や勤務軽減の状況、困ったことなど率直なご回答をいただき、大変参考になりました。ご協力いただいた先生方には厚くお礼申し上げます。

この1年を通じ、年代・診療科を越えた先生方の繋がりはとても大切だと感じました。この輪が広がるよう、今後も微力ながらお手伝いしてまいりたいと思います。

山並 美緒 事務補佐員

今年度は主にクリクラ総合診療科のサポートと夏季実習のサポートをさせていただきました。

クリクラ総合診療科では、大学病院・くまもと県北病院・河浦病院の3か所から実習先を選択でき、それぞれ違った視点で総合診療について学ぶことができる実習内容になっています。どの受入れ病院も学生さんが少しでも快適に負担なく実習を行えるように苦慮されています。手厚い待遇で受け入れていただけることに毎年大変感謝しております。

また、夏季実習では、5年ぶりに球磨地域での開催となり、以前お世話になった医療機関へもまた伺わせていただきました。毎年感じるのですが、今年度も通常業務がある中、数か月前から無理を申して学生を受け入れる準備をしていただき、実習当日は心のこもったおもてなしをくださり、スタッフ一同感激しております。

共通して思うことは、どの医療機関も地域の行政機関も、学生の皆さんに多大な期待を寄せているということです。皆さんもそれを肌で感じておられると思います。その期待に謙虚に応えていかれることを、一熊本県民として切に願いながら、来年度も熊本の総合診療・地域医療を陰ながら支えてまいりたいと存じます。よろしくお願いいたします。

木口 知佳子 事務補佐員

今年度4月からお世話になっております。松井先生はじめ教員、事務の方々みなさん優しく迎えて下さって感謝しております。

この一年を振り返ると、地域医療ゼミの担当をさせて頂いたことが一番の思い出です。先生や学生と連絡を取りながらの準備と実施、不慣れで至らない点があったと思います。来年度はより参加率が高くなるようお手伝いしていきたいです。他にも、グラウンドラウンドのハイブリッド開催や、夏季実習への同行等初めて経験することばかりでしたが、事務の皆さんのお陰で緊張しながらも楽しく取り組むことができました。

私生活では、娘は1歳半を過ぎイヤイヤ期に突入、4歳の長男は戦隊モノに夢中で、バタバタとした毎日を送っています。子供の成長スピードに驚きつつ、私もまだまだ成長していきたいと感じ

ています。2年目は、総合診療・地域医療に少しでも貢献できるよう、日々の業務に率先して取り組んでいきたいと思っております。

横手 友紀子 事務補佐員

昨年に引き続き、今年度も機構(センター)業務のサポート、総合診療専門研修プログラムの管理、報告書作成などを担当させていただきました。

今年度は、「熊本県医師修学資金貸与制度創設15周年記念講演」が開催され、県医療政策課の笠課長、松井センター長、そして義務履行を満了された松田先生にご講演いただきました。私自身、その半数近い期間を本制度に関わってきた中で、もしこの業務に携わっていなければ意識することもないであろう、熊本県の地域医療を支える医師の存在を身近に感じられることに改めて深い感慨を覚えました。

また、こうして1年間の報告書を取りまとめる中で、多くの方々のご支援とご協力あってこそ、業務が成り立っていることを痛感しております。微力ながら、今後も熊本県の地域医療の発展に少しでもお役に立てるよう、より一層努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

また、日頃よりご協力いただいております関係者の皆さまに感謝を申し上げます。

10 あとがき

令和6年度の活動についてご報告をさせていただきましたが、今年度は地域医療支援機構設立11年目でありました。

今年度も熊本県医師修学資金貸与学生ならびに熊本県出身の自治医科大学医学部生を対象に、地域を学び・地域医療への理解を深めることを目的として、夏季および冬季地域医療特別実習を開催いたしました。実習では、学生たちはフィールドワークや病院見学などに加え、すでに地域で働かれている修学資金貸与医師の先生より地域医療の現状や課題、医師としてのキャリアパスなどの貴重な話を聞く機会を得ることができ、地域医療の現場を肌で感じる貴重な機会になったと思います。今後も学生たちが地域医療に対して高い関心を持ち続け、将来、地域医療を担う人材へと成長できるよう、本実習をさらに充実させていきたいと考えております。実習にご協力いただきました球磨郡公立多良木病院、そよう病院をはじめとした医療機関の皆様、並びにあさぎり町、多良木町、水上村、湯前町、山都町の行政機関の皆様方に、心より感謝申し上げます。

また修学資金貸与医師の3名の先生が本年度で義務年限を終えられることとなり、令和7年3月に県庁で木村知事より感謝状の贈呈が行われました。今後も実習や面談等を通して修学資金貸与学生ならびに医師の皆様のキャリア形成を支援してまいります。

また本機構の広報誌である「COCODE」は今年度より年に1回の発行となり、vol.8を発行いたしました。今後も編集委員として熊本県内の地域医療の魅力を発信してまいります。

最後に平井俊範機構理事長をはじめ、熊本大学のスタッフの皆様、熊本県医療政策課の皆様には多大なるご指導・ご支援を賜り、深く感謝申し上げます。来年度も変わらぬご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

熊本大学病院

地域医療・総合診療実践学寄附講座 特任准教授

地域医療支援センター 副センター長

荒木 智

熊本県地域医療支援機構／熊本大学病院 地域医療支援センター

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1

Tel:096-373-5627 Fax:096-373-5796

E-mail:chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp

HP:http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/



熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1

Tel:096-373-5794 Fax:096-373-5796

E-mail:chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp

HP:http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/dcfgm/

